
逢魔が時！

高城来夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔が時！

【Zコード】

N1341Y

【作者名】

高城来夏

【あらすじ】

およそ千年」とに交互に訪れる「生の刻」と「魔の刻」。生の刻から魔の刻へと移り変わる現代を生きる少年、成瀬巡が会ったひとりの少女（幼女）。

彼女は人ならざるもの、物の怪だった。巡と物の怪たちとの交流を描く、ライトシリアスほんのりコメディな、半オムニバスファンタジー。

以前に自ブログと自サイトで公開したストーリーを、加筆修正の

うえ順次公開。

完結済みのものですが、修正が多いのでのんびりまったりと更新予定です。

掃除も済ませて終礼も終わった放課後。

放課後はクラブ活動のある児童以外は速やかな帰宅を推奨する『私立藤乃木小学校』の校庭は、今はサッカークラブの活動で賑わっている。その面々を時々横目で見ながら、彼は教室で本を広げていた。

物静かな文学少年。

に見えなくもないが、実際に机の上に広げていたのは「山菜・野草」のミニ図鑑だ。

「なんだー、お前らまだ残つてたのか？ 用事がないならさつと帰れ」

教室で無駄話に盛り上がりを見せていたクラスメイト数人は、のんびり教室に入ってきた担任教師を見とめて「はーい」とお行儀良く返事をしてみせ、仕方ないとばかりに教室を後にする。さよならー、と間延びした挨拶がお決まりだ。

「で、成瀬。お前はなにやつてんの」

歳若い担任教師に広げていた本を覗き込まれて、成瀬巡はパタンとそれを閉じた。

「山菜」？

首をひねるような仕草を見せた担任、朝比奈高之は、ああ、と思い出したように屈めていた背筋を伸ばす。

「もしかして、来週の実習のか」

言われて巡は素直に頷く。

「予習を」

しゃあしゃあと言い放つ少年に、朝比奈は微妙な苦笑いを返す。

「予習結構だが、それはむしろあんちよこってヤツだろが」

来週の実習、と朝比奈が言つたのは、週明けにある家庭の授業での実習だ。

誰にも聞かず頬らざそこいらにある草や木の実を自分の判断で持ち寄り、極力食べられるものは食べる。食せるものが何割あるかというちよつとした実験もある。

「」のおかしな実習案を出したのは、朝比奈本人だ。

巡の通う藤乃木小学校では、授業案は担任に一任されている。一任と言つても、もちろん主任、教頭の検閲は入る訳だが、よほどやる気のない案以外は、するりと通つてしまつゆるい校風だ。良い案に関しては、学年を通して採用されたりもする。

それなりに自由だが、教師の技量が試される環境である。

もつとも検閲を通つたこの実習、せっかくの家庭の授業でもつと華やかなそれらしい料理を作りたい女子には大変不評だが。菓子だの洋風料理だのを実習で作りたいお年頃、六年生だ。食えるんだかそうでもないんだかわからない葉っぱや木の実を煮たり焼いたりしたい生徒はそれほど多くない。

将来的に役に立ちそなことヨビ、子供たちにまつまらないものなのは、世の定説。

まあともかく、今回の実習に関して言えば、予習をするといつのはつまりカンニング行為にあたるといつ訳で。

「別に、実習で見たりしないよ」

「そーゆう問題か」

実習では、一時限連続である時間割の、最初の一時限を校外での収穫に当て、あとの一時限で調理をする計画になつていて。せっかくだから、食べられるものを収穫したいと考える者がいるのもつともで、巡のように放課後の教室で堂々とではなくとも、隠れて下調べをする熱心な生徒は他にもいるだろう。だから朝比奈も、深く

は突っ込まない。

「まあいいや、お前もさつさと帰れよ」

授業が終わつたら、用事のない者は居残り寄り道せずにまつすぐに帰る。これはこの学校でなくとも、普通にありがちなルールだ。仕方がないから、巡も読んでいた本を鞄にしまつて席を立つた。

「先生、さようなら」

「はいさよーなら。下見とか言つて寄り道するんじゃねーぞ」

「さくら。巡、図星をつかれた。

「夕方つてのは、魑魅魍魎や妖怪どもと出遭いややすい時間帯だつて言われるからなー」

にこやかに言つ担任教師に、巡はなんとも微妙な視線を送る。魑魅魍魎という言葉はよくわからないが、妖怪はわかる。それがいわゆる、フィクションの物語の中でしかお目にかかつたことがない存在であることも。

「怪しいヤツを見る用つきをするな

怪しいヤツを見るんだから仕方がない。

「昔から言われてることだぜ。まあ、夕暮れ時つてのは、人の心が狂う、犯罪の起きやすい時間でもあるつてこつた。変な事件に巻き込まれないように、とつとと帰りなつて話。オレはまだマスクミに退路をふさがれたくはねーぞ」

人の心が狂うとかはいまいちわかりにくいが、言いたいことは何となくわかった。

しかし「まだ」つて、いつか未来ならいいんだろうか。ていうか、建前でももう少し自分の生徒を心配する発言は出来ないだろうかと巡はぼんやりと思つ。

「気をつけます

それだけ言い置いて、巡は鞄を肩からぶら下げて教室を出た。

「メー……グー、帰る～」

誰もいなくなつた六年一組の教室に、ひょつこつと顔を出した少女がひとり。

くるりと見回す教室には、もちろん、だれも残つていなかつた。
「あれえ？ 部活ないから一緒に帰るつって言つておいたのに……」
巡のふたつ上の姉、芽衣^{めい}だ。

暇な日を見つければ、わざわざ隣の敷地の中学校から顔を出す、弟大好きブラコン姉。

完全エスカレーターではないが、小中高と隣接した場所に立つ藤乃木学園グループにおいて、その中学に通う多くの生徒はこの小学校の卒業生だが、卒業して一年も経つのに、未だに我が校のような顔でほつつき歩くのは、この芽衣くらいのものだ。

まとめても、すぐに解けてしまいそうなサラサラのストレートヘアを指にクルクル巻きつけながら、芽衣は唇を尖らせる。

「最近メグって冷たいよねえ。寂しいなあ」

いじける素振りで不満を漏らしてみたところで、他に誰もいないから意味がない。

独り言の多発には気をつける。

そしてそんな姉との約束などキレイさっぱり忘れている弟、巡の方はといふと。

担任の注意など聞くはずもなく、学校の裏山の雑木林へと足を運んでいた。

別に、実習にそんなに真面目に取り組みたいという情熱があるわけではないのだが、やはりせっかくむしり取つて行くのなら、食べられるものの方がいい。自分の選んだものが食えない部類に分類さ

れるのは、ひょっとシャクに障る。一応彼にも、なけなしのプライドのよいうものはあるのだ。ウケ狙いに走れる性格だったなら、世渡りの面で将来有望なのが。

夕方とは言つても、夏も間近な6月の放課後は、まだ太陽が眩しい。今日は天気がいいから、ちょっと暑さも感じるが。

朝比奈の言つた、人の心も狂わせがちだといつ夕暮れ時。それを俗に、逢魔が時、と言うのだが。

今この明るさが、そんな怪しげな雰囲気など、まったくと言つていいくらい感じさせない。もう少し日が落ちなければ。雑木林の中はそれなりに薄暗いが、それは夕闇のせいではなくて、単に木々の作る日陰のせいだ。

一度は鞄にしまった図鑑を取り出しながら歩く。

腰のあたりの高さにある鞄をあさつていたせいで、田の高さくらいの空間をふさぐ細い木の枝に気付くのが遅れた。

危ない、とギリギリでかがみこんで、その枝をくぐり抜けた後に背筋を伸ばして。

次の瞬間、バサリと田の前に降つてきた何かに驚く余裕も無く、巡はその物体にボスンと顔を埋めてしまつた。

「ぶつ……」

柔らかい、枕のような布の感触。

一秒ほど固まつてしまつた後で、慌てて半歩退いた。が、目の前にある物体が何なのか、目視できない。

さらにもう半歩下がつてから『それ』をマジマジと眺めた。上からアマまで。

なんだ、これは。

見たままを言つなら、それは、少女。というか幼女。

そこいらの幼稚園にでも通つていそうな幼い少女が、絡み合つた枝に器用に下半身を支えられて、逆さまにぶら下がつていた。

芽衣のようなまつ毛らストレートではなく、ふわふわで茶がかつた長い髪。

その髪をゆらゆらと揺らしながら、少女は幸せそうな顔で眠つている。よう見えた。逆さ吊り状態で、その顔は微妙に笑つていて、「パンツ丸見え……」

真つ白な肌着らしきものは重力にしたがつて盛大にめくれ、巡がこれまで実際に目にしたことのない形状の、ふつくらじギヤザーの入つた下着　いわゆるかぼちゃパンツ　が丸出しになつっていた。

なんでこんなところに女の子が。

なんで幸せそうにぶら下がつてるんだ。

大体、いくらちょっと余所見をしていたからつて、コレに気付かない訳あるか。ずり下がつて来たにしたつて、こんなのが進行方向のそつ高くもない木の枝に絡まつてたら、もつと早くに気付くはずだ。さつきまで確かにいなかつたと思つのに。雑木林のマジックだろうか。

というか自分は今、このパンツに顔面から突つ込んだのか。いやパンツはともかく、何が何だかわからない。

巡の思考の回転は続く。

そう、往々にして変化とは、唐突にやつてくるものだ。

これが、巡と『少女』との出逢いだった。

とりあえず、だ。

未知との遭遇を果たした巡、思いつく選択肢はふたつあった。
とにかく少女を枝から下ろしてやるか。もしくは、見なかつたことにするか。

迷わず後者を選びかけた。別に枝に絡まつて難儀している訳でもなさそうだし、むしろ幸せそうな顔で眠つているのを、起こすのも申し訳ない。

そうだ。知つたことではない。

しかし、微笑む寝顔で逆さ吊りになつていた少女が、うつすらと瞼を開き始めた。

手遅れだ。逃亡失敗。

いや、その場で踵を返せばまだ間に合つたのかもしれないが、開きかけた少女の瞼をうつかり注視しているうちに、数秒にも満たない機会を逃してしまつた。

間をおかずにはパカンと開ききつた大きな瞳は、逃げ腰だった巡の姿をしつかりと捉えていた。

「おお～」

逆さ吊りの少女。ニヤリと満面の笑みを作つた。

「ひさしぶりだの～」

ひさしぶり？

お前なんか見たことも会つたこともない。

声にできず心中だけで反論する巡にはまるで構わずに、少女は下半身に絡まつていた枝から、実に簡単にスルリと抜け出した。

今までずり落ちなかつたのが不思議なくらいの滑らかさだ。

そのままクルンと半回転して、ストンと地上に着地する。

幼児のクセに器用な。いや、何でも体得するのが早い幼児なら、これ位のことは朝飯前なのか。 そうなのか？

着地した時に巡に背を向ける形になつた少女は、元氣にクルリと振り返つた。

「元氣にしていたかの」

二口二口と巡を見上げる満面の笑顔。

「……」

返事をしていいものかどうかも判断できない。

「元氣じゃなかつたのかの一？」

笑顔のままにこくりと首をかしげる仕草はまったくもつて普通の少女のそれだが、普通の少女が林の中で逆さ吊りになつているのを見たことはない。つまりは普通でないということでいいのか。色々なことがおかしいと認識しつつも、どういう反応が正しいのか、巡にはわからない。

「誰だ、お前」

結局、ひねりも何もないそんな一言が口をついて出た。

見た通り自分は元氣だが、見たこともない幼児に、そんなお伺いを立てられるいわれはない。木の枝に絡まつて逆さで熟睡する知り合いなどいはずだ。心当たりがない。

「なんだ、冷たいな。……まあそうか、人間はいちいち面倒くさいからの」

齡十年に満たなそうな少女、まるでこの世を悟つたような口調だ。

「人間と話をしたのは、実に久しぶりだ。ぬしという個人に会つたのは、初めてかもしけんがの。どうだ。人間は元氣かえ？」

「……」

言動が、ヤバいような気がする。というか、何かを言われてもそれが意味のある言葉として頭の中にまで届かない。

朝比奈先生、怪しいヤツ扱いしてしまつて「めんなさい。」言いつけを守らなかつたせいで、本当に怪しいヤツに山に遭つてしまつました。

巡は、ジリ、と足を後退させた。

こんなおかしなヤツと、係わり合いになるのはマズい気がする。巡は、クルリと踵を返すと、物も言わずにその場から駆け出した。見なかつたことにするのは手遅れになつたが、とりあえず気持ちが逃げを打つた。走りにくい雑木林だが、全力で逃げれば幼児ごとに追いつかれるはずはない。ここで逃げてアレの視界から外れることさえできれば、きっともう会うこともないだろう。そう思つたい。家や学校の近所というのが少々の不安要素だが。

「急に走り出すとは何事だ」

耳元で、声が聞こえた。

「うわああああ……」

少女が、いつの間にか自分の背中におぶさるよつと張り付いている。巡は自然の成り行きで急停止した。

「せつかく会えたのに、話もしてくれんのか。大体、今逃げても困るのはぬしなんだがの」

どうやつて追いついたのか。どうやつて走る巡の背中に飛びついたのか。まるで気付きもしなかつた。

さつぱりわからぬ。氣味が悪い。普通じやない。

「お前、誰だ！ お前なんか知らない！」

「だーから、ぬし個人と会うのは初めて、だとちゃんと言つてあるだろ。永い時間を眠つて過ごすしかなかつたわちを、少しくらい歓迎してくれても良さそうなものだ」

何を言われても、頭の中に浸透してこない。ちゃんと日本語でひとつひとつの中の言葉は聞き取れるが、少女の言ご回しが、ひとつ一つの流れで理解できない。こういうのを電波といつのだらうか。

「何を言つてゐるのかわからない！ はなれろ！」

自分を背負つたまま怒鳴る巡に、少女はうーんと困つた顔を見せる。

「そりやあ、きちんと話も出来なければ理解のしようもあるまじよ。まだ先駆けのこの時代、ぬしがわちと出会つたのも、その力ゆえの縁なのだからして、話くらいしても損はないと思うぞ」

言いながらも、少女はフウとやけに大人びたため息をもらす。

「もつとも、いつの世も人間というのは、他のものを受け入れがたい性質をしておるがの～。そうでなければ、いくら魔の刻が過ぎたとはいえ、こんなにわちらが隅に追いやられることもなかつたろうに」

さつきから、巡には言つてゐることがまるでわからない。

どいぞのオカルトマニアが喜びそうな単語が聞こえなくもないが、それを普通の小学生である巡が理解するのは難しい。

ストンと、少女は巡の背から飛び降りて、素早く彼の正面に回つた。

「ぬしにもわかりやすいように、結論から言つてやろう」

相変わらずの、満面の笑顔。しかしこの状況では、つられて笑い返すこともできない。

「わちは、人間ではないよ」

きた。

きたきたきた、来ました。

私は宇宙人ですとか異世界から迷い込んだついでに世界を救うとか、そういう発言が得意な人種か。もちろん巡はそういう世界に明るいわけではないが、自分の交友範囲に存在しない怪しいタイプであること位はわかる。余計な心配だが、この子の親は自分の娘がそういう発言をすることを知つてゐるのか。それとも親兄弟が伝説の戦士か。

「世も末だ……」

つて、つられるように難しい言葉で呴いてしまった。

「もうだの。生きる者の全盛の世は終わり、これからは魔の刻となる。その移り変わりの時代。今はまさに、逢魔が時、なのだよ」

巡の言葉を受けて正体不明の少女がにこやかに答えたらしいが、彼はそれをやけに遠くで聞いている感覚があった。

結局やっぱり巡には、言葉の意味はさっぱりわからなかつた。

言つている意味がわからない。

そう呟いた巡に、少女はやれやれと苦笑しつつ左右に首を振った。

「物わかりが悪いの~」

その言葉に、いささかムツとする巡。

「人間じゃなって言うなら何なんだ」

どこからどう見ても人間にしか見えないじゃないか。まあちょっと運動能力が高かつたり、木にぶら下がつたりはしていたけど。

少女は、一瞬フッと遠くを見るような目を見せる。こういう見た目に似合わない大人びた仕草も、巡のカンに障るというか、馴染めないというか。おおよそこの年頃の少女がやりそうにない振舞いを自然とやられてしまうと、彼の感性が追いつけない。大人びた仕草を好む、ちょっとおませな女の子とかいうのとは、まるで違うのだ。余裕のありそうな笑みとあいまつて、その様子を例えるなら「老獪」という言葉が似合うだろうか。もちろんそんな単語は巡は知らないが。

「さあ、何なんだろうな。人間にはよく、魔物だの鬼だのと言われておつたがの~」

「これのどこが魔物だ。それに、鬼なら角でも生えて~いそうなものだ。」

巡は、『ぐぐぐ~』く一般的に魔物だの鬼だと呼ばれる架空の姿を思い描いた。もつとも、魔物とひと括りにしてしまうと、それは曖昧すぎて良くわからない。けど少なくとも、魔物というのは恐ろしく人とは違う姿をしているものというのが巡の認識だ。

「ああ、妖怪とも言われたな。わちは、遺伝子を継承してこの世に『生きる』存在ではないからの。生きててもいなし死ぬことも出来

ん。そんな存在だ

つきあつてられない。

魔物だの生きてないだの、意味不明な言動を臆面も無く言い募る幼児の相手など、これ以上していられない。

「妄想なら自分の頭の中だけにしてくれ。僕は帰る」

クルリと振り返つて、歩き出す。

「そうだの。立ち話もナンだし、ぬしの住処へ連れて行け

「冗談じゃない！！」

巡は年相応に大人気なく、マジで少女を睨みつけた。絶対にそれは許さないと、その表情で語つている。しかしあれだけ全力で走る巡に取り付いてきた少女だ。本気で家まで来る気なのだとしたら、それを止める対策は無いようだと思える。

「いやいやそれはぬしが困る。わちの話は聞いておいた方がいいと思うがの～」

「聞きたくない！」

何が一番苦手って、話の通じない相手が一番苦手だ。

巡はここに来て痛感する。今までそういう相手に出会つたことが無かつた。否と申し立ててもスルリとかわされてしまつよくな経験など無いのだ。いやもちろん、違う嫌だと思うことを聞き入れてもらえなかつたことは何度だつてあるが、それにはちゃんと、それなりの理由というものがある。今回相手にしている少女は、そういうケースからはかけ離れているのだ。

何を言つても、のれんに手押し。

理解しようがしなからうが、おとなしく従おうが反抗して怒鳴るうが、目の前の少女は好きなことを言い、好きなようにする。きっとそのニヤニヤした笑みを顔に張り付かせたままで。巡には、彼女の電波話を聞く以外の選択肢が与えられていないうらしい。もしもちゃんとした理由があるのでとしても。

それは今、巡の理解の範疇外だ。

結局巡は、その場から脱兎の如く逃げ出した。

再び追いつかれてしまうのかもしれないが、今の巡には、他の方法を思いつくことが出来ない。こうこうのとちゅうとでも係わったら、絶対にろくな結果が待っていない。

誰かに教わったわけじゃない。そう“思つた”のだ。本能と呼べるかもしない部分で。

「仕方のない奴だの……」

その場に立ち尽くしたままの少女は、その場から巡を追いかけるでもなく、ただ走り去る彼の姿を見送つていた。

何なんだ、あの幼児は。

巡がそう思つたのは、今日何度も。

家に駆け戻る間にも、時折ちょっと道をえてみたりして、何度も振り返つたり、あたりを見回したりした。背後にも気を遣う。また気付かないうちに背中にぶら下がつているかもしれない。

そんなこんなしながら、いつもの倍以上疲労して、巡は家の前までたどり着いた。

あがつた息を整えながら、何かの気配がないか、キヨロキヨロと家の周りを見回す。そして大きく振り返つて、背後も確認した。よし。誰もいないことを確認して、家の門へと向き直つた。

「……がぬしの家の」

「……ッ！」

田の前の開いたままの門の内側、ちょっとした庭ともいえる芝生にはめ込まれている、玄関へと続く石畳の上に、少女が立つていた。

「 デッ……」

「 どうして、とか、どうやって、と言いたかったのかかもしれない。けれど動転した巡の口からそれらの言葉は出でこなかつた。

「 一度話をした人間の気配を追うのは簡単だ。それにわちはこう見えて、ぬしらのように確たる器は持たん存在だから。重力の束縛から逃れることも可能だし、形をえることだつてできなくはないのだぞ。まあわちはちと、変化の類いは苦手だが」

ぬしは今いち信じられんようだから、と、少女は勢いをつけることも無く、その場からヒヨイと小さな門の上に飛び乗つた。直立の姿勢を崩しもせず、スッと飛び上がって音も無く一メートル以上の高さがある狭い門構えの上に、ストップと揃えた両足で立つたのだから、それは尋常な能力ではない。

驚愕で田を見開く巡を尻田に、せらに少女はトンとその足場を蹴つた。

一瞬後には、五メートルほど続く石畳の奥にある玄関の遙か上、二階建ての屋根の上に、その姿があつた。

「 な……ッ！」

「 どうだ？ 人間にはなかなかできる」とじやなかろ？」

ストーンと放物線を描いて、少女は再びこともなげに巡の目の前に飛び降りた。

驚いて一步後退した拍子に、巡は体勢を崩して尻餅をついてしまう。少女は続けざま、そんな彼の傍にスッと近寄り、その身体をこともなげにひょいと抱き上げてみせた。

「 ちょ、あ、……う、……ッ」

支えられるような安心感がない。

まるで宙を浮くような感覚に、巡は身体を硬くしてただ呻いた。

物理的に、彼女の小さな身体で倍ほどの身長がある巡の身体を支えきるのは難しい。土台も小さければ、リーチも短かすぎる。けれど彼女は、純粹にふたつの掌だけで、巡の身体を”持つて”いた。

「 ぬしの身体がバランスも崩さずにわちのちいっちゃん手の上に収

まつておるのは、わちの『魔』の部分の力ゆえよ

ニヤーっと笑つたあとで、少女は巡の身体をほいつと地面へと戾した。いささか気遣いのない降ろし方だったが、それに対する感想を持つ余裕すらも、今の巡にはない。

本格的に、それは幼児に出来ることではない。いや、大人だって、多分。

人間じやない、なんてそんなありえない話を、本気で信じるというのか。いや、人間だつて、何か特別な訓練でも受ければ、そのくらいのことはできないわけじやない。いや絶対できるはずだ。できなくちゃいけない。そうでなければ、目の前にいるこれはなんなんだ？

巡はぼんやりと座り込んだまま、目の前で胸を張る少女を眺めることが出来なかつた。

だけど人間じゃないって。

人間にしか見えないのに、人間じゃないてどういうことだ？
かといって、犬や猫みたいな動物だの、昆虫だのという説でもない。
少なくとも今はつきりわかるのは、巡にとつて今まで見たことも
会つたこともない種類の『人間じゃないもの』ということだ。

「人間じゃないって、魔物とかって、じゃあなんでそんなんのが急に
僕の目の前に出てくるんだ！」

混乱する巡に、少女はニヤニヤと笑いながら答える。

「だからそれを説明してやるうとこういうのに、ぬしが逃げるから余計
な手間になるんだろ？が」

「……ツ」

当然の反応だ。

そう言い返そうとした瞬間、玄関のドアがガチャリと開いた。

「巡なの？ なあに？ 家の前でそんな大きな声で」

ひょっこりと顔を出したのは、巡の母、由美香ゆみかだ。

「母さん」

「やつぱりメグね？ んん？ お友達？」

巡が食つて掛かっている相手の少女を見とめて、由美香はキヨト
ンと彼女を眺める。

「違……」

「そうだ、お友達だ。なんだ、ぬしの母親かの。これはまたふりて
いーなおなごだの～」

専業主婦である母が家にいるのは当然で、玄関前で騒いでいれば
発見されてしまうのも至極当然だ。それを失念していた巡は母と少

女を交互に見てひとり焦るが、「ふりついー」とか言われた由美香の方は、あからさまに喜色満面になつた。

「正直ないい子ね～。メグつたら、こんなところで立ち話してないで、さっさと家に入りなさいよ」

巡は頭を抱える。

少しは疑つてくれないか、母親。こんな歳の離れた友人を見たことなんてないはずだ。その辺で出会つた子と、速攻打ち解ける性格でもないのだから知つてゐるだろうに。けれど、だからこそこうやって玄関前に顔を揃えてしまつてゐる限り、母親から見てお友達にしか見えないのも道理だ。

得意気に『お友達』だと、巡の足に腕を回す少女を振り払いにかかりつていると、玄関で別の気配が動いた。

「メグ、帰ってきたの？」

うわ。巡はげんなりとした顔になる。

母の背後から顔を出したのは、姉の芽衣だ。別に姉を嫌つてゐる訳ではないが、さらにこの場の混乱を増幅させそうな存在ではある。「メグつてば、私よりも先に帰つちゃつて、どうしてこんなに遅くなるのぉ～？……あら」

ブンブンと足を振る巡に引っ付いてゐる少女を、ぼんやりと眺める。

「もしかして、デートだつた？」

「バカをいうな！」

心なしか寂しそうな表情を浮かべる姉。

誤解だ寂しがるな！　いや、そうじやなく！

「部屋に行く！」

これ以上ここでやいやいと言つても仕方がない。そうでなくとも騒がしい家族がここに一人もいるのでは、とてもお話し合いなんて出来る訳がない。そもそもなんでお話し合いなんてしなければならないのか、その点が巡には本当に謎だったが、直面してしまつた出来事は、解決しなければどうしようもない。

「おやつないから、買つて来たらお茶持つて行くからね~」
少女を引きずつて玄関を通過し、一階にある自室に向かう巡に、元由美香が声をかける。が、巡はそれに返事もせずに、ズンズンと階上を田指した。

自室に滑り込み、バタンと勢い良くドアを閉める。

「最近の家は縦いでつかいの~。それに木の匂いはするのに、姿が見えないではないか。どうなつてるのだ」

巡の家は、木造モルタル一階建てだ。けれど確かに、目に見える場所にあからさまに発見できる木材は少ない。この家から木の匂い、とやらを感じるこの少女は、一体何なのか。

「お前、何なんだ。なんで僕をつけ狙う?」

「人聞きの悪い……」

詰め寄る巡に、少女は呆れた顔を見せながらも、トコトコと部屋の奥にあるベッドに向かつ。そこにボスンと跳ね上がって腰掛けた。どうやらそこが一番居心地が良さそうだと狙いを付けたらしい。

「わちがぬしと会つたのは、別にわちが狙つたからではないよ。むしろ、原因はぬしの方にあるんだがの」

「何だよ、それ」

「ぬしがわちを発見したのは、ぬしが持つ『おつかま逢魔』の力ゆえだ」

「逢魔?」

巡は、オウム返しに聞き返すことしか出来ない。

「わちが人間ではないということは理解できただろう。そこから話を進めるがな。この世界は、千年」と時代を変えて、ふたつの存在の安定を保つてきたのだよ」

生の刻と、魔の刻。

少女はふたつの時代をそう称した。

「生の刻とは、ぬし等のような命ある者たちの繁栄の時代を差す。そして魔の刻とは、わちらのよつたな器や命を持たず、魂だけを持つ存在の繁栄期のことだ」

命が無く魂だけ、というのが、巡には言葉だけでは理解できない。だつて普通に動いてしゃべつてるじゃないか。

「まあ疑問もあるうが、大筋だけは最初に理解してくれ。つまり、これまで千年の間続いた生の刻が終わりを告げ、これからは魔の刻に移行する、その移り変わりの時代なのだよ、今は」

生の刻においては、少女のよつたな『魔物』と称される存在は、力が弱まり、ひつそりと姿を隠す。対してこれから来る魔の刻においては、その立場は逆転する。

少女は、そう解説した。

「なんだそれ。じゃあ、これから千年は、人間は消え去るとでも言つつもりか？」

バカバカしいにも程がある。

が、少女はそんな巡の言葉には、首を横に振つた。

「生きている者というのは、魂だけのわちらとは存在する力 자체が違うからの。わちら魔の刻の住人には存在しない『生命力』を持つているから、消えてしまうことはないよ。ただこれからは、魔物と呼ばれる存在の力が強まる。それらを実際に目に見る人間も多くなるだろうよ。少なくとも、人間と同じくらいの数はいるであろう魔物が、徐々に目を覚ましだす。そしてそれらが世界を闊歩し出す。まあ、時代の影響で生きている者の数は少しは減るかもしけんの。これから千年は、そんな時代だ」

まあ良いではないか、と、少女は高笑いする。

「どうせぬしが生きているのは、せいぜい移行の期間だけではないか。その後の世界など、どうでも良からうよ」

「……移行？」

うむ、と少女は頷く。

「生の刻から魔の刻までの移行。これにはきっと百年くらいはかかる」

る。本格的な魔の刻を迎える頃には、今この世に生きている人間の殆どは、残つておらんだろうよ」

そう説明をされれば、そうなのかと思うしかないが。

実際に、百年後の世界のことなんて考えたつてピンとこないが、だからといって「そんな未来の話なら、まあいいや」と笑い飛ばせる訳はない。だつて今自分は、人間の危機を宣告されているのではないか？

「なんでそんなことが起こらなきゃいけないんだ」

食つて掛かりそうな勢いの巡に、少女はプウ、と膨れてみせる。

「わちに怒るな。そういう仕組みなのは、どうしようもなかろ」

「そんな無責任な」

これは世界の流れであつて、少女のせいではない。そのような説明をされ理屈ではわかつても、誰かのせいにしてしまいたい巡だ。聞かされた話の内容は、巡にとつては事件のようなもので、そして犯人のいない事件など自分には理解できない。天災のようなものだと説明しても納得できるかどうか。

「……結局人間は自分本位だの。わちらは千年間もずっとこの時代を待つておつたのだぞ。わちらの存在を隅に追いやつて、記憶からも外してしまつたのは人間の勝手ではないか。わちらはこの世に存在すらしてはならんということか？」

そういうわけでは、ないけれど。

「昔から人間というのは、他の存在を許さなかつたな。人間以外の生物の方が、人間より知能は少ないが、あるがままを受け入れてくれるだけ楽だの。人間は己が世界の王者とでもいうような顔をして、少し異なるものは徹底的に排除しようとする。そんな強い精神を持つ者が力を満ち溢れさせる生の刻では、魔物など殆どこの世に姿を残すことなどできん。ずっとわちらは、目に見えぬ存在となつて眠つて待つことくらいしか出来んかつたわな」

少女はちらりと巡を睨みつける。口角をつり上げたままのそれはどこかあきれたような表情で、怒つているような素振りではなかつ

たが。

しかし、そうは言われても。

魔物なんてそんな存在、自分はこれまでこれっぽっちも知らない。いや、知つてはいたが、現実にあるものだなんて思いもしない。記憶していないことを人間自身のせいだと言われても、巡にはやはり素直に納得することが出来ない。

「これから増えるだろうが、まだ逢魔の力を持つた人間は少ない。だが、いち早く時代の移り変わりを自覚できるぬしは幸運ではないか。しかも優しいわちが、いちいち言葉で説明してやつてているのだぞ」

ありがたがれとでも言つつもりか。

大体、巡には逢魔の力というのが何なのかわからない。

「わちらの様な存在は、生ある者には視覚で捉えにくい。そんなわちらを認識する力を『逢魔の力』というのだ。今は数が少ないが、これから世界が魔物を受け入れる体勢になれば、その力を持つ者も増えてくるだろうよ。それは生ある者が力を増すからではなく、わちらの存在が強くなつて、認識しやすくなるからだが。ぬしはつまり、生ある者の中でも敏感な方だつたと、そういう訳だな」

「……」

一度に沢山の説明をされて、巡は混乱の渦の中にいた。即座に理解しろと言われても難しい。

「まあいい。本題はこれからだ。わちがどうしてもすぐにぬしに説明をしたかつた訳はな、今後ぬしが困る事態に陥るだろうなと思つたからでな」

そう言つ割に、少女は悪びれもない様子でニヤニヤと笑つてゐる。この少女、この表情がユートラルなのだろうか。

「いちどわちという存在と接触したからにはな、ぬしはこれから次から次へと生無き者と出会つことになるだろうな」

「！？」

「一度開いた力のフタは、一度と閉まらんのだよ。覚悟しておくれとい
良いぞ」

覚悟と言われても！

巡は唖然とする。

「そんなバカな話があるか！」

「認めよ。そう深く考へることもない。わちのような、ちと人間とは違つた存在との出会いがあるだけだ。賑やかになるな〜くらいに思えば良いじゃないか。なんなら知り合いを紹介してやつても良いぞ」

巡はめまいを覚えた。

考へれば考へるほど、混乱の渦に嵌まつていぐ。本当にこの幼女
が人間ではないのかとか、そういうことをえ、どんどんわからなくなつて。

誰かが出てきて「冗談だよ」と言つてくれるのを、切に願つた。
もちろんそれは、叶うことはなかつたけれど。

「冗談だよ、と言つてくれる人間の代わりに、おやつを持った由美香が入つてきた。

「おまたせ！」天笠さんのとこの羊羹で良かつた？」

近所の天笠和菓子店は成瀬家の馴染みだ。にしても母、チヨイスが渋すぎる。対して飲み物がアイスレモンティーといつあたりが、何が何だか。

由美香は持つてきたトレーを一度巡の勉強机に置くと、壁際に立てかけてあつたローテーブルをいそいそと部屋の中央に設える。

「かわいいのね！」お嬢ちゃん、お名前は？」

ニコニコと笑う由美香に、少女もニコニコと笑い返す。

そしてクルリと、巡に向き直つて囁いた。

「わちの名前、何がいいのかの」

「！？」

「わち、特に名前など持つておらんでの。ぬし、適当に決めてくれなんだつて！？」

「そんなこと急に言われたつて、無理に決まつてるだろ！」

あくまでボソボソと。何かを囁きあつ二人を、由美香はニコニコと見守る。

「ほれほれ、早く決めんと、母に疑われてしまつぞ。人間には普通名前があるモノだから。わちが人間でないなどと、どう説明する気かの」

「…………！」

友達として家に上がりこんだからには、名前くらい聞かれるのは当然かもしれないが、巡はそこまで考えていなかつた。といふか、相手に名前がないなどと、思いつきもしなかつた。

でも名前つて。
名前……。

……名前……。

「……………かぼ」

ようやく出た一言に、少女はぐるっと由美香に向を直つて笑つた。
「かぼ」だ
「かぼちゃん？ 可愛らしき名前ね～」
「そうか？」

「どこの子なの？ この辺じや見ないわよね。最近引っ越してきたとか。こんな夕方までお出かけして大丈夫なの？ おうちの方、心配してない？」

由美香、母パワー炸裂。

恥びれずに質問攻めにする由美香に、たつた今かぼといふ名のついた少女はひたすら笑顔で対応した。

「家も家人もないから大丈夫だ。わちはずつと雑木林で木にぶら下がつていたからの～。おかげで衣食住にも困る勢いでな。良ければここに住まわせてもらつても全然かまわんのだが」

おいおいおい！

母親にバラしたくないんだろなんて脅しておいて、台無じじやないか！

相変わらず、巡の叫びは声にならない。

「あらまあ……大変なのねえ」

「母さん！」

「まあ別に、わちは人間と違つて飲み食いせんでもちーとも困らんのだがの、やはり潤いは欲しいではないか」

そうねそうねと、由美香は頷く。わかっているのか、この母親は。「永い間寂しい思いをしてきたというのにの～、この男は、すこぶ

るわちを邪険に扱うのだよ、母上」

「まあ……ごめんなさいね、私の教育、何か間違つてたかしら」
間違つて いるのはこれまでの教育ではなく、母自身の感覚ではないか。

「わちが人間ではないからと言つての～。人間でなくたつて、犬でも猫でもクンクンにやーにやーと鳴いていたら、つい連れ帰つてしまふのが、健全な子供の精神というものではないかのお？」

「ああ、そうね、そうよね。でもゴメンなさいね、私、子供たちが一度力モを拾つてきた時に、元の場所に戻して来なさいって怒つちやつたことがあつたのよ～」

数年前、それで巡は大泣きした。美しいというか、今となつては少々恥ずかしい思い出だ。

それはともかく。

人間ではないと自称する少女と、それを華麗にスルーする母。このやりとりが理解できない巡を、頭の固い人間と分類してしまつていいものか。もっとも、巡は彼女が人間ではないという証拠のようなものを見せられている当事者だから焦つて いるが、案外母親という人種は幼い子供の虚言にはおおらかだ。自分の子供ならともかく。「力モは野生だでな。その判断は正しいよ、母上。だがわちは渡り鳥ではないのに～」

「そうよね～。いいわよかほちゃん。いくらでも我が家にいてちょうどいい！」

「母さん！ 何言つてんだよ！」

「だつてかわいそうじゃない。人間じゃないんなら別に大丈夫でしょ。養子縁組とかの必要もないんだし」

母、あなたの脳はブラマンジエなのか。

全部冗談だとでも思つて いるのだろうか。いやそうなんだろう。だが、ここで母が冗談のつもりで了解してしまえば、本当にこの魔物はここに住み着いてしまう。ような気がする。

「じゃあ今日からご飯はひとり分余計に作らないとね。腕が鳴るわ

「。楽しみにしててね！」

由美香は上機嫌で、部屋を出て行った。

……そんな馬鹿な……。

一体どういうつもりか。母もこの少女も。

本当にこいつがここに住みついたら母はどんな反応をするのかと、巡はただただ頭を抱える。その時になつてやいやいと説明を求められても、巡にはどうする「ともできない。もちろん、今ここで責められたとこりで同じことだが。

「ものわかりの良い母上だ。とてもぬしの母とは思えん」

「冗談だと思つてただけだ！」

多分、きつと。

「そうかの？」

そんな巡に、少女はただ笑う。相変わらずの余裕の笑みだ。バレたら困るのは巡だと脅すようなことを言つていた割に、彼女はまったく正体を隠すつもりがない。むしろ積極的に自由しているあたり、わざとやつてこいるとしか思えない巡だ。

「ところで~。『かぼ』か、なかなか良い名前ではないか。良く思ついたの」

よく言つ。思いつかなかつたらどうするつもりだったのか。

彼女のことだから、その時はその時のらしくらうとかわすつもりでいたのかもしれないが。結局自分だけがムダに荒てる羽田になるのは変わらないのだろうと、巡はため息を漏らす。

「考えに考え抜いた、お前にぴったりの名前だ。可愛いだろ？」「半ばやけくそになつて、巡は返す。冗談に反して、その表情と声、音は大変に険悪だ。

「可愛いか、そうだの。かぼか、かぼ……。うん、可愛い名前だの」

否。

巡はこの少女を初めて目にした時に最初に視覚で認識したものを見つけてそのままに乗せてしまつただけだ。

すなわち、巡の眼前に広がつた「かぼちゃパンツ」を。

名前の由来がかぼパンであることなど知る由もない少女は、自分につけた名前にじ満悦なようだ。

聞きたいことなんてまだ山ほどある。

前途の多難を感じて、巡はふたたび深い深いため息をついた。

食つてゐる。本当に食つてゐるよ。

結局夕食の時間になつてもかぼを追い出すことが出来ず、巡は複雑な面持ちで一家の団らんの中にいた。

初対面で居候を申し出る方もアレだが、本当に夕飯まで用意する由美香もナニだ。それとも、今日一日のお泊り「こつ」とことでも思つてゐるのか。これまで紹介されたこともない初対面の幼女なのに？ 巡の父親は、単身赴任で家を空けている。だから現在家を守つているのは母の由美香で、あとは一人姉弟の芽衣と巡しかいないのでから、こんなに無用心でいいものか。

「最近の食べ物はよくわからんの。このやたら乳臭いトロトロしたのはなんだ？」

かぼは、まるで生まれたときからの家族のように、躊躇も遠慮もなく夕食を楽しんでいる。

「それはシチューよ。食べたことない？ おいしい？」

「初めてだが、これは美味しいぞ、母上。もつともわちは、基本的に人間の食べ物であれば好き嫌いはないがの」

何気に普通に会話が成り立つてゐる。居候騒動を「冗談だと思つてゐるにしても、かなりノリが良い方と言えるだろう。

「かぼちゃんつて、人間じゃないつて、じゃあやあ犬とか？ それとも猫なのかな」

芽衣ですら、こんな調子だ。

大体、人間じゃないとなれば犬か猫しか思いつかないのか、この姉は。

「犬も猫もマネ事くらひはできるが、あやつらと同じ飯を食わされ

るのはかなわんぞお~」

かぼは、何気にオヤジっぽい。

「で、かぼちゃんつて、メグの、か、彼女とかじやないよね?」

芽衣、見た目幼児に真顔で質問。冗談ではなく、本気で確かめた

いらっしゃい。

「芽一衣!」

「なつははは、カノジョとはあれだな、コイビトとこいつヤツだな!
それは無理だ。そういうのはきちんと人間の中から選んだほうがよからう!よ

それにして、巡のように決定的場面を見たわけでもないのに、母も姉もかぼが連発する「人間じゃない」発言を、怪しげよりもせずに受け止めているあたりが、巡には理解できない。信用しているいないはともかくとして、しつこくそんなおかしな発言をする少女を苦もなく受け入れているなんて。

夕食後、巡はかぼを自分の部屋に押し込んで、夕食後の洗い物に精を出す由美香に詰め寄った。

「知らないヤツに夕飯まで作つてやるなんて、どうしかやつたんだよ。人間じゃないなんて言られて、変だと思わない?」

こんなおかしなのと一緒にいて平気な顔をしてくるなんて、巡には母や姉の感覚が、まったく理解できない。もしこの場に、留守にしている父がいたら、どう思うだろう。

由美香はそんな巡に一ヶ二ヶと微笑んでみせた。

「じゃあ~」

あまりにも、のんびりとした口調。

「メグがちゃんと、おうちに送り届けてあげればいいじゃない」

もつともな意見だが、それを出来れば苦労はない。が、由美香は無言のままの巡に、お構い無しに続けた。

「それが、できないんでしょ?」

ギクリ。

「『家族のもとに帰してあげられない事情があるんでしょ？』それが出来るようならとっくにしているんじゃない？ だとすれば、あの子には家に帰れない事情があるってことよね。例えば、本当に帰る家がないとか」

もしもまつたく知らない子にいきなりまとわり付かれているのなら、それを勢いであれ家に上げるような息子でないことを、由美香はよく理解している。何しろ母親なのだから。そしてもしも彼女がいわゆる普通の理由でただ家に帰りたがっていないような状況なら、巡は由美香にそれをきちんと話すだろ？

「人間じゃないとか、そういうこと、あの子が言つた時だつて、あなたはあんな風にうろたえないわよね。それが、『冗談なのなら』ぽんやりしているように見える母親、これできつちり、巡のことを見察している。

「あなた、否定しなかつたじゃない。お母さんは、それがどれだけありえないことでも、バカバカしく思えることでも、息子のことは信じるわよ。世界中が信じてくれなくともね」

寛大すぎる母親、だらうか。

これほどに無心に、自分の息子のことを信じきる「」ことができるなんて。

それともまさか、巡のわからないところで別の計算でもあるとか。でもそんな計算があつたとして、それが何であるのか、それによつて母にとつて何か有益なことがあるのか、せつぱりわからない。

多分本当に、息子を信じているのだろう。

もしも本当に、ここに魔物がいると息子が言つたとしても、それさえも。

「じゃあメグ、一応確認するけど、かほちゃんをうちに置いておくとして、それで困る人が、どこかにいるかしら？ 何か社会的に問題が生じる？」

巡は、首を横に振るしかない。

正直、かぼのことは何も知らない。知らないけれど、かぼの言うことを鵜呑みにするとすれば、彼女は現在天涯孤独で身寄りのない魔物だ。少なくとも、かぼのやつてみせたあれやこれやは、とても人間のできることとは思えないし。もしも彼女の言うとおり、うちに居候させたとすれば、彼女が喜ぶ。それだけだ。魔物をうちに住まわせて、何か別の問題が起きるとしても、それは今の巡には想像だにできないことで。

「ならいいじゃない？」

「母さん！」

「かぼちゃんのことは、後でゆっくりと知っていくからいいわよ。それでもしも何か問題が起きたとして、お母さんはメグのせいになんかしないから大丈夫」

それは充分すぎるほどわかつている。わかつてはいるが、そういう問題だらうか。

「女の子の家族が増えるなんて、素敵じゃない」

結局そこか！

すでに女一人男ひとりの三人家族の中にあって、さらに女が増えるのか。

第一、「近所にはどう説明するつもりなのだろう。

「とにかく、あの子に帰る場所がないのなら、うちに置いてあげなさいな」

巡には、返す言葉がない。

母の発言は、この家の中において最大権力なのだ。

そしてだからこそ、家族のためにならないようなことは、決してしない母もある。

でもあの子をなあ……。

ここでも巡は、ただため息をつくしかなかつた。

プラプラと道を歩く巡の後を、かぼはトコトコとついてくる。悶々とした体の巡とは正反対に、かぼの表情は呑気なものだ。何気に楽しそうである。

昨日の夕方からの騒動のせいでの巡は夜もまともに寝付けなかつたというのに、かぼの方は人間ではないと自称している割に、まさに爆睡状態だつた。もつとも、最初に出会つた時も幸せそうに眠り込んでいたのだけど。

「大体、なんでお前はあんな木の上に絡み付いてたんだ」

後ろにいるかぼを振り返ると、彼女はキヨトンと巡を見返した。

「別に、騒ぎが少なくて寝心地の良さそうなところを選んだだけだ？ 何しろなあ、わちが眠りに就いたのは、これから生の刻が来るという時期だつたからの」

「何の関係がある」

なんだ、そんなこともわからんのか、とかぼはまた何かを悟つたような表情になる。わからないもなにも、巡にとつては魔物などという存在に出会つたのさえ初めてなのだから、その何たるかだつてわかりようがない。

「生の刻が来て魔物の力が弱まるとはい、全ての人間に魔物が発見されないというわけではないからな。うつかり寝こけているうちに、もしも生の刻にわちらが発見されて、それで騒動が起こつたら、人間の持つわちらに対する負の感情に勝てないからの」

うつかりすれば、そのマイナスのパワーにかき消される魔物も出てくる。だから魔の刻に属する者たちは、生の刻には皆一様にその姿を隠そうとするのだ、とかぼは語つた。

「それにわちらは、生の刻の住人を脅かさないよう、気を遣つたりもしていたのだぞ、これでも。急に見知らぬ物体が出てきたり

したら、人間は驚くだろ」

それをやつてくれたではないか、昨日。それとも魔の刻になるのだから、もう解禁という訳か。

「かぼは、千年間眠りっぱなしだったって訳か？」

「いやあ～、たまには目を覚ますがの。メグと会う前に目覚めたのは、うん、百年ほど前に一度……かの？ そつやつて永いこと眠つて待つしかなかつた身なのだからな、少しは劳われ」と言われても、どのように劳わればいいのか巡にはそりぱりわからぬ。

「む

急にかぼが、表情を険しくした。

「なんだよ」

「これは……この匂いは

これまでにない俊敏さで、かぼはグルリとかぶりを振つた。

「あそこに見えるアレは」

かぼの視線の先にあるのは、成瀬家御用達の天笠和菓子店だ。

「あれに見えるはもしや、しゅーくりーむというヤツではないか！」

？

かぼが、店頭に山積みに陳列されているビシツと商品を指差した。本当だ。巡はいぶかしげな顔をする。なんだつて天笠、和菓子店のくせに洋菓子にまで手を出しているのか。

「しゅーくりーむとなーーーっ！」

かぼは、加速装置起動と言わんばかりの瞬発力で駆け出しが。

ドタ
ン。

景気良く、前のめりに転ぶ。

由美香にはかせてもらつたフリルのワンピースのスカートがめぐれ上がり、またもかぼちゃんパンツが丸出しになつた。

しかし屋根まで跳躍可能なこの幼女、なぜ普通に路上で「ケルの
か。狙つているのか。

「メグ……わちの……わちの」とはここから……早くぬしまじゅ
くじーむを……」「

「シュークリームは逃げないけどな。なんで僕がお前にシュークリ
ームを買ってやらなきやならないんだ」

路上に倒れたままのかぼを、巡は冷たい視線で見下す。

「なんてケチんぽなんだ……」

「ていうかお前、最後に目覚めたのが百年前つて嘘だろ」

ギクリと、かぼが硬直した。

シュークリームという存在を知つてゐるあたり、結構最近外をウ
ロついていたんじやないのかと巡は想像する。

かぼは、ははは、と乾いた笑いを洩らした。

「いや、そうだの、オホン。訂正するなら、メグの前に最後に人間
と会話したのが百年前かの……多分、おそらくは……」
まつたく。

巡はため息を洩らす。

別に隠すようなことでもないのに、と思わなくもない。そうまで
して人の同情を引きたい訳か？ それにも、殆ど眠つて過ごし
たと言う割に、あまりジョネレーションギャップを感じないという
ことに、巡は今気付いた。

「なんでお前、それなりにこの世界に馴染んでるんだ？ 全然生き
てた時代が違うんじやないか？」

生きてた、といつ言葉が合つてゐるかどうかはともかくとして。

「そりやあ、わちらはいわゆる物の怪というか物の化だから。世
界の変動は、眠つても勝手に吸収してしまうのだよ。だから世
界への適応は早い」

偉そうに語るが、とりあえずは起き上がりてくれないものか。

「物の化？」

かぼは、ようやく起き上がった。

本人はまつたく無頓着そのので、巡は仕方なく身体についた砂を払つてやる。放つておいたら、通りすがりの人にどう思われるかわからない。

「魔物にも色々あるが。最も多いわちらのよつた魔物は、いわゆるこの世界の物質が転じて魂を持つた存在だ」

木とか、火とか水とか石とか。人間が作った物から生まれる者もいる。

「人の言う座敷童子とかな。あれは家に憑く靈のように言われることもあるが、要は家から生まれた物の化だ。そういう、物質が転じて意志を持つようになつた物の化は、世の情報を感知するのも得意なのだよ。自然と取り入れてしまつ、と言うべきかの。もつとも、感知したくない変化さえも、取り入れなければならぬ例もあるが」

「なんだよ、それ」

「そのうちわかるだろ?」

ニヤリと笑つたかぼは、あらためて和菓子店を見やる。
「ぬしが植物採集に行きたいというから、こうして付き合つてやつてるのだぞ。褒美のひとつも寄越してくれても良さそうなものだがの」

こんな時ばかり子供らしい仕草で、かぼは指をくわえる。ひとりで出かけようとしていたのに勝手について来られた巡にしつてみれば、不本意極まりない言い分だ。というか思い出した。週明けにある実習のために、巡は近所の雑草を観察に来たのだった。

「そうだ。こんなことをしてはいけないじゃない」

巡はさつたと歩き出した。

「メヘグヘ」

「つるさいな。そんなに欲しければ、お前に甘い母さんにも買つてもらえばいいだろ」

歩みを止めない巡に、かぼは仕方なく再びトコトコと追いついて歩き出す。

「親睦を深めるために、一人でしゅーくりーむを食べたかったのに

の～

そういうことは、自分で金を払つて買つてから言ってくれ。

「メグはかぼに冷たいの。なんでだ？」

「常識で考えてくれ」

普通、急に現れた得体の知れない者にたやすく心を許す人間は少ない。巡の家族が変わっているだけだ。だが、この魔物に常識などという言葉が通じるはずもないということを、巡はそれを口に出してから思い出した。

「今度の逢魔が時は……人間も魔物も苦労しそうだの」
かぼはボソリと呟く。

それはおそらく、頑なな人間のせいでもだからって。

こんな時代が来ることへの覚悟なんて　少しも出来て、いない
のに。

結局、週末はかぼの騒動のせいで予習ビーハの騒ぎではなかつた。実習のために、図鑑でも眺めて食える草の田星をつけておこうとか思つていたのだが、そのために外に出ても出かける先にかぼがついて来て、あれこれとのべつまくなし話を始めるから、調査にならない。

せつかくだからとかぼに野草について訊ねてみても、結果は芳しくなかつた。かぼいわく、いくら彼女でも超自然的に様々なことを知つている訳ではなく、あくまで世の中の知識は人生の先輩程度だ、ということだ。

つまりが、野草については割と一般的なレベルでしか知らないらしい。

世の中の大局的な情報は勝手に取り入れるが、たとえば野草の名前まですべてが頭に記録されるわけではない、ということか。まったく、おかしなうえに役にも立たないものに取り憑かれてしまつた。

月曜日、実習となるのは三～四時限目。

「名簿順で班分けするぞー」

授業の合間の休み時間の後、再び教室に入ってきた担任、朝比奈がやたらはりきつて声を上げた瞬間。

「なんだ。行き当たりばつたり食用植物を探す授業なのか。こんな時ばかり予習をするなんて、メグはズルっこだの」

「――」

自分の席に座っていた巡の真横に、かぼがいた。

ガタン――

思いつきり立ち上がってしまった巡。

「静かにしどけ、メグ。心配せんでも、他の者にわちの姿は見えておらんよ。だがぬしがわちを、ここにいる者として扱えれば、他の者にも見えてしまつだ」

「――――――！」

「おいおい成瀬。どうしたあ？」

急に立ち上がった巡に、朝比奈が呆れたように声をかける。クラスマイトも何事かと巡を見るが、確かに誰もかぼの存在に気が付いていない。よう見える。

「……あ

引っ込みがつかなくて、巡は逡巡する。

「あの……トイレ」

ドッと教室が沸いた。

「そりやあ外に出る前にはトイレタイム取るつもりだけどな。今すぐか？」

むしろ休み時間に行つておけと言わんばかりだ。実際その通りだが。

「が、ガマンできません――！」

教室中から笑いが起こる。なんで自分がこんな目に。

行つて来いよと笑う担任を尻目に、巡は脱兎のごとく教室から逃げ出した。もちろん、その後にはかぼもついてくる。

「学校にはついてくるなつて言つただろ――」

授業中、誰もいない男子トイレの中で、巡はかぼに怒鳴りつける。

いくら人がいなとはいえ、あまり大声を出すのはどうかと思つが、巡にそんなことを考える余裕はない。

「学校とやらを見てみたかっただけだ。ケチケチするな。さつきも言つたが、他の人間にかぼは見えておらんよ。ただ、メグがかぼに話しかけたりすれば、その場にいる皆に発見されてしまうだろうがの」

「どういう意味だ？」

かぼは、どこで憶えたのかビシツと人差し指を立てる。
「わちらはぬしのように逢魔の力のない者にはまず姿から見えない。だが、見えにくい、というだけで、そこに存在するのは確かだ。ぬしにはわちが見えているだろ？だから、ぬしが皆の前でかぼと話をしたとすると、皆そこに何かがいるものだと認識する。そうやつて意識をされれば、ほとんどの人間にわちの姿は見えてしまうのだよ」

もともと魔物を認識する力のある者には、その姿は視覚として捉えられる。だが、その力のない者でも、そこに誰かがいるのだと脳に情報を送つて意識すると、見えてしまうものらしい。特に、これからの時期は。

早い話が、逢魔の力を持つ人間とそうでない人間の差は、その程度ということだ。

力のない者は、そこに何ががいるという情報を受けることで、後天的に魔物を目で見ることができ。対して逢魔は、それがなくとも自発的に魔物を発見してしまつ。

「メグを介してわちの存在を知つた者は、もうメグなしのわち単体も認識できるようになるがの。もうその人間にとつて、わちは”そこにある”存在になるからの」

なんという不安定な存在。

しかしそれでは、かぼのように一見魔物に見えないようなものを発見してしまつた場合、見分けがつかなくて困りそうな気がする巡だ。たとえばもしもかぼが普通に街中を歩いていたとしたら、巡は

誰かに「あんなに小さい子がひとりでいる」などと言つてしまふかもしれない。その場合、言われた人間はどうなるのだろう。「あれ、さっきまで誰もいなかつたような気がするんだけど勘違いか」みたいなことになるんだろうか。なんだかとても面倒くさい。

なんだかとても面倒くさい。

まあそれほどもかくとし

「だったらボロが出ないうちに帰れ！」

「いいじゃないか）。ボロを出すも出さないもメグ次第だぞ？」わ

帰る気はやがれなくなつた。

「絶対、変なちょっかいかけるなよ……」

それだけ言うと、かほは任せろとばかりに胸を張つた。

何というか……先が思いやられる。

実習の最初に、巡たち六年一組の面々が向かつたのは、巡がかぼと出会つたあの雑木林だった。

確かに学校のすぐ裏手だし、野生の植物も多い。ちなみにこの辺りの土地の所有者は、藤乃木学園の理事長である。実習の事前承諾も完璧だ。

「先生の田の届かなー」といひに行くんじゃないぞー。三十分で集合な

朝比奈の命図と共に、持たされたストップウォッチを確認しつつ、それぞれの班があちこちに散る。が、この年頃の子供たちだけに、そこいらの雑草を引っこ抜けばいいと決め込んで遊びに走る者から、何とか食べられる物を探そうと必死になる者までと、反応はまちまちだ。

「きのこは採取禁止な。触るのもダメなのがあるから気をつける。それと、採つたものは、一度は自分で口に入れてもらうからなー」

朝比奈の言葉に、生徒たちは「うげ」と表情を変えて、そこそこ真面目に探し出す。もちろん毒性のある物は外すつもりだが、朝比奈はやると言つたことはやる教師だ。食わせると言つたからには、それが雑草でも本当に食わせる。

まったく予習できなかつた巡は、班で固まつてあれこれと探しながらも、かぼの方をチラチラと気にする。この前まで眠りこけていたこの場で、かぼは楽しそうにひとりで遊んでいる。確かに皆にかぼの姿は見えていないようだが、逆に蹴り飛ばされたりしないのだろうかと思うが、これが器用にお互い避けていくというか、自然と接触しない。

いや、アレを心配している場合じやない。

巡は植物の採集に集中力を戻した。

「成瀬～。この赤い実って、良く見ない？」

同じ班の女子に声をかけられて、巡はしげしげとそれを眺める。背の低い木に小さく実る柔らかい実は、確かにどこかの家の庭で見たことがあるような気がする。けれど、それが食べられるかどうかはわからない。一見食べられそうに見えなくもないが、今ここで試してみるのは厳禁されている。毒のある物だと困るからだ。

「取つていいってみる？」

いくつかの実を、潰さないよう採つてビニールの袋に入れた。あちこちを田で追つていた朝比奈は、そんな巡たちの様子も視界に入れている。

いいもの見つけたなあ。

朝比奈は声に出さずにほくそ笑む。その木は一箇所にしかないようだから他の班は気付いていないようだが、あれはそのままで食べても甘いし、薬にもなる実だ。巡は全然予習など出来なかつた様子だが、ひとつはクリアしたらしい。

「メグ～、メグ～」

かぼに呼ばれて、巡は無言のまま彼女に近付いた。

遠目では気付かなかつたが、そこには小さな川が流れている。街に流れる河川と合流しているのかもしれない。

「この草、見たことあると思うんだがの～」

気付けば植物採集に参加しているかぼだ。誰にも聞いてはいけないという決まりだが、結局かぼも植物には明るくないらしいから、まあいいだろう。

「たしか食べられると思ったんだがの。しかしこんな形だったかのー？」

怪しいことこの上ない。が、突つ込みたくてもこの場では叶わない。

まあいいやと、それを根ごと引っこ抜いて、数本を仲間のもとに持つて帰る。

そういひじてこるひつじ、三十分が経過した。

全員を集合させて、学校に帰るまで一時限終了。それから、後半の植物選別が始まる。大したことをする訳でもないのだが、全員スマッグと三角巾着用だ。

「この班は……変わったもの持ってきたなあ」

各班をまわる朝比奈は、巡の班に来て面白そつに顎に手を当てた。「ユスラウメにマコモに、こりやパセリか。あんなところに生えてるんだな。ほほ当たりだが……惜しいな。マコモは、秋になれば何にでも使える食材なんだけどな」

かぼが言つていた草を手にしつつ講釈する朝比奈。しかしこの担任、何気に野草に詳しい。

「ユスラウメはそのまま口に入れてみる。甘いぞ。同量位の塩で漬けておいても薬になる。パセリは……言わずと知れた、だな。ルールだから一度は食つてみな」

うえ、と嫌な顔をする面々。パセリが単独で好きだという人間は少ない。いわゆる付け合せのパセリとは姿が違つたから氣付かなかつた。わかつていたら採つて来なかつたのに。でも試食からマコモは外してくれたのだから良しとしなければ。マコモは薬草にもなるが、若干刺激が強いから扱いに注意が必要なのだ。

「一応かぼのも正解だつたら？ 間違いじゃなかつたら？ 季節が違つただけだものな。偉いだろ？ な、メグ？ かぼだつてやればできるのだからな！」

ちよろちよろと巡にまとわりつきながら、身振り手振りをくわえてまくし立て、えへんと胸を張るかぼ。

本当にコイツは、他人にバレたら困る自分の立場をわかっている

のか。

「つるさいな、わかつてゐよ！ 少し黙つてろーーー。」
つい、振り向きもせずに怒鳴つてしまつた。

ピタリと止む、教室内の喧騒。

しまつた。

「……それはオレに言つてゐるのかな？」

笑顔が引きつる朝比奈教諭様。

「いや、違……その」

かぼの存在には気付かれなかつたが、代わりに妙な誤解を生んでしまつた。

「先生に意見してくれた勇者な成瀬君は、後片付け当番決定な。皆の取つてきた収穫物の残り回収して、放課後教員室に持つて来いよ」
バシバシと巡の肩を叩く朝比奈。そういう行動を取る時の担任が本気で怒つていなことを皆知つていてから安堵するが、何故巡が急にあんなことを怒鳴つたのか、クラスメイトにはわからぬ。

「なんだよ、どうしたの成瀬。パセリ、そんなに嫌いだつたつけ？」
肝を冷やしたらしい同じ班の男子が、大げさな仕草でこそそと耳打ちをしてくる。

「ちが、いやえーと、うん、昨日ちゅうど家でパセリも食べなさいつて口づるさく言われて、それ思い出ししゃつて」
「成瀬の家つて、パセリも食べなきゃいけないんだ……」

言い訳が苦しい。

なんとかごまかせたようなそつでもないよつな、けれど他に適当な言い訳も思いつかない。本当に失敗した。

「つらかりだのー、巡は」

「ヤーヤと巡をつつくかぼ。

誰のせいだと思つてゐる……！」

今度こそ声を上げずに、かぼと視線も合わせないよつに注意を払いながら、それでも巡は肩を震わせた。

もう絶対に学校になんて連れて来ない。

巡はかたく心に誓つた。

誓つたところで勝手についてしまつただから、ビビリじょつもないのだが。

放課後になつて、巡は職員室に顔を出した。

朝比奈に言われた通り、両手に持つ箱の中にはクラスメイトたちが採集してきた植物の残りが入つている。のはいいのだが、こんなものを集めて担任が何をしようとしているのか、巡には今イチわからない。捨てるのならそのまま焼却炉行きでも構わないとと思う。

それとも、巡に説教するための大義名分だろうか。それならただ職員室に呼び出せば良いだけの話だ。

「先生、持つて来ました」

巡が朝比奈の机に向かうと、担任は事務椅子をグルリと回転させてにこやかに巡を迎えた。何気に巡の足許にくつついて来ているかぼの方には、視線さえも投げかけない。気付かれることはない、とかぼは言つていたが、なんだか不思議な感じがする巡。すでにかぼの存在から不思議なのだから仕方がないのだが。

「おお、ごくろーさん」

巡から受け取つた箱の中を、早速ガサガサとあさり出す朝比奈。

「それ、どうするの？」

「んー、採るだけ採つて無駄にするのも、こいつらに申し訳ないからな。使えるものは使おうと……ああ、これとかな」

朝比奈が取り出したのは、どうやらよもぎの一種。使い切れなかつたが、結構な人数がこれを持ち帰つていた。

「よもぎは色々と使い道あるからな。つと、この辺は押し葉にでもしといて、栄でも作らせるか……」

朝比奈、新たな案が浮かんだらしい。

「ところでな、成瀬。お前今日はどうした？ 何か悩み事か？」

押し葉にするらしい雑草を選別しながら、朝比奈は巡へと視線を投げかけた。

急にトイレには立つし、実習中もやたら拳動不審だつたし、教室では突然怒鳴り出す。詰問されても仕方のない今日一日の巡だ。

「勉学の態度がなつとらんの～」

お前にだけは、言われたくない！！

腕を組んでうんうんと頷くかぼを怒鳴りつけそうになるが、ちらりと横目で睨みつけるだけに留め、巡は何とか言葉を飲み込んだ。今このタイミングでそんなことを叫んだら、本当にシャレにならない。

「すみませんでした。悩み事とかじやないです」

少々しおりしい口調で否定してみると、朝比奈はハハハと軽快に笑つた。

「まあまあ、成瀬だつて男だもんなー。他人に言えない悩みのひとつやふたつ、あつたつておかしくないけどなー！」

そんなんじやない、と言いかけたが、巡は一瞬躊躇した。男だからかどうかはわからないが、確かにこれも人に言えない悩みと言えなくもない……かもしれない。このままでは血管のひとつも切れてしまいかねない勢いだし。

「話せることなら聞くぜ？ けど言えないモンを無理に聞き出す趣味はないからな。ひとりで悩むつてのもアリだ。が、人と共有できれば色々ちがうもんだ」

かぼや魔の刻のことを誰かと共有。

確かにそうできれば、自分の精神状態も大分違うだろ？と巡は思う。ひとりで抱えていたら、途方にくれてしまつだろ？ そういう意味では、母や姉は共有者といえるかもしれないが、かぼの存在を知つているというだけのもので、それ以外のことを話し合えるかどうかはわからないが、話してみて、まるで相手にされない相手ではないだろう。

魔の刻とかそういう話はよくよく考えてみれば深刻なことなのかもしれないが、けれど実際のところ田下の巡の悩みといえば、かぼがひよいひよいと巡の行き先についてしまつことくらいだ。い

ちいち拳動不審なのだつて、ひとりで何かに対し悩みに悩みぬいた末の奇行というわけではなくて、うつかりかぼに反応してしまつたゆえだ。

自分にだけ見える存在といつのは、本当に面倒くさい。

「ひとりでいると、後ろ向きになりやすい。一緒にいる人間が多くなればなるほど、気持ちは前に向きやすい。そんでまあ、前向きに生きてさえいれば、取り返しのつかない事態までにはそうそう進まんもんだ。あまり深く考え込まんでもな。でもつて、誰かのフォローがあるのとないのとでは、いろいろな面で格段に差が出る。見たところ、お前さんはそういうのに不自由してなさそうだけどな」

巡にも、友人はそこそこにいる。クラスで嫌い合っている人間もない。家族とも仲がいい。けれど今の状況は、おいそれと周りに広めていい問題でもないような気がする。しかしそれはそれとして。「本当に、悩みとかじやないです。その、さつきのは、パセリのことで家族にうるさく言われたばかりで、先生に文句を言いたかつたわけじゃなくて、うつかり……」

一応矛盾がないように、さつき友人にした言い訳と同じように言つておいてみる。朝比奈は「そつか」と言つて笑つた。彼が自分で言つようじに、深入りするつもりはないらしい。少し安心した。

「ま、悟られたくなければ冷静に対処できるようになるんだな。そういうでないと周りに心配かけちまうぞ」

軽い口調だが、朝比奈、何気に子供に難しい注文を出す。それともひとりの人間としての意志を尊重していふといふことだらうか。

「手え出しな」

「？」

言われて素直に手を出すと、朝比奈は巡の掌の上に、小さな茶色の塊をふたつ転がした。

「何これ……」

「キャラメル。オレが作ったの。それでも食つて機嫌直せ。……あ、

学校では食つなよ。それと、みんなには内緒な」

巡はしげしげと、オブラーートにくるまれたそれを眺める。いちいち小器用な担任だ。

「メグの先生は優しいの～。かぼに飴をくれたぞ」

帰り道、巡に渡されたキャラメルを口の中で転がしながら、かぼは上機嫌で両頬を押さえる。

「お前にくれた訳じゃないよ……」

むしろ自分が今あげたんじゃないかと、憮然とした面持ちで、巡はもうひとつキャラメルを口に入れる。帰り道だが、学校では食べるなと言われたのだから、まあいいとする。へ理屈だと文句をつける人間は、ここにはいない。

キャラメルは、当然だが甘い。

口に広がる甘さで、ここ数日の疲れが何となく取れていくように感じるのは、あまりにジジくさすぎるだらうか。けれど、心身共に疲れていたのは事実で。

キャラメル効果だらうか、何だか色々考えすぎるのが面倒に思えてきた。

ありのままを受け止めてみた方が、建設的なんじゃないか、と。

あまり深く考え込まなくともと、朝比奈は言つた。じつとしないし、いつ誰に見られるかもわからないし。巡が持つという逢魔の力とかいうのを、持つている人間だつているかもしれない。

「もう、メグの学校には用がなければ行かんよ」

思つていたことに、そのまま返答されて巡は驚いた。

「わちが行くと、メグは困るようだから。わちはメグと仲良くしたいだけだ。嫌われてしまつたら、意味がないからの一」

散々やつてくれた後で、よく言ひ。

「逢魔が時など、そう深く考へることもあるまじよ。どうあがいたところで、なるようにならんし、なるようになる。でも、案外世界は優しいぞ」

「優しい？」

眉を寄せて聞き返す巡に、かぼはいつものごとく笑いかけた。

「世界は命ある者にもなき者にも、平等に存在する力を与えてくれてるだろ。ほれ、こんなに小さい者にもな」

かぼの視線の先に、いつの間にか真っ黒な猫が座っていた。いつからいたのか。

道の端にいた猫は、ふたりの視線を受けてゆるりと立ち上がり、音もなく歩み寄ってきて、巡の脚に頭を擦りつけフニャンと澄んだ声で鳴いた。子猫と言つには大きいが、近所で見かける飼い猫よりは小ぶりだ。きれいな毛並みなのに、首輪のような「飼い猫」の証は見当たらない。

「そやつも、わちらの仲間よ」

「え？」

「ヤーとなく声も、翡翠みたいな目の色も普通の猫とまったく変わらないが、長い尻尾が、半分ほど一股に分かれている。

「！？」

かぼがそれを抱き上げた。

「こやつも魔の刻の住人だ。見たことのないヤツだが、……」こんな風に、至極本物に近く、力のない者もいる」

ペロペロとかぼの顔を舐める黒猫は、尻尾が一股に分かれている以外はどこからどう見ても普通の猫で、突然人間の言葉をしゃべりだしたり、飛んだり消えたりする様子は見せない。

これも、他の人間には見えないのだろうか。

「ぬし、この辺の者か？ 帰る場所はあるのかの。ないならウチに

来るか

「お前のウチじゃないだろ」

巡は、かぼからその猫を受け取つて抱き上げた。

人懐こく、巡の顔も舐め出す黒猫。「ゴロゴロ」という喉の音が、巡の胸の辺りに振動となつて伝わる。こつやつて抱き上げているのを他の人間に見られたら、この猫の姿も見えてしまうのだろうけど、この猫くらいなら、きっと問題はないだろう。

「な、優しいだろ？　生きる気さえあれば、何とかなるんだものな。そんでもって、そつやつて猫を抱き上げるメグも優しい子なんだって、わちは勝手に信じておるのだがの」

「……」

一瞬目を見開いて、すぐに巡はかぼから視線を外した。急に持ち上げられて多分少し赤くなつてしまつた頬を、あまり見られたくない。

「優しくなんかないよ。この猫、かぼが面倒見るんだからな」
ふいと顔を背けて歩き出した巡に、かぼはグルグルとまとわりついた。

「なんだ、ケチんぼだの、メグは！　共同作業でいいじゃないか！」
「かぼがやるんだよ」

誰の声に反応しているのか、黒猫は一ヤーンと鳴く。

「かぼがやれつて言つてる」

「違う！　メグも世話をりと言つておるのだ！」

やいやいと騒ぐ、かぼの声ばかりがうるさい帰り道を。

少しだけ。

ほんの少しだけ楽しいと感じたのは　ひとつはしゃぐかぼにはまだ、秘密にしておくべしとする。

外は、生憎の雨。

雨の多い六月なのだから仕方がないが、それにしてもこの時期の湿った空気は、身体中にまとわりつくな感がある。

実習をやった月曜日までは晴れた日が多くたのに、次の日からもつ二日、ずっとこんな天氣だ。学校から帰つても外に出かけるのもおづくづく、巡はるの二日間、学校から帰ると家に閉じこもつりきつだ。

「雨だのー。退屈だのー。いつ運氣つてこと、気分まで運つてくれるのーー」

かぼさずつとそんなことを呟きながら、巡のベッドの上に、ドロドロしてこむ。月曜日に拾つてきた黒猫も一緒にだ。

「退屈なうどこかに遊びに行つて来ればいいだり

魔物にも運氣なんて関係あるのだろうかと、巡は思つ。

「む。メグはこんな雨の中、かぼを追い出しこかかるつつか

「そんなことは言つてない」

言つてはこないが、こう何日も同じ部屋の中で、暇だ退屈だと呟かれ続けるのには、わざがに辟易している。わうでなくとも、これまでつとひとつで過ごしてきた部屋の中、毎日かぼや猫がいるのだ。慣れない環境に苛つづのも道理で。

「雨はきらこだ」

かぼがぼそりと呟いた。

「メグは知らんだろうが、わちう物の怪とては、天候も重要な場合があるのだぞー」

かぼは、ベッドの上で猫と共にドロドロと転がる。

「物の怪は、何かの属性から生まれて来る者が多いからな。生きている者のように、寿命や病氣で死ぬことがないかわりに、そういった外部からの影響で簡単に消えてしまう者だつて多いのだぞ。例えば炎から生まれた物の怪がいるとすれば、そいつは水に当たつだけで消えてしまう。逆に水辺で生まれた者は、長い間水と離れていれば、やはり消えてしまうしの」

それは初耳だ。初耳だが、それは言い訳だらう、かぼとは関係ない、と巡は思う。思つてから、ふと気付いた。

かぼは、一体何の物の化だらう。

「お前は、何から生まれたんだ?」

ふとした拍子の質問だつた。けれど、意外やかぼは、巡のその質問に対しても珍しく静かになつた。

「……」

「なんだよ」

別に悪いことを訊いたつもりはないのに、だんまりを決め込まれて、巡は眉をひそめた。しかしかぼは、その一瞬後にはヘラツといつものように笑う。

「別に何でも良いではないか。わざわざ弱点になるようなことを、そう簡単に教えるヤツなどおらんぞ」

かぼの率直な言葉に、巡は憮然とした。

何だよ、弱点つて。

魔物のいわゆる出所は、確かに弱点にはなるだらう。先刻かぼが言つたとおり、火には水をぶつ掛ければいいし、水は枯らせばいい。無論世界中のあらゆる水を枯らすのは不可能だが、つまりその魔物を水から遠ざければいい。

属性が知れれば、弱点も知れる。確かにそうだが。

「調子がいいな、お前は」

眉間にしわを作つて呴く巡に、かぼの瞳がキョトンと見開かれる。

「仲良くしたいだとか言つてるけど、結局そんな気さらさら無いだろ。弱点を教える気がないとかつて、まるで敵でも相手にしてるみ

たいだよな

そりゃあ、自分と異なるものを排除しようとする人間の本能のせいで、物の怪は迫害され続けたんだろうけど。そのせいで人間を信頼できないというのなら、わざわざ人間の前に出てきて、馴れ合うことなんて考えなればいい。

「別に、わちはそんなつもりで」

「そんなつもり無くたって、そう聞こえるよ」

本当は、少し考えれば巡にも理解できるはずだった。いや、実際はわかつていてるのかかもしれない。

かぼはもちろん巡を敵とみなしてそんな風に言っているのではない。巡に対して秘密にしたいわけではなくて、自分の弱点をわざわざひけらかすような真似をする必要はないということなのだろう。けれどそれを巡に知らせ、それがもとで、弱点を不用意に露呈することになるかもしれないことを恐れているのだとするなら。

自分は、まるでかぼに信頼されていないことなのだろうと。かぼは、大事なことを何も言わない。自分の都合ばかりを押し付ける。そんな態度で仲良くなんて言われたって、少しも説得力がないと巡は思う。

かぼにに対して怒つてばかりだけど。怒らせているのは彼女の方だと。

「別にそれで構わないよ。好きにすればいい。結局理解し合つことなんてできっこないんだから。どうせ人間は心が狭いんだからな」無性にイライラしてくる。

かぼが出て行かないなら、自分が出て行けばいい。巡は、座つていた椅子から腰を上げた。

「出かけてくる。絶対ついて来るなよ」

言い残して部屋を出ると、バタンと力強くドアを閉めた。

「……」

ポカソンとしていたかぼは、「ゴロゴロと転がっていたベッドの上で仰向けるになると、黒猫を腹の上に乗せた。

「メグは幸せな中でいるからの……」

生の刻と魔の刻の移り変わりという現実を、人間が本当の意味で知ることは、多分これまでこれからも、ない。

それだけで幸せなことだと、かぼは思う。

生の刻の住人たちは、ひとつ時代をまたぐことなく寿命を迎えるではないか。その永さを自分の身体と心で痛感することは、決してない。けれど魔の刻の住人たちは、それこそ千年一二千年という永き年月の中を、半分は強制的に眠りながら過ごさねばならないのだ。この年月の、重圧。

その中で起こる、様々な出来事。

これまで、かぼが経験してきた数え切れない、出来事。

弱点という言い方が悪かつたかもしれない。けれど、他にどう言えばいいかわからなかつた。本当は、別のことを恐れていた。

かぼが何から生まれたのかを知つても、巡はかぼを迫害したりしないだろつか。

そう信じたかつて、そうでないかもしれないという不安は拭いようがない。信用するとかしないとか、そういう話以前に、もう少し一緒にいて、長く時を過ごして、それから自然な話の流れで明かして行きたいことだつてあるのだけれど。

ああそうか。

自分と人間では、生きている時間が違すぎる。

人間は、きっとのんびりと待つてなどいられないのだろう。

短い時を生きる人間は、環境の急激な変化にも弱いのだろう。

「メグ、怒ったかの……」

ポツリと、かぼは弦いた。

かぼのたつた一言だったけれど、さつじゅうと溜めていたものだつてあつたのだろう。

けじ、だけじ。

仲良くしたいといふ言葉に、嘘なんてない。

むしろ、巡の方が仲よくしたがつていなによつて見えなへもなかつたのだけじ。

「雨の中、メグはどこに行つて時間を潰す気なのか

探そうかとも思ったけども、やつすればきっとまた巡は怒つてしまつた。

かぼは、ベッドの上で寝転んだまま、寝返りを打つてうつぶせになつた。

「雨は嫌いだ。

なんで、あんな風に怒ったかな。

家を出てそう経たないうちに、巡はすでに後悔の中にいた。雨の中、傘も持たずにしてしまったせいもある。深く考えずに家を飛び出したせいで、不必要に濡れるハメになってしまったなんて。

「……かぼのせいだ」

呟いてみても。

本当は、こんな風に怒る必要なんて無かつたと、今では思つ。反射で行動してしまってからしまったと思つことは誰にだつてある。

かぼにとっては、巡は弱点を見せられる相手ではなかつた。

それが、悔しいのか？

なんで？

まるで、自分が仲良くしてもらいたがつてゐみたいじゃないか。

巡的には、ただかぼに巻き込まれるだけ巻き込まれて、いちいち反応するのも面倒くさくなつてしまつたから馴れ合つようになつてしまつたんだつて、そんなつもりでいたのだけ。だつて魔物だとか妖怪だとか逢魔が時だとかつて、そんな非常識なことをまくしてられたあげくに、それが冗談でもなんでもなくて、逃げることも叶わずに、状況はこれからどんどん変わつていく。

だつたら、反抗し続けるよりは、受け入れた方が遙かに楽だ。

でも、それこそ、そういうつもりでいたのだとしたら、心を許していないといふ点ではお互い様ということになる。思えば、自分だけつてそういう態度でいたのだから、かぼのことばかり悪くは言えな

い。

まだ、出会つたばかりだ。

自分にとつても、かぼにとつても。

お互いがまだ出会つたばかりで、そしてそれは、魔物同士でも、人間同士でもなくて。理解するのに時間がかかるのは当然だ。

そしてどうやら、これからこの世界では、それが不可欠になるのであるうし。

特に、自分にとつては。

「はあ……」

考えれば考えるほど、巡の頭の中は混濁してくる。

「坊主、どうした」

声をかけられて、巡はその方向へ顔を向ける。

そこは天笠和菓子店の店先で、店の主人が店先に出したショーケースを片付けていたところだった。雨にあたつてしまわないよう

にだろう。

「こんな雨の中傘も差さんで。散歩か？」

今時珍しい、和装に身を包んだ初老の主人がショーケースの入った籠をしまう姿というのは、和風建築の店先にあって一種異様だ。

「親戚の子だとかいう小さな子供は、今日は一緒じゃないのか」

母親、かぼのことを親戚の子だとふれ回つてゐるらしい。妥当なラインだ。

「喧嘩もしたか」

巡の顔色で、天笠の主人はそう判断したらしい。

「なんで、ショーケースなんて始めたの？」

主人の質問に答えず、巡は疑問に思つていたことを口にした。話

をそらすつもりがあつたわけではないけれど、そう取られたかもしれない。

「ショーケリームが食べたいという子がいたのでな。頑固に主義を通すのも悪くはないが、需要に応えるのも時には必要だらう」これまで古式ゆかしく和菓子専門で商つていたといつことが伺える台詞だ。

しかし、まさかその子供といつのはかぼのことではないだらうな。巡は考えた。

タイミング的には微妙だが、彼女は巡の知らない外で何をやつているかわかつたものではないし。だが、店の主人は言つた。

「あの子もショーケリームは好きなんぢやないか？ 持つて行つて早く仲直りするがよからう」

あの子も、ということは、主人の言つショーケリーム好きの子供といつのはかぼのことではないらしい。なんてことを考えているうちに、主人はショーケリームをいくつか、店の商品袋に詰め込みはじめた。

「特別だ。そら」

「え、でも……」

タダでくれるらしいそれを断わりかけたが、子供が遠慮などするなど強引に渡された。

「早く仲直りするに越したことはない。せつかくあんなに楽しそうにしていたのに、そんなつまらん状態をいつまでも続けても損なだけだぞ」

巡は何も言わなかつたが、主人は巡とかぼが喧嘩をしていると断定したらしい。

「楽しそう？」

確かに、かぼはいつでもおおはしゃぎだつたような気がしなくもないが。

「あの子も、お前さんもな。笑つて話せる相手というのは、かけがえのないものだぞ。若いうちはわからんかもしけんがな。そして

失うのもあつといふ間だ。そうなつてからでは遅い」

経験豊富であるう主人の言葉には、それなりの重みがあるが、それ以上に。

かぼだけではなく、自分も楽しそうにしていたらしに事実の方に、巡は驚いていた。少なくとも、傍からはそう見えていたようだ。

「……けど」

かぼと自分は、心を許しあつてゐわけじやない。主人はもちろん知らないだらうが、彼女は人間ではないのだ。

そんな巡の顔色だけで事情を察したわけではないだらうが、主人は軽くため息をついたようだつた。

「子供のくせに、深く考へる素振りなど見せんでよろしい。嫌いでないのなら、一緒に楽しいことをせんか。それだけで充分だ」

「……」

一緒に楽しく、だた、それだけを？

本当は、かぼの見た目に反する実年齢の高さが、巡との感性の違いを作つてゐる原因にもなつてゐるのだが、巡自身はそのことに気が付いていない。

もともと少し大人びた子供だったから、負けん気が先に立つことが多い。

損とか得とか、楽とかじやなくて。

せつかくの新しい出会い、友達がひとり増えた分だけ楽しさも増やせばいい。多分、そういうことなのだらう。事実、巡はかぼと楽しそうにしていたらしにし。

つるさくて、人の話を聞かなくて、自分勝手。

けれど巡が怒つたのは、そこではなくて。

認められていないらしいということに腹が立つた。けれど、巡だつてそれは同じ。魔物であるとかそういうことを抜きにするなら、歩み寄れる姿勢じやなかつたのは、自分の方だ。

少し力を抜いたなら、かぼとちゃんと心から馴染むことができる

だろうか。たとえば自然とできる、友人のように。そうきっと、あまり深く考えないほうがスムーズに進むことだってあるに違いない。

「ありがと……」

巡は受け取ったシュークリームの袋の取つ手を、ギュウ、と握りしめた。

巡が出て行つてすぐ、かぼは部屋の窓を開けて、外に身を乗り出していた。

「雨、止まんの……」

かぼは昔から、雨に当たるのを極端なくらいに避ける。

振り落ちてくる雨粒がその身体に当たるたびに、その内側にある温かさが失われていくような、そんな感覚があった。

そんな雨の中、巡は出て行つてしまつた。

怒られるからついて行くことはできなかつたけれど、でも一番に見えるところで待つてゐるのなら構わないかなと。そんな風に思つて、窓から外に出る。

雨は嫌いだけど。

少し当たるくらいなら、大丈夫だらう。

雨に当たることよりも、巡がそこにいてくれないことが。

だつて巡は、かぼが目覚めたときに最初に見つけた、真つ直ぐな瞳だから。かぼに名前をつけてくれたり、何も言わなくても黒猫を家に連れ帰つてくれたり。かぼに世話を押し付けるのは、これからも、かぼが巡の家で暮らしていひつて、そう言つてくれているのだ。とても、優しい子なのだ。

だから早く巡を見つけられるよつて、雨の当たる玄関先に、かぼは座り込んだ。

それでもやつぱり雨は冷たくて。流れ落ちる水と一緒に、自分の中の何かもこぼれ落ちていくよう

早く巡を見つけよつとする意志と裏腹に、かぼの臉はゆづくつと、

閉じていった。

天笠和菓子店は、巡の家の近所ではあるけれど、それでも数百メートルは離れている。家を出てからむつりと歩いて雨に濡れてしまつた道を、巡は今度は走つて帰つた。

あの時、結局買つてやらなかつたショークリーム。これを見たら、かぼは喜ぶだらうか。知つてはいても、食べたことのないような素振りではあつたし。そしてかぼが喜んだとしたら、やっぱり自分も嬉しかつたりするんだらうか。それはどうだかわからないけれど、今、巡はかぼの喜ぶことをしようとしている。

喜ばせたいと思つた訳ではないけれど、喜ぶだらうな、とは考えた。

そしたらまた上機嫌で、魔物のウンチク語りなんて始めるだらうか。そうすれば、巡はもつとかぼやあの黒猫のことを知ることが出来る。それは案外、悪くないことなのかも知れない。

巡は、その勢いのまま、家の小さな門に駆け込んだ。

その足が、止まる。

かぼが、いた。

門から少しだけ離れた玄関先で、うつ伏せになつて倒れていた。

「……かぼ？」

返事はない。

雨の中、雨の中なのに、かぼはその場にうつ伏せになつたまま、ピクリとも動かなかつた。

身体に当たる雨のしづくが、何の抵抗もなしに流れ落ちる。まるで石の上でも滑り落ちるみつこ。

こんな光景を、巡は以前にも目にしたことがある。

あれは確か、車にひかれて道路で死んでいた、小さな猫だ。

硬くなつた身体の上を、冷たい水がただただ流れていあの光景。

かぼは、何と言つていた？

雨は嫌いだと、言つていなかつたか。

そいつは水に当たつただけで消えてしまつ。

かぼのあの時の声が、今聞こえた。

そんな物の怪がかぼのことではないと、誰も、言つていない。

動かないかぼを見つめたまま、巡は手に持つていてシュークリームの袋を、バサリと取り落とした。

なんだよ。

「なんだよ……」

なんで、雨の中待つてたりするんだよ。

こんな短時間の間に、そんな姿になつてしまふくらいなら、なん

で。

命を懸けてまでやらなきやいけないようなことじやないだらうー?

雨に当たるだけで死んでしまうような身体だつたら、それを本人が知らないはずがない。でももし、もし、知らなかつたら？ ただし本能で嫌つていたのが、実は命に関わることだからだつて、本人が知らないことだつて、あるかもしれない。

だけど、嫌いだつて言つてたのに。

嫌いだけど、それでも巡を待つために、こんなところで、ずっと。だけど死んでしまつたら、何の意味もないのに！

「ばつかじやないのか、お前！！」

雨の中、立ち戻りました。

巡は動かないかぼに向かつて叫んだ。

悪態をついても文句のひとつも返つてこないことが、こんなにも胸に衝撃を与えるなんて。喧嘩なんかしたつて。文句を言い合つてたつて良かったのだ。こんな風に、動かなくなるより、ずっと、ずっと良かった。

どうして、もっと前に気付けなかつたのか。

失くすのはあつという間だつて、さつき聞いたばかりだ。もっと前に聞いていたら。でももっと前に聞いていたとしたつて、きっとその時の自分には、やっぱりわからなかつただろう。

絶対に戻つてこないものなんて、この世にはいくらだつてあるのだ。

バカじやないのか。バカじやないのか。

こんなにあつさりといつちまつくらいなら、最初から付きまとつたりするな。

自分から付きまとつてきたのだから、勝手に死ぬな！

文句を言つたつて、何を願つたつて、失つてからでは、何もかも遅い。

一番バカなのは、自分だ……。

この時。

この、一見普通の少女と変わらない、陽気な物の怪との騒がしい出会いと、突然の別れが、

巡のこれから的人生を、大きく変えることになる。

なんて訳はなくて。

「…………しゅーくりーむ！！」

ガバリと、少女が頭を持ち上げた。

「…………ツ！！」

巡、啞然。

「しゅ、しゅーくりーむがあ、水溜りにいいー！！」
うつ伏せになつたまま顔だけ上げたかぼは、まるで脂きつた羽と
長い触角を持つ黒い悪魔のことくに、力サカサとほふく前進でシュー
ークリームの袋に這い寄つた。

「もつたひないじやないか！　このかぐわしき匂い、これはしゅー
くりーむだろう！？」

……何が起こつた。

「お、お……」

「お？」

「お前、死んでたんじやないのかよ！？」

巡の叫びにポカンとしたかぼは、さすがに仰天の表情を作つた。

この少女には珍しい現象。

「何を言うか、失礼な！！」

「だつて！！」

ついさっき頭の中を駆け巡つた様々なことを、取りとめもなくわ
めき散らす巡に、かぼはますます目を見開いた。

「メグ……ぬし、案外慌て者だの」

「なんだよ……」

バツの悪そうな巡に、かぼは這いすつた格好のまま、呆れたよくなため息をつく。

「生きるか死ぬかの問題だつたら『好き嫌い』で済むわけがなかろうよ」

それはそうだが、巡は、かぼが無自覚なんじやないかとまで考えたのだ。難しく考えすぎだと言われたとしても、家の中にいたはずの者が雨の中で倒れていたら、誰だつてまずは驚く。

「それになあ、わちら物の怪は、魂が消えれば身体も残らんよ」

「そんなことを知つてゐるわけがないだろ！――！」

そりやそりや、かぼはナハナハと笑う。楽しそうな瞳が、巡に向けてせりて細められた。

「そういうことも含めて、思ついたとおり話してやるわ。わちらの色々なことはな」

一度に全てを話すには、情報量が大きすぎるのだ。

しかしそうか、とかぼはニヤつくる。かぼが死んだら、巡は慌てるか、と。そう考えたら、自然と笑みがこぼれてしまつかぼだ。まだ、嫌われてゐるわけじゃなかつたと。

「ていうか」

巡は一度、大きく息を吸つた。

「大体なんでこんなとこで倒れてるんだ、お前は――」

もつともな意見だ。

「あ――わち、雨は嫌いだから。這つてこらつて、ついつい眠気がきてしまつたのだ」

巡には意味がわからない。

「それも追々な」

かぼが雨の中で眠気を来たしてしまつたのは、完全な逃避の表れだ。彼女が何から逃避するには眠るのが一番良いのを、かぼの本

能は一番良く知っている。自分を追いやる生の刻を、ただただ眠つてやりすゞしたよう。

そして、彼女が雨を嫌うのも、ちゃんと理由があつてのことなのが。

それもいつか、話す時もあるだらう。

「そのうち話してやるから、まずはこれを食べていいかの」ずつと抱えてくるショーケースの袋を、かぼはきりめく眼差しで見つめる。

「その前に風呂に入れ」

かぼの首根っこを捕まえて起き上がらせると、巡はその手からショーケースを奪い取つた。しかしさたしてこのショーケースは、まだ食べられるのだらうか。

「メグのケチんぼ！」

その言葉も何度聞いたことか。

なんと言われても、こんな濡れ鼠のまま菓子を食つことを優先させるのは許さない。

ケチと罵られても　生きてて、良かつた。

正確には、彼ら魔物は生きてはないらしいけど。
動いてしゃべっているのだから、それはそれで良しとしよう。
手遅れにならなかつたことを、自分は心から安堵しているのだから。

15。

手足をバタつかせて抗議するかぼを引きずつて、巡は雨の当たらぬ家の中へ入つて行つた。

二人が住む、雨の届かない場所へ。

実習で採ったユスラウメは、けつこう美味かつた。
苺だのバナナだの、店で売っている果物に比べて大味で青臭かつたけど、野生でんな風に食べられる木の実があるというのは、巡にとつては初めての経験だった。母や姉にも見せてやつたら喜ぶかもしれない。

そんな訳で、巡は学校裏の雑木林まで足を運んできた。

「メグは雑木林が好きだのー」

何気についてくるかぼ。

これは本当にどうかと思う巡のだが。

こう外についてこられては、街中に存在を認知されてしまうのも時間の問題なのだ。実際、天笠の主人もかぼのことは知っていた。成瀬家にも来客が無い訳ではないし、隠し通すのは至難の業だ。母や姉にいたつては、隠す気もさらさらないようだし、見た目普通の人間と変わらないから、かまわないかもしねないが。クラスメイトとかに見られてしまうと、もう学校にかぼがやつてきてしまつても、存在を隠せなくなる。

それならそれで、学校に来なければ良いだけの話だし、一応かぼは、もう学校に不用意には行かないと言つてはいる。しかし実際どうなるかはわかつたものではない。

だがそういう話をしても、かぼは「メグよりはずつとうまいことやるから大丈夫だ」と、呑気なものだ。

まあ、それはともかく。

この雑木林には、確かに小さな川も流れていた。あれは新発見だ。

辿つてみれば街中の河川に繋がつてゐるのかもしないが、今まで存在も知らなかつたのだから、もつとじつくり見てみたい。

歳相応に冒険心旺盛な巡だ。

一応は私有地である場所で好き勝手な巡だが、この辺は立ち入り禁止と区切られてゐる場所ではないので、暗黙の了解で時々近所の人間がヨモギや栗を探りに来たりしている。持ち主である藤乃木学園グループの理事長は、それと知つていて開放したままにしている、案外おおらかな人間だ。そして不必要に森の恵みを乱獲したり、問題を起こす人間は、これまでに現れていない。学校での企画の場合には一応許可を取つたりもするが、実際はそれが通らなかつたことはなかつた。

記憶の場所に、巡は小さな川を発見した。

「魚とかいるのかな……」

背の低い草の中忽然と姿を見せる水の流れを、巡はしげしげと眺める。

「魚もいるだ。ここは中央付近はそこそこ深くなつてゐるから氣をつけたほうがいいの。流れがきつい訳ではないが、ぬしの身長なら腰までは浸かつてしまつぞ」

かぼは言いながら、早速川の端に足をつけてバシャバシャと遊びだす。

とりあえずそんなかぼを引きずつて上流を田舎しだして、巡は一瞬足を止めた。

「!?

上流の方向に、何かいる。

「かぼ、ちょっと待て。あそこ

目で良く確認できない。というか、見たこともない造形をしているせいで、その形が上手く頭に入つてこない。

巡はそれを、凝視した。

「ん? おお、なんだ、ミーシャではないか

「は、なんだつて……？」

駆け出すかぼを追いかけながら、その何かを見極める。足許がおろそかになつてゐるが、そんな場合ぢやない。アレは一体、なんだ。

「ミー・シャ！ ぬしも田覚めておつたのかの～」

大声で呼びかけるかぼに、何だか良くなきものは、ゆつくりとこつちを見た。つまり、動いた黒っぽい部分が頭部だと田で確認する巡。

「ミー・シャ……？」

あれは、ミー・シャと呼ばれる類の見た田だらうか。

「なんだ、オメエも目覚めりや相変わらず元気だな。オメエよりはオレは頻繁に動いてたぞ」

その何かが、しゃべる。今更だが、生き物だつたのか。

というか。

近付いてよく見てみれば、それは形だけは、人とよく似ていた。真つ黒に見えた頭部は、伸びっぱなしの髪がドレッドのように、しかし中途半端に絡みついたものだ。不思議とボサボサな感じがない。

そして決してつぶらとはいえない細い瞳。眼光が鋭い。

なにやら柄物のTシャツとハーフパンツをズタつと着こなしたその身体は妙に浅黒く、裸足のままの足と骨ばつた手の指の先にある爪は力ギ爪だ。引っ搔かれたら、多分致命傷になる。そして指の間にあるそれは、もしかして、水かきか。

何よりも、その顔は。

口があるべき場所に見えるそれは、唇ではなく、くちばしだ。空を飛ぶ鳥ではなく、水辺にいるタイプの平べつたいアレ。

そんな物体が、ゆつたりと川辺の岩に、腰掛けている。

「こやつは水というか『川』から生まれた物の怪でな。人間で言つとこゆの河童みたいなものかの」

「河童あ！？」

言われてみれば、そう見えなくもないが、何しろ巡は河童の実物を見たことがない。しかし本に出てくる河童は、もつちよつとこへ、子供っぽいというか可愛いタイプが多かつたような氣もある。

「もちろん人間の知つている河童は、人間が想像で作り出した河童だ。だがおそらく、こやつのような物の怪がもとになつてているのだろうな。だからまあ、河童といつ種類で呼んで構わんと、そういうことだ」

そういうえば、河童には付き物のいくつかが足りない。

「皿と甲羅……」

その河童の姿に見入つてしまつていた巡が、それだけを呟いた。それを聞いた河童が、ゲタゲタと笑い出す。

「おどき話でよく見るアレだな。皿も甲羅も持つてねえ訳じやねえぞ。別に普段は出さなくてもいいだけだ。ある意味人間の観察力も鋭いからなあ。オレにそういうアイテムがあるつてのを、昔の人間どもは見逃さなかつたんだな。一応人間の描くあの姿も、間違いじやねえな」

鋭い眼光のミーシャ、何気に豪快だがとつつきやすい好印象だ。「しかしアレだな。もうオメエが人間とツルんでるつてことは、いよいよ魔の刻も本領發揮つてことか」

かぼに對して気さくに笑いかけるミーシャに、かぼは「まだまだだがな」と返事をしてから、何気に胸を張つた。

「今は『かぼ』だ。そう呼ぶがいいぞ」

「なんだ、また名前変わつてんのか」

また？

巡はかぼを見る。確かに、名前はないとかそんなことを言つてなかつたか。

「昔人間につけられた名前なぞ、もう憶えておらんわ。わちらは本当は『これといった名前は持つておらんものよ

「でも……」

昔つけられた名前があるなら、それでも良かつたんだろ？

「名なぞ、何でも良いわ。ミーシャは、その昔わがつけられた名前だから。いやつもずっとそれを使ってはくるが。

「何を感じて、この河童でアーシャなどと遊ぶたのだ、この少女は。

しかしつまりまた、巡は物の怪を発見してしまったということ。

かぼは、自分との出会いがきっかけで、これから次々と物の怪で出会うことなる、とは言っていたが。ここ数日で、黒猫と河童。確かにこれまで、こんな連中を見たことなんてなかったの。

ただ少なくとも言えるのは。

初めて出会ったのが、この河童ではなくかぼだったのは、巡とつては幸運だったということだ。コレと最初に出会ってから、巡は未だに夜眠れぬ生活だったかもしれません……。

それにしても。

どうしても、気になる。

「なんでミー・シャなんだ？」

この河童のどこがミー・シャなのかと、巡は考えに考えた。眼光鋭くいかつい見た目のこの河童に、何ゆえミー・シャ。それに昔名付けたという昔は、一体いつの昔なのか。おそらく外国との国交の少ない時代に、なぜ日本らしからぬ名前。

「物の怪に国境はないぞ。だが、別に外国人を意識した名前ではないんだがな。最初は『みーちゃん』と呼んでおつたのだが、それが幼子に呼びかけるように『みーしゃん』になり、そしてみーしゃ、と……」

「幼子……」

巡の当然の疑問に、かぼは大げさにため息をついてみせた。

「ミー・シャはこれでも生まれた時は本当にかわいかったのだが。まるで人間の幼子のようにな。それが今ではこの有様だ」

かわいかった？

幼子のよう？

それが真実なら、今では見る影もない。

というか、物の怪でも成長したりするのだろうか。なら何故、かぼは長い時代、子供の姿のままなのか。大体、物の怪の身体は人間と違つて形だけの器でしかないみたいな話をしていなかつたか。

ミー・シャに対し、疑問大爆発。

「物の怪は、様々なものから変化した者だという話はしただろう。このミー・シャは『川』という存在から生まれたわけだがな、常に川とこのものの変化を受け止めながら、暮らしていかねばならん。」

…昔はどこの川も本当にきれいだつたんだが。今では水質も落ちて、その鏡であるミーシャも、こんな姿になつてしまつた

そういうえば、感知したくない変化さえも、取り入れなければならない例もある、なんてことを以前にかほが言つてはいたが。母体である川がどんどん美しくなくなつてしまつたせいで、ミーシャはこんな風に衰え乱れ、何気に現代ナイスされてしまつたのか。これはこれで味があるような気もするが。

「ミーシャ。ぬしはあくまで『川』が転じた物の怪であつて、どこの特定の川の傍でしか暮らしていけないわけじやなかう。世界には、いや、日本の中にだつて未だ美しい川はいくらでもあるんだ。そこに引越しせば、そんな姿には……」

そういうものなのか。

川とひとくぐりにしてはいるが、自分が今暮らすこの川の影響がその心身に投影されるということらしい。

「別にオレはこれでかまわねえよ。なかなか気に入つてるぜ？ 別にこの程度で済むんなら、わざわざ遠くに引越しする方が面倒くせ」

H

この辺りのどの川で生まれたのかはわからないが。

巡はミーシャを見ていて、何となく感じた。面倒くさいなんて言い方をしていて、きっとミーシャはこの土地や川が好きなんだろうなと。だから、そんな姿になつても離れないんだなと。

そんな姿でも、なんとなくミーシャが幸せに満足しているよう見えたのだ。

もちろん、本当は何もかも満足、なんてことはないはずだ。ミーシャが生まれた頃の川というのがそれほど美しいものであつたか、巡には到底想像もつかないが。本当だつたら、そんな環境で暮らせたらもつといいんだわ。

環境問題とかになると、巡が自分ひとりでどうにかできる次元ではないし。

こまこまにあるこの小川は、魚もいるというし、巡からしてみれ

ば随分きれいな環境に見えるのだが、色々と複雑な問題もあるのだろう。

「まあな。結局今そこにあるものを、あるがままに受け止める。それがわちらにとつては当たり前のことだからの、うんうんとうなずくかぼ。

難しい問題だが、巡も自分なりに考えてみる。

人間でも物の怪でもきっと変わらない。

好きなものについては、案外何でもガマンできてしまうものだし、受け入れてしまうものだ。

好きなもの、という言い方でいいのかはわからないが。

「ミーシャはつまり、ここが好きなんだな」

そう言つてみたら、人相の悪いミーシャは巡に向かつて破顔した。「その通りだな。ぶつちやけ言つちまえば、ここが故郷というわけじゃねえが、流れて流れ着いたこの場所は、これでなかなか住み心地のいいものだぜ」

ポンポンと、ミーシャはその大きな手で巡の頭を優しく叩く。爪が食い込んだら痛いでは済まなそうな力ギ爪だが、きちんと加減してくれている。

「美しけりや何でもいいってわけでもねーや。本来川ってのは、そうなるうとしてなつたモンじゃなくて、自然が作り上げた水の形だ。それに沿つて清らかに流れるのも悪くはねーが、そこに介入する『嘗み』があるほうが、オレあ好きなんだよ。そのせいであつとばかり環境が変わつてもな」

水の流れである川を、多種多様な生物たちが利用し、介入する。そこには確かに嘗みがある。それを愛おしいと感じるなら、やはりミーシャが『水』ではなく『川』の物の怪であるがゆえなのだろうか。

かぼが、ああそうだな、と思い出したように手を打つた。

「そういえば、わちがぬしに名前をつけてやつたのは、この土地ではなかつたな。あれはどこだつたか……」

かぼ、物忘れが激しいにも程つてものがある。

彼らがいつどこで知り合つたのかは知らないが。

それぞれに違う土地から流れ着いたのだとしたら、今ここで一人が再会するというのは、とてつもない確率の偶然ではないのか。

「まあ、わちらには縁というものが生まれているから。」うして再会するのもそうおかしいことでもない

巡の疑問を、縁という一言で一蹴してしまつかぼ。

しかしかぼの様子から察するに、かぼよりもこの河童のほうが、後に生まれているということなのか。本当に物の怪ということのは、見た目では語れない。

「ていうか、今引っ越すのが面倒つて話、してなかつた？」

「ここが故郷でないなら、どこから引っ越してきたといふことではないのかと、巡は自然にそう考へる。

「徐々に、流れてきたんだよ。気の向くままにな。そして大分前にここにたどり着いて、そのまま居着いちまつたわけだが、ここもその頃から考えたら、随分変わつちまつたな」

まあその姿を見れば、そうなのだろうが。それでも環境のいい場所を見つけて、あらためて住み直すといふ考へはないということか。この街この場所に、どんな思い入れがあるのかはわからないけど。

「わちは今、こやつの家にいるから。」いつでも遊びに来るといいぞ

サラリと言つかぼに、巡は内心仰天した。

家主の許可もなしに、なんてことを。

確かにミーシャは悪いヤツではないというか、実際話してみれば、かぼよりもずっと話のわかるタイプなのかもしだれないが。何しろその外見を、巡の家族に見られるのは。

かぼを認識した時のように、平然としていてくれるものだらうか。

「おい、かぼ！」

「なんだ、メグ？」

まるで罪のなさそうな顔。

外見云々の話は、かぼにはきっと通じないだらう。

「その、家に来るときには極力厚着で来るようにしてくれ……
それだけを言つのが精一杯の、土壇場に弱い巡だった。

現代ナイズされた河童との邂逅から数日。

今日も普通に学校に行って、約束通りかぼもついて来なかつたおかげで平凡に一日を過ごして、そして家に帰つてきた巡は、庭での賑わいに気付いてそこを覗き込み、一気に脱力した。

巡の家には家庭菜園くらいできる程度の小さな庭がある。そこには小さな池までつて、昔は父親が趣味で錦鯉を飼つていた。その後はその池の中身が金魚になつたりしたものだが、今では水が張つてあるだけで、何もいない。

そこへ、ミーシャが浸かつていた。

「…………ミーシャ…………」

ガクリとひざをつく巡に、池の中で膝を抱えるミーシャがやれやれとため息をよこす。

「かぼが、巡の家にいい水場があるつていうから来てみりやあ、随分と小さいんで驚いた。膝丈くらいしかねえじやねえか」

一般家庭にある人工の池なのだから仕方がない。

身長160cmもない巡ですら、プールの代わりにもならないささやかな池に、巡よりも頭ふたつ分はでかいミーシャが詰まつている光景は、滑稽ですらある。

「かぼの言うこと鵜呑みにしちゃ…………」

彼らは付き合いが長いのではないか。かぼの言うことなんて案外適当で大雑把であるなんて、ミーシャにもわかりそうなものだが。「なんだ失礼だな。別にかぼは嘘は言つておらん。なかなかハマッているじゃないか」

池の傍で座り込んでいたかぼが、心外とばかりに頬を膨らませながら巡を見上げる。

確かに、嵌まっているが。物理的な意味で。

「あらメグ、帰つてたの？ それなら声かけてよ。メグの分もおやつ用意するから、手を洗つてらっしゃい」

家中から顔を出す母、由美香。

一瞬ドキリとした巡だが、その手に持つていてトレーには、すでに一人分の紅茶のグラスとプリンが乗つていた。

かぼと、ミーシャの分か。

「ミーシャさん、ストローで大丈夫かしら？ でもグラスで直にヨリは飲みやすいかなあ」

くちばしの形状を気にする母。

「おひこり、かぼ！！」

巡は、小さな声でかぼを招きよせた。

「なんだ」

「お前な、不可抗力で見えるものは仕方ないけど、わざわざいつの連中に物の怪を紹介することはないだろ」

そんな巡に、かぼはいやいやと首を振る。

「これからは、このくらい慣れておいた方が生きやすい世になるぞ。それに別に、わちが母上にあらためて紹介した訳ではないんだが、うつかり庭で話しているのを見られてしまったわ」

「……」

「つかりというか、そりやあ庭で話なんかしてれば気付かれるのは当然だろ」

しかし本当に母、この河童を見て何とも思わないのか。かぼのことは普通の子供ではないと認識していたとしても、実際かぼは普通の人間と同じようにしか見えないし、あの驚異的な身体能力を見た訳でもないのに。

どこでそんな免疫が出来ているのだ。

「母上も芽衣も確かにおおらかな性質だのー。猫と天井星取りゲー

ムをして遊んでたら、飛んだり跳ねたりしても全然物音がしないと感心しきりで喜んで観戦くれたしの」

「……て、天井星取りゲーム……？」

「天井に沢山星を張つてな、それをジャンプして取つて、どっちが早く集められるかのゲームだ。しかし相手は猫だでの。意味がわかつておらんから、かぼの圧勝だったが」

かぼ巡の見ていないところで既に様々な猛威を振るつてくれているらしい。

巡の知らないうちに、母や姉は人外に飛んだり跳ねたりしているかぼや、その相手をしている猫を日常で眺めていたとか。

「……少しば加減してくれ……」

学校に来ないと安心していたが、来ないなら来ないで別の場所で心配の種を増やしていくそうだ。

「メグ、わちを誰だと思っているのだ。ぬしよりもずっと長く生きておるのだぞ。人生の先輩に心配は無用だ」
人じやないだろ。

言えばこじれるから、巡は黙つていたが。

「ほらほらメグ、早く手を洗つてらつしゃい。でもプリン多めに買っておいて良かつたわ~」

別段気にかかることのある様子でもない母。

そうだ。かぼよりも、こんな神経で今日に至るまで普通に生きてきた母のほうが脅威だ。これまで気付きもしなかつたが。

巡の家の飼い猫になつてしまつた二股尻尾の黒猫が、母の足に擦り寄ってきた。

「あら……猫ちゃんプリン欲しいの？ でも猫にプリンは良くないわよねえ。今度別のおやつ買ってきてあげるから、今日はガマンしてもらえないかしら」

律儀に猫に話しかける由美香を見て、池の中で座り込んでいる二

一 シャが細い目を見開いた。

「何だ、良く見たらオメエ、シンじゃねえか」

「え！？」

知り合いか！？

「こんなところにいたのか。久しぶりだな。つつとも、それじゃ話も出来ねえな。シン、変化しろよ」

親しそうに一方的にしゃべるミーシャの言葉の直後に、シンと呼ばれた黒猫は突然グワッと、その姿を歪ませた。

一瞬にして、その容積が数倍に膨れ上がる。

「！？」

膨れ上がつて、変形しているような、輪郭がブレているような。猫だったシルエットが高速で形を変え、形成されていくのは、人のような姿。

田の前の光景を把握できずに瞬きも忘れる巡の田の前に、真っ黒な上下、TシャツとGパン。らしき衣服に身を包んだ、十五~十六歳くらいに見える少年が現れた。

「はー、助かつた……」

それは歳若い男の、巡よりほんの少し低めの声。

キヨトンとする母の足許 庭に面した廊下に尻をつき脱力する
その少年は、バサバサの黒い髪を搔きあげて、巡に向かって「よつ」と片手を挙げてみせる。

……今度はまた、何が起こったのか。

巡の目の前であぐらをかく少年は、さつきまで確かに黒猫だったはず。

巡は、マジマジとその少年を眺めてしまった。

「……ホントに、あの黒猫？」

田の前で変身した姿を見ても、にわかには信じがたい。かぼやミーシャを散々見た後でも、こうもありえない光景を見せ付けられてしまうと、やはり頭は追いついてこないものだ。

「そだよ

」ともなげな黒猫。

「しつかしなー、いつまたこの姿になれるかわからなかつたから、ミーシャがいてくれて助かつたわ」

廊下にあぐらをかいたまま、両手を後ろひつひついてリラックスする元黒猫。

「あらあ……人なら、プリン食べても大丈夫かしら……」

そして、相変わらず天然な発言をかます母。

「あ、おかまいなくー。いちいちこの人数分おやつ用意してたらキリがないでしょ、ママさん」

「ま、いい子ね。心配しなくとも大丈夫よ」

猫のくせに気遣いのできる彼にいたく感心した母は、いそいそとプリンを取りに台所に向かつてしまつた。

「どうなつてんだ……」

そんな母と確かに血は繋がつてゐるはずなのだが、この事態にひとりついていけない巡。それが普通の感覚というのだが、往々にして状況というものは、多数決で動いて行くものだ。この光景に疑問を抱く巡に同調してくれる存在は、今ここには無い。

「なんだ、ぬしは人型になれたのか。なぜ今まで隠しておったのだ？」

かぼが呆れたように腕を組んで見せたが、もちろんこの状況そのものはすっかり受け入れてしまつてはいる。まあ、彼女はもちろん人間ではないのだから当然だ。

シンと呼ばれた元黒猫の少年は、疲れたように首を振つた。

「いや、隠してた訳じゃないんだけどな……」

見ての通り、彼は猫が変化した物の怪だ。猫と人と、ふたつの姿を持ち合わせる。が、その仕組みに問題があつた。

「一応オレ、基本形は猫なんだよ。人でいるよりは猫でいるほうが楽は楽なんだけど、困つたことに、猫でいる時のオレは、マジで猫なんだよなあ」

言われている意味が、巡にだけはわからない。

つまり、彼は。

人でいる時は、人の言葉も解するし、人と同じ行動パターンを持つ。故に、人としての常識や理性も理解する。猫でいたときの自分の行動も憶えている。

が、ひとたび猫に戻ると。

彼は、本当に猫なのだ。

たとえば人間相手に機嫌を読んだりはできるが、基本的には人の言葉を解さない。猫として生き、猫としての本能を持つ。まるつきり存在が猫。だから、自分の意志では人間型に変化することはできないし、また、しようとも思わない。彼は、猫だから。

日向ぼっこをしたり遊んだり、犬と張り合つて走り回つたり。人型でいれば減らない腹も猫の時は減るし、もちろんご不浄だつて人目をばかかることなく砂場でカリカリやつたりする。物の怪でありながら、しつこいようだが、まるつきり本物の、猫。ただしかぼたちと同じように、通常、生の刻の生物には見えにくい。

「さつきニーシャが言つたキーワードで他人から命令されないと、

オレは人になれないんだよ」

「キーワード?」

巡とかぼは、同時に首をかしげる。

「変化しろ、つてな意味合いの言葉だな」

訳知り顔で、ミーシャが呟いた。

「こいつは先の魔の刻の終わり頃に生まれた若い物の怪でな。オレがシンと初対面のときはこいつ人型だったからこういう性質だつてのも知れたが、生の刻ではまったく顔を合わせてなかつたからな。久しぶりだらう、人型になつたのは」

ミーシャの言葉に、シンはうんうんと頷く。

「ミーシャ以外に知り合いがないわけじゃないけどな。生の刻でみんな籠つちまつてたし、実際人型になつたのは数百年ぶりだ」進んで人間の姿になりたい訳ではないが、猫の姿の時は、他の誰とも「コミュニケーションが取れないから、そういう意味では苦労することになる。もちろん、猫でいるときの彼はそんな苦労を感じることもないわけだが。

「不便だの……」

げんなりするシンに向かつて、かぼは同情の目を向けている。

実際、物の怪というのは基本的に、この世に存在するありとあらゆるもの思考を理解できるものだ。たとえば動物と人間では思考形態も違うわけだが、それすらもおおよそ理解することが出来る。人間のように言葉でコミュニケーションを取る訳にはいかない動物でも、相手が今どんな気持ちでいるのかとか、その相手の立場で理解することが可能なのだ。だから、それと同じように、人間とも人間特有の言葉でのコミュニケーションを取ることができる。時代が流れで言葉や社会が変わつても、その時代に瞬時に馴染むことができる、器を持たない魂の存在。それが物の怪なのがだ。

時々、シンのような物の怪も存在する。

人型になつてさえいれば、他の物の怪と変わらない能力を有する

のだが、猫の姿をしている時の彼は、本当に猫でしかない。ゆえに、物の怪の中では、かぼの言つようにかなり不便な部類に入る。

魔の刻の社会も色々複雑なようだ。

「道理でどんな名前で呼んでも反応しないはずだ。ちゃんと名前を持つていたのだな」

かぼは妙な方向で納得している。

実際、拾つてから名前をつけようとしなかつた訳ではないのだが、どんな名前をつけても、それに関してだけは、黒猫はまったく反応を示さなかつたのだ。むしろ、ただ「猫」と呼んでやつた方が、まだ反応があつた。

なるほど名前があつたのなら仕方がないと、かぼは合点がいったような顔をする。

そして説明を聞くうちに少々落ち着いてきた巡は、言つていいものかと悩みつつ、シンを眺めた。

「でもそれって……人型になつた時、かなり恥ずかしかつたりしない？」

それでも言つてしまつた巡の言葉に、シンはガックリと首を垂れる。

「恥ずかしいなんてモンじやないぜ……」

猫であるシンは、猫以外の何者でもないから、人間であつた頃のことなど何一つ憶えてはいない。だが人型になつたシンは、猫であつたときの自分の状況をいちいち覚えている。

例えば人に腹を撫でられて伸びている姿や、用を足すためにバリバリと地面を引っかく姿、追いかけていくうちに切れたトカゲの尻尾にはしゃぎまくる自分。その他もろもろの、猫として過ごした時間、全て覚えているのだ。そんな姿を、惜しげもなく他にさらしていったという事実を。

恥ずかしくない訳がない。

シンは猫の物の怪だから、猫でいる自分やその習慣を自ら否

定する気もないのだが、いかんせんこうして人の形をとり、人間のように振舞える人型バージョンのシンからしてみれば、猫でいるときの自分はこう、無邪気で何の罪もない幼い子供の姿を晒しているような、そんな気分になってしまうのだ。

「で、まあ、ずっと人の姿でいるのは正直疲れるんだぞ。やつぱり猫でいることが多いんだけど、ぶつちやけ猫でいる時は何もすることができないから、用事ができたときはいつでも変化させて構わないぜ」人から猫への変化は自力でできるらしく、くつたくなくそんなことを言うシンだが。

「そうか。では今度、母上か芽衣の膝の上でくつろいでいる時にでも、変化させてみようかの」

楽しそうにからかい混じりで提案するかぼの一言に、シンはブルブルと首を振りまくつた。

「そ、それはちょっと！－」

由美香と芽衣の膝の上は居心地がいいだけに、一番発生しやすいシチュエーションだ。

本当にかわいそだだから、それだけはやめてやれ。巡は早々に、シンに対して同情の眼差しを向けるようになっていた。

さて、六月といえば、梅雨だ。

夏休みまであとひと月といつこの時期、雨はもちろん多いのだが、それよりも暑さが勝る日もある。しかも、初夏特有の湿気も加わっているから始末におえない。

今日の巡は、かなり寝苦しい夜を過ごしていた。

本格的な夏を迎える頃には、そこそこ暑さにも慣れてくるものだが、夏の入り口といつこの時期は、なんだかんだ言って身体にこたえるものかもしれない。

暑い。というか息苦しい。

なのに。

それなのに、ベッドに横たわる巡の腹の上には、黒い猫がどっかりと乗っている。

暑苦しくてかなわない。

何度か下ろしてみたのだが、巡の腹の何が気に入っているのか、すぐにはまた乗りあがってくる。彼も物の怪とはいえ、猫でいる時は猫そのものだから、人間に良く懷いているのは納得できなくなはないが、それにしたって、普通の猫だって、暑い日には人肌に寄り付かないものなのに。そうでなくとも猫は暑がりなのではないのか。いつもかぼの寝る部屋にでも行ってくれれば楽なのだが、どうもこの猫は、寝る時は巡のことがお気に入りらしい。かぼは寝相が悪いのかもしねれない。

寝る時まで一緒にさすがに落ち着かないからと、せっかく余っていた部屋をかぼに使わせているというのに、これでは状況が変わらない。冬なら歓迎するが。

ガマンできなくなつた巡は、再び猫を掴んでベッドの隅に放つた

後、間髪入れずに呟いた。

「シン……変化……」

その瞬間、その小さな身体が大きく歪み、黒猫は巡よりも数センチ身長の高い少年に変化した。

ベッドの上に尻をついて座り込んだ姿勢で、シンはキヨトンと巡を見る。

五秒ほどの無言の間の後。

「……う暑つちいい！！」

バタバタと手を使って自分の顔を仰ぎだす。

だから暑いと言っているではないか（言つてはいな）。

「何だよ何だよメグ、なんでこんなムシムシした部屋の中で、狭い場所に固まつて寝てなきやならないんだ！？」

その言葉をそつくりお返ししたい巡だ。

「だから人間に変わつてもらつたんだよ……。できれば離れてそこいらで寝てよ」

巡はゴロリと寝返りを打つてシンに背中を向けた。

「え？ オレ床で寝なきやいけないの？ ていうか日覚めちゃつたんだけど。こんな寝苦しい日に呑気に寝てられないよ」

さつきまで爆睡していなかつただろうか。

「なあ、アンタ今小学生なんだつけ。六年生だよな。あれか？ 宿題とかやつぱりあるわけ？ そろそろ勉強難しくない？」

「……」

人間にしたらして寝苦しい。これならいつそ猫の方がマシだつたかとげんなりしてしまつ巡だが、生憎と人間から猫にする方法は聞いていない。というか他人には不可能かもしけない。

「あんな、僕は明日学校あるんだから……」

「学校があ。人間てさー、あんなとこ毎日通つて疲れないわけ？

でも時々顔出すと、子供が給食の残りくれたりするんだよな。今の子つて結構いいもの食べるよな。本当は人間の食べ物は猫にとつては良くないものが多いっての、ほとんどのヤツがまだ知らな

いんだよな。まあオレは物の怪だから関係ないんだけど……」

……本当にうるさい。

「ホントに頼むから、お前かぼのところにでも行って……」

「呼んだかのー」

ガチャヤリ。

かぼ登場。巡はベッドの上に撃沈した。

「なんだシン、人間の姿になどなつて、メグと楽しく世間話か。ならかぼも仲間に入れてくれなければ寂しいじゃないか」

「ウ、とふくれるかぼ。しかしその愛らしい？ 姿は、枕に突つ伏す巡には見えていない。」

「いや、仲間はずれになんてしてないよ。メグの学校の話をしててさー」

かなり一方的にだが。

「そりがそりが、かぼは一度だけ、メグの教室に行つたことがあるがな、最近の学校というのはなかなか変わった造りだの」

「え、マジ？ おれ建物の中には入つたことないんだよ。ここによう涼しいのかな？」

問題がずれてきている。というか。

多分、ここで起き上がりつて怒鳴り散らすのは簡単だ。近所迷惑など知ったことか。しかし、それをやつたところで、おそらく状況がこじれる一方であることを、巡もそろそろ学習してきてる。

ここは、黙殺した方が得策ではないだろうか。

しかし、ここで上掛けをかぶる訳にもいかない（暑い）し、どうしたものか。巡はうつぶせたまま思考を走らせた。

そんなことを考えれば考えるだけ睡眠が遠のいて行くだけなのだ

が。

「なあメグ、今日の給食ってなんだ？ 美味いものか？」

ゆさゆさ。

「……」

「猫もいいけど、あれ人間で食べたらどんな味なのかな。やっぱ違

うかな

多分、人間の姿でうちのものを食べるのと大差ないと思つよ。
心の中だけで呟く巡。

「メグ、今度変わつたもの出てきたら、持つて帰つてくれよ
巡は、むくりと起きたした。

「……給食は、食べられる限り残しちゃいけないんだ」
ベッドから降りて、巡は自分の机の引き出しをガタガタとあさり

出す。母が買つておいた猫用のジャーキーが、この中に仕舞つてある。

引き出しをかき回しながら、巡は少々顔をしかめた。

しまつた。引き出しの中がジャーキーくさい。場所を考え直さないと。

そこからジャーキーの袋を取り出ると、巡はクルリと振り返り、
シンにその袋を手渡した。

「お腹すいてたんだな。給食はあんまり持つてこられないけど、
りあえずこれ食べてガマンしてくれないかな。うまいよ」
ニッコリ笑つて渡すと、別に今腹減つてる訳じゃないけど、な
どと言いながらも、シンは素直にそれを受け取つた。

かぼだけが、微妙な顔つきでシンを見る。

「のお、シン。どうせ眠れんのなら、たまにはかぼの部屋に来て話
をせんか。話せることは山ほどあるだ~」

「え？ なんで？ ここでもいいじゃん」

「かぼの部屋の方が面白いだ~」

シンにジャーキーを渡したあと、静かな仕草で再びベッドに横た
わつた巡に視線を流すかぼ。さつきから極端に口数の少ない巡だが。
この状況で笑顔で話す彼の、田は笑つていなかつた。

そろそろかぼも、巡のことを学習しつつある。

マジで爆発、五秒前。

悪気があるわけではない。

しかし、巡に悪いと思つてゐる訳でもない。何しろ悪気はないか
ら。

ただ、悪気は無くても怒られることがある。悪いと思つてゐる訳
ではないのに、そのことでも怒られるのは、逆にシャクでもあつたり
するわけで。

かぼはシンを連れて、こそこかと巡の部屋を出た。

静かになつた部屋で、巡はゴロゴロと寝返りを打つて仰向けになつ
た。そうでなくとも寝苦しいのに、あの騒ぎのあとスラリと眠れる
訳がない。

どうすればいいのか。

人間にしていづるといへらになら、猫のままで寝苦しいのがまだマ
シなのか。

巡は二者択一させられる。

遠慮しないで猫の姿のシンを締め出してしまえば良ことこつこ
に気付かない巡、彼が安眠できる日は遠い。

土曜日の夕方、かぼは、珍しくひとりで近所の公園に遊びに来ていた。

公園と言つてもそこは結構大きな敷地で、遊歩道や池や売店などが完備されている、地域の憩いの場だ。スポーツに趣味にと、この公園を活用する人も多い。

そこをト「ト」歩くかぼを、誰も田に留めない。彼女からアクションをかけなければ、その存在に気付かない人間がほとんどだろう。

菓子や飲み物を置いている売店を横田で見ながら、かぼはその誘惑を断ち切るように足早に歩く。

ふと、売店の近くのベンチに見知った顔を見つけた。

巡のクラスの担任、朝比奈だ。

無言のまま歩み寄り、ベンチで足を組んでぼんやりしている朝比奈の隣にちょこんと腰掛ける。

かぼの存在は、大抵に人間には気付かないが、かぼの座る場所には誰も後から腰掛けようとはしない。そこに誰かがいることを認識している訳ではないのに、実に自然に、人々はその場を避ける。物の怪とは、そういうものだ。

「こんな時間までひとりで出歩いて大丈夫なのか？ 嬢ちゃん」

頭上から降つてきた声に、かぼは隣に座る朝比奈を見る。

「心配は無用だ」

「パツと笑つて見せたら、朝比奈もそつかと頷き、ポケットをあさつた。

「キャラメル、食つか？」

そう言つて出された、前にも一度同じことのある小さな包みに向かつて、かぼは何の抵抗も無く手を差し出す。

「おくれ」

両の手を上に向かつて差し出したかぼに苦笑しながら、朝比奈は指でつまんだキャラメルを、彼女の手にポトリと落とした。早速包みを開いて、キャラメルを口に放り込むかぼ。

「知らない人から物をもらつたりして、怒られないか？」

片眉を吊り上げて笑う朝比奈に、かぼはむぐむぐと答える。

「わちには説教する親はないから大丈夫だ」

それに一応、かぼにとつては知らない人間ではない。

「いや、親じやなくともいるじやん。つるむやうなのがひとつかぼは、うんうんと頷く。

「確かにうるさいの。けど今メグは宿題をやつているでな。邪魔になるから追い出されてる最中なのだ。そうでなくとも一昨日の夜、わちらが騒いだせいで寝不足になつて、えらく不機嫌だから。」これ以上怒らせるのも面倒だから、じうしてブラブラしてゐる訳だが、朝比奈は、含点がいつたように頷いた。

「それで昨日、ダルそうだったのか……」

てつくりこのところの蒸し暑さで眠れていなかと思つていたが、別の理由があるらしいことを悟つて、朝比奈はまた苦笑する。

かぼは、そんな朝比奈を眺めた。その視線に気付いて、朝比奈はかぼの口許を指差す。

「前に作つたのよりも砂糖の量を減らしてみたんだよ。うまいか？」

かぼは、素直にこくりと頷く。

「前のもこれもうまいぞ。ぬし、器用だの」

「それはどうも。ちゃんとわけてもらえたなら良かつたな」

ハハハと笑う朝比奈を、さらに眺める。

「ぬしは、最初からわちのこと見えておつたよな」

真つ直ぐなかぼの視線を受けて、朝比奈はこともなげに頷いた。

「うん。成瀬は気付いてなかつたろうけどな」

かぼが何気なく教室後部の戸を開けて入ってきた時から、朝比奈はかぼの存在に気付いていた。そのかぼが隣まで来た時に、初めて仰天して叫んだ巡に、噴き出しそうになるのをこらえるのが大変だつた。

朝比奈が巡にキャラメルをふたつ渡したのは、最初からかぼにも分けることを想定していたからだ。だからかぼは巡に「かぼに飴をくれた」と言つたのだが、それでも巡は気付かなかつた。もつとも、それだけで気付く訳もないが。

「ぬしは自覚のある逢魔だの」

朝比奈の様子から、物の怪に出会つたのはかぼが最初ではないことを察して、かぼは言つ。朝比奈はまた頷いた。

「逢魔が時だからな。オレはその仕組みも知つてゐる。だから、近いうちにきみと話をしたいとは思つてたんだ」

「そうか？」

かぼに向かつて小首をかしげる朝比奈に、かぼも同じように首をかしげて問いかけた。

「時代が進めば人間も進むんでさ。昔と違つ点も、いくつかある」

朝比奈は、フウ、と軽くため息をつく。

「今このこの時代はさ、逢魔が時に關する研究機関もあるんだ」

「そうなのか！ それは初耳だの」

この世界の何事も理解しているような素振りを見せるかぼだが、実は知らないことも多々ある。

「完全水面下の話で、一般人はまつたく知らないけどさ。これから来る魔の刻への対策として、対魔物用の公的機関を、これから何十年かかけて作り上げようとしているんだよ、人間も」

それは本当に、誰も知らない。

知つているのは、機関に屬しているかその直近の人間のみだ。それらは皆、魔の刻や魔物の存在を、先祖や先達から密かに伝え聞き、あるいはその目で確かめてきた者たち。

普通はそんな漫画のよつたな団体の話など、口で言われても誰も信用すらしないだろう。

「オレは機関の人間じゃないっていうか、その機関すらまだ正式には動いてないんだけど、その機関と色々と関わりもあつたりしてさ。だから言つておくんだけど」

朝比奈は、一呼吸おいてから、再び口を開いた。

「一応、気をつけときなよ。変なのに目を付けられないようにさ。彼らの中には、物の怪に悪印象を抱いている人間もいるから」

朝比奈の言葉に、かぼは軽くため息をつく。

「それは仕方がないの」

研究機関というからには、魔の刻についての情報も持つていると
いうことなのだろう。

すなわち。

今のは魔が時はまだいいが、時が進んで本格的な魔の刻が訪れば、生の刻の住人、つまり人間を中心とする生物に、危害を加える魔物が出現してくるという事実を。

「対抗策を打ち立てているのだな。人間も」

「何か困つたことがあれば、呼んでくれていいいから。多分、キミの知らないことも結構知つてると思うぜ、オレは。人間の側のことならな」

意外なところに、意外な人間もいたものだ。
これも、この地ならではということか。

かぼは思つ。

この街に存在する、生の刻と魔の刻を繋ぐゲートの存在を。
いつか、巡にも知らせなければならぬのだろう。

7月になつても、梅雨が尾を引いてじめじめした日が続いている。からりとした天氣の日は少なく、雨天も多い今日この頃だ。幸いにして雨の降つていない曇天の今日、巡はまたも雑木林を歩く。

うつそうとした木々の間は湿氣も強く感じるが、心なしか快適に感じるのは茂る緑のせいか、流れる小川のせいか。ともかく巡は、雑木林を流れる川の上流を田指す。そこのうにいるであろう、ミーシャに会うためだ。

歩くたびにガサガサと音を立てるのは、スーパーの袋。その中には、プリンがみつ入っている。

「あまり乱暴に歩くな。プリンが崩れるではないか」

文句を言つのは、巡の後を軽やかな足取りでついてくるかぼ。

「ならお前が持てよ」

雑木林の中はそうでなくとも歩きにくいのだ。多少の揺れは仕方がない。どんな場所でもヒョイヒョイと越えられるかぼなのだから、文句を言つながらかぼが持てばいと巡は思つたのだが、彼女は口をへの字につぐんでそっぽを向いた。持つ気なしだ。

川のほとりで寝そべつてこるミーシャはすぐに見つかった。

「よつ。どうした今日は」

人の気配にムクリと起き上がつたミーシャは、巡とかぼの姿を見とめて片手を挙げた。相変わらずの彼はいつでもフレンドリーだ。

「プリン持つてきた」

用件だけを直球で口にする巡。

本当は、プリンがあるからミーシャも連れて来いと母がうるさかつたのだが、ミーシャのような特殊な姿の物の怪を、そんぞう家に呼ぶのはあまり都合がよろしくない。いつ誰にバレてしまうかもしれないのだ。巡という逢魔の力を持つた人間が存在しているのだから、他に力を持つ人間がいないとも限らないし、そうでなくたつて、ミーシャを相手にしている光景を見られただけでも、力のない人間にだつてこの姿は見えてしまう可能性が高い。

いくら魔の刻になりつつある世の中といつても、何も知らない人間にいきなりこれは刺激が強いだろう。

なので、仕方なく巡はかぼも連れて雑木林まで足を運んできたのだ。

三人で、プリンを食べるためだけに。

とりあえず、シンは猫の姿で気持ちよく寝ていたから置いてきたが。プリンのために今起こさなくてもいいだろうし、人間にして一緒に連れてくると、多分相当やかましい。

「……プリン？」

心なしか顔をしかめたように見えたミーシャだが、袋をあさつて元気良くプリンを取り出したかぼから、彼は黙つてそれを受け取る。プラスチックで出来た容器からラップのフタを外して、スプーンですくい上げる。かぼや巡はともかく、ミーシャのそんな姿はやはり異様というか笑いを誘うというか。そもそも雑木林の中でプリンを食す三人組というあたりから、ありえない光景ではあるが。

「ん？ なんだこりや。この前のと違つな」

ひとくち口に入れて、ミーシャは不思議そうな顔をする。

「おいしくない？」

かぼは喜んで食べているが、ミーシャが同じ趣味とは限らない。

巡の質問に、ミーシャはいや、と首をかしげた。

「この前初めて食べたときは、正直甘つとろくてかなわんと思つてたんだが、今日のは全然違うな。やけに美味しいぞ。これが同じものか？」

「それ母さんの手作りなんだよね。」の前のは買つてきたやつ」
「へえ、と感心する仕草を見せるミーシャ。同じプリンとこう話を
持つものが、いつも味も食感も違うものなのかと、そこが不思議で
たまらないらしい。美味いと言つているのだからそれは何よりだが、
正直甘すぎた前回のプリンも黙つて食べていたのだから、ミーシャ、
物の怪のくせに人間が出来ている。

かぼだけが、そんな他人のことなどまるで氣にもせずに、プリン
に夢中だ。ひとつくちふたくちと笑顔で口に運んで、みくち皿をすく
おつとした時。

何かが、かぼのプリンの中に垂直落下してきた。

ベシャッ。

音を立てて、飛び散るプリンと、それを顔面に食らつて「ぶへッ」と奇妙なつめき声を上げるかぼ。

「……か……か、かぼのぷりんが……」

顔中プリンまみれになりながら、しかしかぼはそれだけの話で
はないらしい。

「かぼのぷりんに何かが、かぼの~ッ!~」

そんなに錯乱状態にならなくても。

「ちょっと待て、かぼ。プリンなら僕のをやるから。ていうか、なん
だそれ」

巡はプリンよりも、落としてきた物体の方が気になる。木の実でも落ちてきたのかと思ったが、それにしても白っぽいような、むしろピンク色にえたような。巡はかぼのプリンを凝視した。

足が、見える。

見間違いでなければ、掌の上に乗るくらいの、小さな人間の形を
しているように見えなくもない何かの、下半身が。容器からみ出

た場所で、バタバタともがいていた。

ミーシャが、その足をヒヨイとつまんでプリンの中から引きずり出す。

姿を現したそれは、息も絶え絶えに口をパクパクとさせていた。

「な、なんでこんなところに、かすたゞのうみがあ〜？」

ボロボロと涙をこぼしながら訴えるその物体は、掌大ではあるが、人間の女の子のようにも見える。が、いかんせんプリンでぐちゃぐちゃになっているので、何が何だかわからない。

また、物の怪か……。

逆さ吊り状態でわめく少女を見て、巡はハア、と、深くため息をついた。

川の水に浸かって身体の汚れを落とした彼女は、フウ、と深いため息をついた。

「まさかこんなところにプリンがあるなんて、思わなかつたよおー川べりから水面すれすれまで伸びている草の先を両手で掘んで、タブタブと胸まで水に浸かりながら足をばたつかせる物の怪。こうして掘まつていないと流れてしまうのかもしない。」

「こつちだつて、こんなところでプリンを台無じにされるとほ夢にも思わんかった」

巡の分のプリンを分けてもらつてなお、かぼは不機嫌極まりないといった体で頬を膨らませる。食べ物の恨みは怖いのだ。本来、物の怪は何を食べる必要もないはずではあるのだが。

「ermenねえ。最近ミズ、元気がなくて、新鮮なお水を求めてたら、こんなところに辿り着いちゃつたんだけどお」

掌大の少女、名前はミズといつらしい。

「ぬし、水蓮の精か何かか？」

身にまとうフレアのワンピースのようなピンクの着衣と背中についている羽が、水蓮の花びらに酷似してゐる。もっとも、背中の羽は実際に身体から生えているわけではなさそつだから、ただの飾りなのだろうが。物の怪は物の怪なりの洒落つ氣があるらしい。

「いんやあ、そういうわけじゃないんだけどねえ。水蓮には何かと縁があるんでえ。この花つて可愛いでしょー？」

全身で水蓮をアピールしているのだが、彼女は水蓮の精というわけではないらしい。

「で、なんでこんなところに来たんだ。お前、ビコの子だ？」

ミーシャがミズの身体をつまみあげる。ピタピタと水を跳ねてい

た足が、何度か空を切つた。

「つまらないでえ。だから～、ミズ最近元気なくてね」

「それは聞いた」

回りくどい表現を一蹴するミーシャ。顔が顔だけに迫力があるが、同じ物の怪同士だからどうか、ミズは悪びれない様子でミーシャを見返す。

「ん～、ミズはねえ、いつ見えても水盤の物の怪なのね」

「……すいばん？」

その単語を初めて聞く巡が、眉を寄せた。

「花器の一種だの。少し深い皿のような陶器での、そこに水を張つて、花を活けたりするものだ。なるほど、それで水蓮か」
水盤のような花器には、水蓮を生けることも多い。ミズが水蓮に縁があるというのは、その花器に水蓮が生けられることが多いとうことなのだらう。

「また思いもよらない無機物の物の怪だな。で？」

川から生まれたというミーシャも大差ないような気もしないでもない巡である。川だと水盤だと、もともと動物のような命を持つていいものが、こんな風に人間とも話せる物の怪になるという事実が、今いちピンとこない。

どういった拍子で、彼らが意志を持つようになるのだらう？

「ミズは～、ここから少し離れたところにあるおうちの水盤の物の怪なんだけどね。最近そこのおじいさんがあ、ミズの水盤に、きれいなお水を入れてくれなくなっちゃったのね」

ちょっと今まで、ちゃんと塩素を抜いた美味しい水をいつも張つてくれて、そこに綺麗な花を活けてくれていたのに、最近の水は、美味しくないらしい。ここで言つ「美味しい」という表現は、そのままの意味ではないかもしれないが。

「だからミズ、どんどん元気なくなっちゃつて……」

「それはそうだらうの」

シューんとするミズに、かほはうんうんと頷いてみせる。

「それはそうだった、どうしてだよ」

どうも話の流れが掴めない巡。水盤は、綺麗な水を入れても「られないだけでダメになつてしまふものなのだろうかと思つ。

「それはの、うーん、面倒くさいの。後で説明してやるから待つてろ。で、ミズ。つまりぬしは、そのじいさんが最近手抜きしているおかげで元気がなくなつてしまつて、それで綺麗な水を求めるうちにここに来てしまつた、ということなのだな？」

巡からあつさりとミズに視線を移してしまうかぼ。巡は意味がわからないままだが、今ここでかぼを問い合わせたところで、まともな答えが返つてくるとも思えなくて、だんまりを決め込んだ。

ミズはブンブンと小さな手と頭を振つた。

「違うのよ。おじいさんは悪くないのね。だつて今までずっとミズのこと、ホントに可愛がつてくれたんだもん。だからね、もしかして、最近おじいさんの体調が良くないんじやないかつて思つてねえ。だから、おじいさんも綺麗な水を飲めば、きっと身体も良くなるのよ。それで持つて帰れる綺麗な水を探してたんだあ」

「そのちつさい身体で、どうやって水を持つて帰るつもりなんだ……」

「気持ちの問題だよお

他人の気持ちの問題では、大概身体は治せない。大体、新鮮な水をひとつくちやふたくち飲んだところで、人間はそうそう元気になつたりしないものだが。

そのおじいさんというのが、本当に体調不良なのかどうかも怪しい。今ここで聞いている話は、すべてミズの主觀でしかない。

「ぬしひとりの考え方と行動では、解決にならんのではないかの。ぬし、どこから来たのだ。帰り道はわかるのか？」

微妙に嫌な予感のする巡。

かぼが、何やら首を突つ込もつとしている気配。ドライに思われるかもしれないが、他人の問題にいちいち介入していたらキリがないのだが。

かぼは物の怪だから、時間だけはたっぷりあるのか。

巡は得心する。

「帰り道はわかるよ。もと来た道を帰ればいいんだもんね」

「二二二と返事するミズに、かぼは頷いた。

「二二の水は、人間にはあまり知られてないだろうが、街の河川に合流するまでは、確かに人間でも飲める位綺麗なのだよ。ぬしじや無理だろうから、そのじいさんにはかぼたちが水を運んでやるうだわうええ、と顔色を変える巡。

その行動に、何か意味なんてあるのだろうか。良い水なら、今時コンビニでも買える。それに、本当にそのおじいさんが体調不良なのだとしたら、水を飲む前に病院に行つた方が良いだろうし。綺麗な水で即座に元気が出るなんて、ミズが水盤だから思いつく考え方だ。

「なあメグ。わちらに任せておけば良いよな？」

二ツコロと巡に笑いかけるかぼ。

最近になってわかるようになった、かぼの微妙な表情。これは何かの企みがあるというか、何事が考えを巡らせている時の表情だ。

仕方なく、巡は頷いた。

かぼがここまで乗り気なのなら、意地を張つて放つておくのも後味が悪い。というか、どうせ巻き込まれるのだろうじ。

「そあ？ 良かったあ。おじいさんが元気なくなつちやつたらあ、ミズ悲しくて泣いちゃうもん」

ミズは純粹にそのおじいさんとやらに好意を抱いているらしいが、一体どんな関係なのだろうかと巡は思つ。本当に、可愛がられていたのだろうか？

そしてそれは、物言わぬ水盤として？ それとも、二二の姿が見えていて？

とにもかくにも巡だけが、水を入れる容器を取りに家まで走る」とになってしまった。

かほの方が楽に移動できるのだが、彼女に任せてもべと、どんな騒ぎを起こしてしまったかもわからなかつたし。

どうも、面倒くさい事態になりそうな予感のする巡だった。

綺麗な水を入れてもられないと、どうして元気がなくなるのか。結局かぼは、全て忘れ去ってしまったかのようなノリで、まったく巡にその話を聞かせる気配が見えない。黙つても教えてくれそうなミーシャはついて来なかつたから、知りたければかぼかミズに聞くしかない。

かぼの肩に座つて道案内をするミズを眺めながら、巡はそれをかぼに訊ねてみた。

「ん~」

珍しくかぼが、言葉を選ぶような素振りを見せる。もしかして、聞いてはいけないような類のことなのだろうか。それにしては、あまり深刻な様子でもない。

「メグがこれまで出会つてきた物の怪はな、全部、そのカテゴリー全體の物の怪なんだな」

急に難しい言い回しをするかぼ。

「ミーシャは、川から生まれた物の怪。シンは猫から。それは知つておらう?」

「うん」

「ぶつちやけた話をすれば、彼らはその存在が無くならない限り、消える……いわゆる「死ぬ」ことはない。わかりやすく言えば、ミーシャは『川』から生じた物の怪だから、川そのものが無くならぬ限りは、この世界に存在し続ける物の怪なんだ」

もしもミーシャの傍から川という存在が消えてしまった場合、ミーシャがこの世界に存在し続けるためには、川のある場所に移動しなければならない。逆に、近くに川さえあれば、よほどの不具合が生じない限り、ミーシャはそこで生き続けることになる。

シンもしかりだ。

猫から生まれた存在であるシンは、この世界から猫そのものがいなくなる限り、生き続ける。

彼ら物の怪は、その元となるものの象徴か守り神であるかのように、そのものの傍で存在し続けるのだ。

「だが、ミズは違う

「……？」

「さつしきこやつは、ここから少し離れた場所にある、家の中にある水盤の物の怪だと言つたな。つまりミズは、水盤という存在そのものの物の怪という訳ではなくて、どこぞの家にある、ひとつ水盤から生まれた物の怪ということなのだ」

種類としての『水盤』の物の怪ではなくて。

どこかの家の、たつたひとつ『水盤』の物の怪。

「それって、ぜんぜん違う存在なのよお

「かぼの肩から、ミズの声が跳ね上がった。

「私は」。人間に大事にされなかつたら、生まれなかつた存在なのね

「大事にされなかつたら？」

物の怪たちの言葉は、巡にはいちいち難しい。

「ミズはの、人間の言葉で言うなら、付喪神のようなものだ。付喪神つてのはつまり、道具や器物も永い時間が経つと魂が宿る、と言われている、その精霊のことなんだがの。ミズが生まれたのは、その家にある水盤が、永い時間をかけてとてもとても大切にされたからだ。そうだろう？」

かぼの言葉に、ミズはうんうんと頷く。

「物の怪は、偶発的に生まれるもの多いんだけど。ミズはね、人に、うんと大事にされたから宿つた、ひとつ水盤の魂なのね。だから」

だから、人間に大事にされなくなつたら、ミズの魂は力を失くしてしまつ。

きれいな水を注いでもらえないということを、イコールで「大でなくなつた」「どうでもよくなつた」と解釈するなら。人間の注ぐ情の大きさに比例して、ミズの存在は弱くなつてしまつから困るということらしい。

かぼやミーシャやシンと、ミズとの決定的な違いはそこにある。多くの物の怪は、母体となる物体が魂を持ち、形を成した、独立した存在だ。だからその母体さえあれば、弱点を衝かれるような事故が起こらない限りは、ほとんど消えることはない。

けれどミズのように、人間から注がれた情によつて魂を得た存在は、もちろん母体である物体そのものが壊れたりするのも困りものだが、それとは別に。

人から愛されなくなつたら、その存在は消えてしまう。

「ミズの水盤はね～、もう一百年位前からあのおうちににあるのよ。凄いでしょ。で、ミズは百年位前に生まれたのね。一二百年ずっと大事にされてきたんだから。いまのおじいさんだつて、生まれたときからあの水盤の近くで生きてて、長い間大事にしてくれてたのよ。だもの、そのおじいさんがミズに美味しいお水をくれなくなつたのには～、絶対に何か理由があるはずなのね」

別にどうでもよくなつたとか、面倒くさくなつたという可能性は微塵も考えていいのだろうか、ミズはただ、おじいさんが体調不良を起こしているのではないかと心配をしている。

人に情を注がれることによつて生まれた存在だから、当然かもしれないが。

彼女が、人間を疑うことなど無いのかもしない。

だから、巡も憶測で余計なことは言わんことにした。

それに、本当にそのおじいさんの体調が良くないのかもしないし。だとしたら、ミズではなく人間からの意見として、おじいさんは病院に行った方が良い。巡が肩からぶら下げている水筒の中の水

は、ただ綺麗な水というだけで、万病に効く魔法の薬ではない。そもそも飲んでも平氣ではあるらしいが、この水をそのおじいさんで飲ませるつもりは、巡にはさらさらない。ミズが望むから言つとおりにはしたが、体調を崩している老人にその辺の川の水を飲ませるなど、現実的ではないと思う。

けれど事情を知つてしまえば、それなりに氣にはなるものだ。あまり面倒事には関わりたくない巡でも、そのおじいさんとやらに会つて、事実関係を確認したくなつてしまつた。

結局は、お人よしなのかもしれない。

それとも単に、かぼの勢いにつられてているだけなのか。それはわからないけれど。

「ほら、あそこの家がそつだよお～

「ぬ？」

「あれ？」

道案内をするミズの指示する方角の通りに歩くしかなかつた巡とかぼだが、やけに巡の家の近所に近付いていると思えば。示されたのは、天笠和菓子店だつた。

なんてこつた。

それならそつと、もつと早く言つてくれれば良かつたのに。

ミズがフラフラと飛び回つた軌跡をきつちり逆戻りしてい一行。目的地が天笠和菓子店だつたのなら、雑木林からここまで、最短距離の三倍ほどの距離を歩き回つていたことになる。

巡はがっくりと肩を落とした。

この気持ちは、体力バカの物の怪たちには絶対にわかるまい。

「ただいま～」

それまでかぼの肩にとまっていたミズは、元気に跳ね上がりて天笠和菓子店の正面まで飛んでいつてしまつた。重力に反した飛行能力だが、背中の羽がまったく動いていなことこのりを見ると、やはりそれはただの飾りであるらしい。

かぼが、ぼそりと呟いた。

「ミズのこうおじいさんとやらが、天笠のじいさまだとするなら、やはりもうひとつ可能性の方が高くなつてきたの……」

「もうひとつ可能性？」

かぼの小さな声は、巡にだけ聞こえる。オウム返しで聞き返した

巡に、かぼは苦笑とも取れる微妙な表情をして見せた。

「場合によつては、メグがちょっと嫌な思いをするかもしれん」

「僕が？」

「わちは慣れておるから。構わないが、……」

いちいち歯切れ悪く、しかしあまり歓迎したくないようなことを言つかぼ。しかし「慣れている」というのだから、巡だけではなく、かぼにとつてもあまり良くない状況が待つていて、といふことなのだろう。

嫌な予言をしてくれる。

「まあ、なるよつにしかならんものだ。様子を見てみるかの」

「……」

巡とかぼは、そろつて天笠和菓子店ののれんの前に立つた。

店の前に姿を現した和菓子店の主人は、巡とかぼの姿を見とめて、

いささか目を見開いたようだつた。

「綺麗なお水持つて、ここまでついてきてくれたのよ
クルクルと飛び回りながら歌つように話すミズの姿を追うでもな
く、店の主人は巡とかぼだけを、数秒眺めていた。

「……入りなさい」

それだけ言って、主人は店の奥へ引っ込んでしまつ。
厳格そうに見えるが、商売をやつているだけに、普段はそれなり
に愛想の良い主人だが、今日のこの様子は、歓迎されているのかど
うかも微妙だ。だが入れと言つたのだから、門前払いという訳では
ないし。そもそも門前払いされるいわれもないのだが、先ほどの主
人の表情の硬さが、予想外の来訪者を拒んでいるようにも見えたの
だ。

巡がこの店の奥まで通されるのは、初めてのことだつた。

普段は用事もないのだから当然かもしれないが。

店の主人 天笠莊一郎は、決して人付き合いの嫌いなタイプで
はないが、いかんせん巡は子供だから、個人的に莊一郎と親しくな
る機会など、これまでには無かつた。

「店先であまり大きな声を出すものではない」

莊一郎は、ミズに対してもう一つ言つた。

「はあ～い」

年寄りに説教されてもおののくこともないミズだ。もっとも、莊
一郎が生まれた時からミズは彼を知つてゐるのだから、恐れる必要
などないのかもしれないが。

「少し遊んで来なさい。私はこの子達と話がある

「ええ～、だつて、ミズが連れてきたんだよ」

自分で追い出されることに納得のいかない様子のミズだが、莊
一郎の性格を知つてゐるのか、一度反論しても聞き入れてもらえない
と見るや、仕方ないといった体で部屋から出て行つてしまつた。

「莊一郎、頑固親父の部類なのかもしれない。

静かな和室の中で、かぼが口火を切った。

「姿が、見えておるのだの」

「ああ」

かぼの言葉に、短い言葉だけで頷く莊一郎。

「じゃあ聞くが、あの子は最近、水盤に綺麗な水を入れてもらえないせいで元気が無いとか言つていたが、本当なのかの」

「……」

「物の怪や、付喪神といった存在のことを、ぬしはどれだけ知っているのかの？」

「……」

かぼが何を言つても、莊一郎は黙つたままだ。

「もしもぬしが、己の持ち物である水盤を邪険に扱つてているのだとすれば、その水盤の物の怪であるあの子はいづれ消えてしまうだろう。それを知つていいか？」

直球で物を言い続けるかぼの言葉をずっと黙つて聞いていた莊一郎だが、ややあつて一言だけ、そうなのだろうな、と呴いた。

「わちは別にそれについて説教する気はないがの。人が人に対してそうであるように、物の怪に対しても、個人が個人をどう思おうが勝手だ。たとえそれで己が消えることになろうが、わちらにどうてはそれもまた運命。人間が運に見放されて早死にするのと何ら変わらん。ただミズは、ぬしが水盤を大切にしないのは、主の身体が悪いからなのではないかと心配しておる。実際そうなのだとしたら、そっちの問題もあるでな。せつかくの縁だし、確認のためにもこうして出向いてきた訳だが」

莊一郎は、巡とかぼを交互に見つめた後で、口を開いた。

「その物言いから察するに、お前さんは人間ではないようだな。あの子以外にも、そういう存在があつたのだな」

莊一郎は立ち上がり、一人に背を向けた。

「私があの子の存在を知ったのは、つい最近だ。まだひと月と経つておらん。ただ大切にしてきた水盤に、あんな幽霊のようなものが取り憑いているのだと知つて、平静でいられる人間はそうはおらん。そうだろうが」

「……だから、その元である水盤を放つて、あの子を消滅させようとしているというのか？」

「だとしたらどうだというのだ？」

言い捨てる莊一郎に、かぼも立ち上がつた。

「別に、ならこちらも何も言つことはない。物の怪も人間と同様、結局は己の手の届かぬ部分には常に受身でしかないのだからな。例えそれが己の魂の存続に関わることであつても、ミズだつて納得せざるを得まいよ」

畳の上に座つたまま黙り込んでいた巡の袖を、かぼはくいいくと引いた。

「帰るぞ、メグ。これ以上話すことはない」

淡々と話を進行させるかぼだが、巡は黙つて立ち上がつた。

「期待に添えなくて済まんな」

二人に背中を向けたまま、莊一郎は咳く。さつさと帰れと言わんばかりの態度だ。

立ち上がつた二人は、挨拶もないまま奥の和室から出た。

「どうしたメグ。やけに大人しいの」

かぼと莊一郎のやり取りの間、黙つて聞いていた巡の顔を、かぼは覗き込んだ。何事かの意見でも言いそうなものなのに。

「ん……」

和室から店先に出て、そこでフワフワと飛び回つてゐるミズを見つけた。ただ黙つて飛んでいる分には、誰かに発見されることはまずないだろう。

他に客の姿が見えないことを確認して、巡はミズに対して一言だけ質した。

「ミズ、シュークリームは好き?」

巡たちの姿を見て飛んできたミズは、いきなりの質問にキョトンと田を見開いた。

「うん? 好きだよ。初めて食べたのは最近なんだけども。テレビとかで見て、ずっと憧れてたから。あれ、ホントおいしいよねえ」

ほんわかと顔をほほめさせたミズは、巡はめり、とただ頷いた。

「また来るよ」

多くは語りすこ、巡とかぼは店を後にした。

きっと何事か話し合ったのだろうと単純に考えて、めりしへ、にこやかに手を振つて巡たちを送り出す。

「どうした、メグ」

良くわからない行動を取る巡に、かぼはめりくつ歩きながら、彼の顔を見上げる。

「うそだよ」

一言だけ、呟く巡。

「なんで、うそなんかつくんだ」

足許に視線を落とす巡に、かぼはうんうん、と頷いてみせる。

「さあな……でも、わちらのためかもしけん」

巡が何を言わないでも、かぼはわかっているようだった。

多分また、天笠和菓子店には出向くことになるだろ。

二人きりの和室で、巡と莊一郎は、しばし無言で向き合っていた。

再び天笠和菓子店を訪ねた巡だが、今日はかぼはつれてきていない。というよりは、かぼ自身がついて来ることを辞退した。

「どうせ、黙つて聞いてないことしかできないからの」

といふのは、かぼの談。おそらく、これから巡が莊一郎から聞きだそうとしている話の大筋を、かぼはもう理解しているのだろう。そしてそれがどんな内容であれ、かぼは反抗する気も意見する気もない。ならば、巡が自分で聞いて、自分で判断した方がいいだろうと、そう考えたのかもしれない。

巡の方にも、確信できている」とが少なくともひとつはあった。

「なんで、嘘をついたの？」

巡の言葉に、莊一郎は無言のまま見返していく。

ミズは今、巡の家でかぼたちと遊んでいて、ここにはいないから直球での会話が出来る。正確には、巡が心置きなく話を進められるように、かぼがミズを家に呼び出したのだが。

「天笠さんがミズを良く思つてなくて、それで水盤をいい加減に扱つてミズを消そうとしているなんて、嘘だ」

「……」

だつて、ミズはシュークリームが好きだと言つていた。

天笠和菓子店が、洋菓子であるシュークリームを店頭に置き始めたのはいつだ。巡の考えが間違つていらないなら、それはちょうど、莊一郎がミズと出会つた頃ではないのか。

巡がシュークリームをもらつたとき、莊一郎は言つた。シューク

リームが食べたいと言つてゐる子がいる。それはミズのことだらう。だから、いつでも彼女に食べさせてやれるよつこと、むしろそれが一番の目的ではなかつたのか。

ミズは、シュークリームの存在をテレビで知つたとも言つてゐた。どんな形でかは知らないが、ちゃんとテレビだつて見させていたといつことだ。ミズのことを、その魂ですらどうでもいいと思つぐらにいつとましく思つてゐるなら、そんなことをするだらうか。

「なんだ、そんな嘘をつくのが知りたい」

莊一郎の言を嘘だと決め付けて、巡は話を進めた。

多分、間違つではないだらうと。

「……」

莊一郎は、一瞬だけ目を閉じる。

「あまり深入りをさせて、嫌な感じをさせるのもどうかと思つて、いたのだがな……あれから考えたが、お前さんも物の怪と共にある身、あまり子供扱いして隠すのも良くないのだらうな」

物の怪といつもの性質を知つておくれのも悪くないだらう、と、

莊一郎は前置きした。

「私の水盤の扱いは、以前も今も変わつてはおりと」

「……え？」

「変わつたのは、ミズの方だ」

言ひながら、莊一郎はほんの少しだけ、ため息をついたように見えた。

「どうこう」と?

「水盤に張る水も、活ける花も、これまでとなんら変わつてはおらん。水盤で花を活けるのに最良であるはずの水を、そうでないようつに感じるようになつたのは、ミズの方だ」

莊一郎は、再び目を伏せた。

「寿命なのだよ。ミズのな」

莊一郎の率直な一言に、巡は目を見張つた。

「……寿命？」

「莊一郎が本当のことを言つていないとこはわかつてはいたが、今その言葉は予想外だつた。というか、巡にはその言葉のちゃんとした意味が、上手く頭の中に浸透してこない。」

「莊一郎は、床の間に飾られた水盤を見やつた。」

「我が家に伝わるこの水盤はな、随分長いこと大切に扱われてきたが、これといった名品ではない。銘もない数物のひとつだ。むしろあまり出来のよくないものでな。焼きも上薬も甘いものを、見た目が気に入つたという理由だけでタダ同然で譲り受けたというのが真相だ。これまで良くもつたものだとさえ思える。」

「それは、つまり？」

「限界なのだよ。ミズの本体である水盤は、もう壊れかけておる」
「大切にとは言つが、誤つて畳の上に落としたことだつて、莊一郎が生まれる遙か前からの長い長い時間の中で一度や二度ではない。」
「そういうた衝撃だつて、その場ではなんともなく見えて、疲労がたまつて行く原因になる。」

「焼きも上薬も甘いといつわゆる不良品であるなら、水など注がずに、ただ飾つておいたほうが良かつただろ。けれど天笠家はその水盤に水を張り、花を活け続けた。本来そうであるべきものとして。そういう意味でも、大切に扱つてきたと言えるかもしれない。だが、つまり。」

「本体である水盤が壊れたら、ミズの魂も、保つてはいられまい」

「……」

「人間が年を取つていくのと同じよ。」

「そしていつかはその生涯を終えるのと同じよ。」

「形のある物はいつかは朽ち、その役割を終えるときが来る。」

「知つての通りであろうが、ミズは水盤そのものの物の怪ではなく、うちにある水盤のそれだ。その水盤が壊れれば、ミズはミズとして生きてはいられないということだ。」

「……そんな」

「ミズは、年老いて生涯を閉じようとしている存在なのだと。」

「物には必ず寿命がある。今が、ミズのその時なのだ。だから、どんなに大切に扱つてやるうが、朽ちかけているミズの身体は、それを正常には感じ取れなくなつていいのだよ」

「美味しいと言つていた水を、美味しく感じられなくなつてしまつたのは。」

壊れかけた水盤が、その身に無遠慮に水を注がれているから。ミズの魂そのものが、老いて壊れて消えかけているから。

「それを薄々感じ取つてはいるはずなのだがな。ミズは表面上認めようとはしていない。だから、多くを言えないでいたのだが……」うちの水盤は、もういつ壊れてもおかしくはない状態だ」

「ミズが……」

消えようとしている。

そして彼女は、それを認めようとはしていない。

だから、美味しくなくなつた水を、おじいさんの体調不良のせいにじょりとしている。

語られたことの意味を悟るのに、頭が追いついてこなくて、どう反応していいのかもわからないまま。

巡は、俯いた視界に広がる畠を、ただ意味も無く見つめていた。

莊一郎から聞いた話を、巡はそのままかぼに伝えた。が、やはりかぼは、さして驚いた様子は見せなかつた。

「そんな感じはしていたよ。魂の消えかける物の怪は、案外とわかるものだ。だが……」

「だが？」

思案顔になるかぼに、巡はその表情を覗き込む。

「大抵、物の怪なんてのはその運命を甘受するようにできているといふか、それが常なんだがの。ミズがそれを受け入れようといつないというのが、気になるところではあるな」

莊一郎も、そんなようなことを言つていた。

人間の姿になつているシンが、巡のベッドの上で「口口口」と寝転がる。

「オレらみたいなのは、正直寿命なんて存在しないようなものだけどな。だから、寿命があるヤツの考え方つてのは、根本からは理解できねえけど……」

かぼやシンは、元となるそのものの存在が消えて無くならない限りは、その魂は消えることはない。かぼが何の物の怪であるのかは聞かされていないが、これまでの言から察するならば、シンやミー・シヤと同じ存在なのだろう。だがミズは、莊一郎の持つている水盤の寿命が尽きれば一緒に消えてしまう。

「もともと『生きている』者たちと違つて、わちらには存在するといつ事に關しての執着はあまりない。聞き分けのない人間と違つて、運命を受け入れるのがたやすくできているからな」

「聞き分けのない人間で悪かつたな。

心の中だけで悪態をつく巡だが、ここで毒づいても始まらないの
で黙っている。今話しているのはそんなことではない。

「人間に愛されて生まれた存在だから、ということかもしかんが、
ミズのような物の怪など、他にも星の数ほどいるから。もつとも
わちらも、その全てを掌握している訳ではないから、実際は己の消
滅についてどう思つているかなど、わからんのだが」

存在し続けることへの執着があるうがなかろうが、それは必ず受
け入れなければならない運命。何故ミズは、それを認めようとして
いないのだろう。

「薄々わかっているはずだつて、天笠さんも言つてたけど」

「人間だつてそうだしの。メグにはまだわからんだろうが、事故に
しろ病氣にしろ突然的に死んで行く者以外、大抵は自分の命が終わ
りかけていることくらいはわかるものだ。だがミズは、それを受け
入れようとしていない。理由はあるんだろうが、……」

未練とか、そういうものだろうか。それとも何か別の。

「なんにせよ、それがあるなら聞いてやること位はできなくはない
が、運命は変わらん」

だからな、と、かぼは巡を見た。

「ぬしがどうする。ミズとはあまり関わらない方がいいのではないか？」

巡はえ、と表情を変える。

「なんで」

「別にぬしがそれでいいのなら、わちは構わんがの……ミズと関わ
つていれば、必ず、ミズの死に目に遭うことになるぞ」

「！」

ミズと関わった時に、かぼが言つていたことの意味が、今わかつ
た。

場合によつては、嫌な思いすることになると。

ミズは人間ではないが、人間のように会話のできる存在だ。だか
ら、もう話をして、ひとりの人間のように、その存在を認めてしま

つた。ものの死は全て等しいとはいえ、やはり名も知らぬ存在の死を伝えられるのと、知っている者が死んでいくのは、全然違うものだ。

だが巡は、まだ本当の意味で「死」というものを知らない。

まだ誰のことも、失ったことはないのだ。

「それでもまあ、人間の死と物の怪の死は、まったく違うものだが

の」

ほんの少し、巡に気を遣つてゐるのだろうか、かぼは軽い調子でやんなことを言ひ。

「違うって？」

幾度もの死と向かい合つてきたであろうかぼは、フウ、とため息をつく。

「物の怪は、その魂が消えるときに、器もあとかたも残らない。だが生の刻の生き物は……死体というものが、残る」

そんなことはわかっている。わかつてはいるが、それがどれほど

の差であるのか、巡にはよくわからない。

「身体が残つてゐるからこそ、その喪失感は、恐ろしくでかいぞ。……まあ、こんなことは口で言つてもわかるものではないし、本當は、その時になつて初めてわかるものなんだがの」
これまで動いてしゃべつて息をしていたものが、その機能を一切停止する。

例えば病氣で、もう心臓が動いているだけのような状態になつていたとしても、それはまだ、生きている。

それがすべて止まつたときに。

その身体は、嘘のように、違つものに、なる。

もう一度と動かないし、しゃべらない。まるでこれまでのことが、夢であつたかのように。

流れていった血が止まり、体温が無くなつた身体は、とてもとても冷たい。

何年も動いてきたものなのに、そうなつた瞬間から、腐敗が始ま

る。

生と死の、境界線。

それを知らない巡には、やはり言われても、心から理解することは難しい。

「話が逸れたな。とにかく、そういう『生物』よりは、物の怪の消失はあつという間だということだ。それでもな、そこにいた者が消えてなくなるという事実に変わりはない」

だから、それが嫌なら回避することもできるのだが、と、かぼは言う。

「ミズと関わるのをやめればいいのだと。

「ミズは、もうそんなにすぐに、消えてしまつのか？」

巡の質問に、かぼは頷く。

「水盤次第だから。今日消えてもおかしくはないのだがよ」

水盤が壊れたら、どうしてもダメなのだろうか。

水盤を大事にする気持ちから生まれた物の怪なのに。その大事にしていた人の気持ちが、残つたりはしないのだろうか。

いや、こんな風に往生際が悪いのが、人間なのかもしれないが。かぼがダメだと言つてているのだから、そうなのだろう。

「それでも」

巡は俯きがちになつていた顔を上げた。

「だからって僕は、逃げたりはしないよ。誰も逃げられないのに」

ミズも、莊一郎も。

巡が直接の当事者という訳ではないが、そのことを知つてしまつたからには、まるで無関係という状態には戻れない。ミズの死に目に遭わないようになんて、今さらだ。

「天笠さんだつてきつと、辛くない訳はない。ミズだつて

莊一郎やミズが、今どういう風に考えているのかも、ちゃんとわかるない。けれど、それを知つていてやる存在は、多方がいい

よつな、そんな気がしたのだ。

「もつと、天笠さんにもミズにも話を聞きたい。僕だけ無関係を決め込みたくない」

一大決心をするよつな感じでもなく、淡々と言つ巡。

「そつか」

そんな巡に、かぼはただ頷いた。

巡がそういう氣でいるのなら、かぼはもつ、何をいつつもりもなかつた。

巡は莊一郎と二人で話したときに、初めてミズの元となっている水盤の姿を見た。

それは深い深い藍色で。絵柄は入っていないが、意識して作られた色むらが目を楽しませる、上品な雰囲気を持つ水盤だ。莊一郎は何の銘もない上に不良品のようなものだと黙っていたが、見た目だけなら、大量生産とはいえなるほどひとつひとつ手で作られたであるの特有の趣をかもし出している。

今日もやけには、薄いピンク色の水蓮が活けられていた。

「おじいさんね、お庭の蓮の池から、このお花を持ってきてくれるんだよ。」

その水盤に腰掛けながら、ミズは「うー」と笑っている。

今のミズを水盤からあまり離してしまつのは良くないんじやないかと考へて、ミズと遊ぶという名目で天笠家まで足を運んだ巡だが、一見して今のミズに、弱っているような変化は見えない。

水盤自体も、巡の目から見てどこが良くないのか判断することは出来なかつたが、莊一郎の話によると、もう全体的に弱つていて、目には見えにくい亀裂もあちこちに生じているらしい。片手に持つて振り回してみれば真つ二つに割れてしまつてもおかしくないほどで、おいそれと動かすことも出来ない状態なのだ、と、少し悲しそうに見える表情で言つていた。

それでもこりやつて、ちゃんと水を張つて花を活けている。

「ミズは、どうしていつも、物の怪になつたんだと思つ？」

何とはなしに、巡はミズに訪ねてみた。その言葉に、巡について遊びに来ていたかぼも彼に視線を向ける。

ミズは、いきなりの巡の質問に、うーんと首をかしげて困った顔を作る。

「わかんない。でもお、この水盤を大事にしてくれる人と、お話が出来るかもしない存在になれたのは、嬉しいよお」

物の怪になつたからといって、全ての人間と会話できる訳ではない。ミズはまだ生まれてから百年しか経っていないという話だが、その間に、ミズの存在に気付いたのは、莊二郎が初めてであつたらしい。

なにもこんな今際の際になつてと思わなくもないが、こういう時だからこそ、ミズの存在力が強くなつたのだと考えられなくもない。命の、最後の灯し火のように。

「そうだよな。物の怪と人間は、会話が出来る。……なあ、かぼ」

巡は、今度はかぼの方に話を振つた。

「物の怪はどうして、人間の姿で生まれてくるんだ？」

巡の言葉に、かぼはキヨトンと目を見開く。

数秒そうしたあと、かぼはあからさまに呆れた表情で巡を見た。「別に全ての物の怪が人間の格好をしている訳じやないぞ。人間であるぬしが、人間の形をした物の怪しか認識できていなければ」物の怪の総数で言つたら、人間と話の出来る物の怪のほうが、出来ない物の怪よりも数は少ないらしい。話す機会がないからこそ、人間である巡には認識しにくいだけで、本当はそこかしこに物の怪は存在しているのだ。

「だとしてもだ。じゃあなんで、かぼやミーシャやシンや、ミズみたいな物の怪は、人間みたいな姿で生まれてきたんだ？ 元は人間じゃないだろう？」

かぼは何だかわからないが、ミーシャは川で、シンは猫で、ミズは水盤だ。人間でないものから魂を独立させて生まれてきた彼らが、どうして人間の姿でいるのかが、巡にはわからない。

かぼは、どこか遠くを見つめるような表情で、巡から視線を外した。

「正直、そのところの真実は、わちら物の怪にもわからんよ。だが……」

「だが？」

「人間の姿に転じる物の怪の多くは、人間と関わりの深い環境にいることが多い。だから、人間の姿になつて生まれてくるのかもしかん」

かぼは再び、巡を見た。

「人間と、話がしたいのかもしれんの」

人間の使う言語を用いなければ、人間と交流を図るのは難しい。人間を含む、全ての生物の力が弱まる魔の刻でしか大手を振つて存在できない魔物たち。けれど、それでも、いつの世もその生命力で大股闊歩で生きる人間に。

憧れて、いるのかもしれない。

「「己」らを生物の代表のように勘違いしている種族だがの。それをまる」と否定できない魂の強さを持つてするのが人間だ

憎まれ口も忘れないかぼ。だが、別にそんな人間を責めている様子でもない。

「人間と、何らかの形で関わりたい願望の表れなのかもしれんの」もちろんかぼにも、真実はわからないけれど

「ミズはあ、おじいさんと話がしたかったよお、ずっと。やつとそれが叶つたんだもん、すごく嬉しいさあ～」

これまで生きてきた百年間のうちの、まだほんの一ヶ月ほど。

「ミズの水盤をこの家に置いてくれた人のことは、ミズも憶えてないけどねえ」

物の怪として魂を得る前のことは、ミズもさすがにわからないら

しい。

「だから他の物の怪のことはわからないけど、ミズは絶対、人とお話したくて、お礼言いたくて物の怪になつたんじゃないかなあって、そう思つよ。この水盤で心を癒されてる人たちに、ちゃんとその気持ちを、水盤も受け止めてるよつて、そう教えてあげたくて……」

嬉しそうにそこまで言つて、ミズはふと俯いた。

「でもお……おじいさん、まだミズに美味しい水くれないんだよ。どうしてなのかなあ。ミズのこと、嫌いになつちゃつたのかなあ」それでもそんなはずはないとでも言つたそうに、ミズは言葉にしてしまつた後で、フルフルと首を振つた。

そうではないのだと、巡はミズに言えなかつた。

水が変わつたのではない。ミズが変わつたのだ。
巡があの小川の水を持ち帰つた日だつて、莊一郎はその水を、水盤に張つたらしい。けれどその時ですら、ミズは水が綺麗になつたと喜ぶ気配はなかつたそつだから。

どう言えばいいのかわからない。
自分が言つていいいのかどうかも。

多くを言えず、「おじいさん、どこかからだの具合悪くないんじやない? 大丈夫?」と、莊一郎に対し気を遣う言葉しか掛けられないミズと、それをわかつていても沈黙を貫く莊一郎。
彼はこれから、どうするつもりでいるのだろう。

ミズが、急に弱くなつた。

この一田一田で、ミズの姿を見なくなつたと思つていいたら、ミズは水盤の前でじっとしたきり、ほとんど動かなくなつていた。

今にも死にそうといつ訳ではないが、水盤の縁に腰掛けたまま、ただぼんやりと一田を過ぐしているらしい。その表情も、明らかに精彩を欠いている。

天笠家に様子を見に来た巡は、それを田の辺たりにして緊張を覚えた。

隣に立つかほは、表情ひとつ変えていないように見える。どんなことを考えているのかも、巡には読み取ることはできない。

巡とかほの姿を見て、ミズはその来訪を喜んだが、すぐことでも悲しそうな表情を見せて俯く。

「もうずっと、ミズ美味しいお水入れてもらつてないよ。どんどん元気じゃなくなつていくんだよ。どうしてなのかなあ？」

莊一郎の体調を気にしていたミズだが、ここへ来てそんな余裕も無くなつて来ているらしい。それに、体調が悪いはずの莊一郎は、いたつて普段通りの毎日を送つている。

「なんでかなあ？ おじいさん、そんなにミズのこと嫌いなのかな。嫌われて、放つておかれて消えちゃうなんてことないよね？ おじいさん、どうしてる？ 元気なのかな？」

もう、自ら確認に動くのも億劫なのだろう。莊一郎のことを気に掛けているといつよりは、自分のことには死になつているようにも見える、今のミズだ。

巡は、どうすればいいのかわからない。

「のままではミズは本当に、自分は嫌われていると誤解したままこの世から消えてしまつことになるのではないか。そんな風に思った。

本当のことを、言つてやるべきなのではないかと。

けれど、それを知らせてどうなる？

キミは莊一郎のせいではなく、自分の寿命が近きて消えていくのだと。

ミズにしてみれば、同じことではないか。

それにこれはおそらく莊一郎とミズの問題であつて、巡が口出すことでは無いように思える。けれど、このままミズを黙つて見ていることしか出来ないなんて。ミズがいなくなつてしまつかもしれないという事実も悲しいが、それをこつやつて傍観するしかないことも、悲しい。かほの言つ『嫌な思い』が、こんなところにも形を成してゐる。

スルリと音を立てて、巡の背後の襖が開いた。

そこに、莊一郎が立つてゐる。

「天笠さん……」

「おじいさん……」

莊一郎の顔を見ると同時にその名を呟いた巡の声に被るよつて、ミズの呼びかけが部屋に響いた。

「おじいさん、そこにあるのは新鮮な、綺麗なお水？　ミズに持つてきてくれたの？　もうおじいさんは元気になつた？　ミズのこと嫌いで、いじわるになつたんじゃないよねえ？」

矢継ぎ早に問いかけるミズ。

いじわるなどと言わなければならぬことを莊一郎がしていた訳ではないが、そう言われても莊一郎はもちろん怒り出すこともなく、その手に持つ水筒を水の目前に掲げて見せた。

「これは、今日その坊主と嬢ちゃんがミズのためにと持つてきて

くれた、小川の清流の水だ。この前、お前が私に持つてきただものと同じな」

正確に言えば、あの時運んできたのは巡だが。

「今朝、水盤に入れてやつたのはこの水だ。どうだ?」

そう言われて、ミズはわからなそうな顔で首を傾げる。

「……?」

言われて、意味がわからない。

今朝の水? それは違うはず。美味しくなかつた。はず。だつてミズは、こんなに元気をなくしているのに。

ミズが元気をなくしているのは、莊一郎がミズのために綺麗な水を用意してくれなくなつたからであつて。すなわちそれは、ミズの水盤が大事にされなくなつたからであつて。そうでなければいけないはずだ。

他に、ミズが元気をなくす原因の心当たりが、あつてはいけない。本当は、水が綺麗かどうかが最終的な問題ではない。この家の水盤が、魂というものを形作るほどに大切にされているかどうかが問題なのだ。

愛で生まれた魔物は、愛が無ければ存在し続けられない。

だから逆に、大切にされていれば、ミズはずつとここにいるれるはずなのに。

ちゃんと綺麗な水を『えられてもミズが元気にならないのは。本当は水盤なんてもうどうでもいいのに、仕方なくやつたことだから?

そんな風に、思いたくない。

けれど、そんな風に思いたくないけれど、じゃあそうでなかつたとしたら、どうしてミズは、どんどん弱くなつてきているのか。愛されていても、こんなに弱くなつてしているのだとしたら。

ミズがたどり着く結論は、ひとつしかありえない。

「ミズ……認めなさい」

莊一郎の一言に、ミズは両手を大きく見開いた。

「出ていた方がいいかの？」

かぼが小さく呟く。

だが、莊一郎は緩やかに首を振った。

「お前さんがたが嫌なのでなければ、構わん」

小さな声で言つ莊一郎は、ミズに本当のこと話をすつむりでいる
らしかつた。

多分、お前さんも憶えているだらうな。

「莊一郎は、ミズに向かつてそんな風に話しだした。
「水盤のあるこの部屋では騒ぐことが出来ずに、私はいつも不満に思つていた」

「莊一郎がまだ幼かつた頃の話だらうか。

ミズの水盤のあるこの部屋は、中庭に続いている和室で、水盤のほかにも年季の入つていそうな掛け軸やら用途の良くわからない調度品やらが置いてあつて、確かに子供が遊ぶには向かない場所のようにも思える。

「私は兄と違つて乱暴者だつたし、暴れたい盛りだつたからな。兄が入つても怒られないこの部屋に、自分が入るのを許されないことに腹を立てていたな」

意外な過去だ。

物腰静かな莊一郎にも、子供時代はあつたという訳だ。

元氣のないミズも、それにはうんうんと頷いた。

「あの時は驚いたんだよ。ミズ、こわされちゃうかと思つたんだもん」

にやは、と笑うミズ。けれど当時、笑い事では済まされない事態が起つていた。

「兄ばかりが可愛がられてゐるといつこんでいた私は、役にも立たない古いものがこの部屋にあるのが悪いのだと、この部屋にある装飾品を次々と壊してしまつたな」

「うわ……」

つこつこ声を上げてしまつ巡。

莊一郎、かなりの悪たれ坊主だつたらしい。

床の間に掛けあつた掛け軸を外して放り、壺は中庭に投げて壊した。使いもしない日本刀は池に投げ込み、薬箱や茶器も散らかしまくつて、そのいくつかは使い物にならなくなつた。そのどれも、法外に値段の張るものではなかつたが、どれも年季の入つたそれなりに高価なものであることは間違ひなかつた。

「そして水盤に手を掛けたときに父親に見つかつて、大目玉を食らつたな」

ミズが命拾いした瞬間だ。

閻魔か鬼神かのように怒つた父親は、散らかり放題のその部屋に、莊一郎を丸一日閉じ込めた。つまりこの部屋だ。

この部屋には鍵はついていない。襖を開ければ隣の部屋だし、脱出する気になれば、中庭にも出られた。けれど、当時の莊一郎にそれはできなかつた。それほどまでに、父の存在は脅威だつたのだ。この部屋を抜け出そつものなら、今度はどんな厳罰が待つてゐるとか。当時の家庭の多くがそうであつたように、天笠家の大黒柱も例にもれず厳格で、逆らえる人間など家族の中には誰ひとりいなかつた。

そんな風に、どれほどの処遇が待つてゐるかも最初から想像できたのに、莊一郎は衝動を抑えることが出来なかつた。結果、予想通りに父を怒らせた。

「この世に存在する全てのものは、いつかは壊れて無くなる。いつかは消えてゆかねばならぬ物を、お前が途中で壊すとは何事かと、相当絞られたな」

そして、時代を越えて残せるものを大切にする精神。それがいかに尊いものであるか。そんな説教も時間をかけてされた。やんちゃ盛りの当時の莊一郎には、到底心から納得できるものではなかつた

が。

そうして薄暗い部屋にただ押し込められて。

莊一郎はその間、唯一壊れていらないミズの水盤と向き合っていた。

莊一郎が壊し、散らかした部屋の中で、唯一無事であった水盤。

そこには、いつも通り淡い色の水蓮の花が、活けられていた。

水に浮かび、けれど揺れることも無く、ただ静かに。

はかない時間を咲き誇る花と、それを抱える、藍色の水盤。

長いことただそれを眺めなければならなかつた莊一郎は、物言わぬそれに、確かに慰められたのだ。その、静かな美しさ。

「ミズはそのときすつと、いこいこしておじこさんの頭なでてたんだよお」

「ハハハと笑うミズ。

もちろん当時の莊一郎には、ミズのそんな姿は見えていない。

けれど、人や動物のようには動かない彼らが与えてくれる潤いのよなものに、初めて気付いたのだ。彼らのそんな恩恵はあまりにも密やかすぎて、じつと静かに感じよつしなければ、気付けるはずもなかつた。

それがとても大切なことであるのだと、莊一郎はその時初めて感じた。

「それからだよねえ。おじいさんが、自分でミズに花を活けてくれるようになったのは、

ミズは嬉しそうに言つ。

莊一郎はまだ子供だから、時には手折ってきた桜の枝を不恰好に無理やり飾るなどという無茶をしたこともあつたが。そのときは、父には叱られなかつた。いや、桜を折つて持つてきたことだけ注意されたような気もするが。

「それ以来、水盤は私にとつてとても身近なものになつていたし、きつとミズにとつても、私が一番身近な人間であつたうと、自負

はしているよ」

「うん、とミズは頷く。

「みんなミズの水盤を大事に大事にしてくれたけど、水盤を嫌つておじいさんが一所懸命お世話してくれるのが、本当に嬉しかったんだ。だからこの人だけにでも、ミズの姿が見えるようになればいいのになつて、ずっとずっとと思ってたんだよ」

お願い叶つて、しかもミズの存在を受け入れてくれて、と一つも嬉しかつた。

そう言つて、ミズはくふふ、と笑つた。

「私はつい最近までミズの存在に気付かなかつたが、随分長い時間を共に過ごしてきた。だから、ミズ、その私が言つことを、しっかりと聞きなさい」

「なあに？」

莊一郎の言葉に、巡だけがそつと頭を伏せた。

来る。

ミズがすべてを知るであろう、その瞬間が。

ミズは、無表情だった。

もう、寿命なのだと教えられても。

それが逃げられない運命であると聞かされても。

思つてもみないことを言われて、思考がついて来ないのか。それとも薄々感じていたことを認めるのに時間がかかっているのか。ミズの心の中を、巡が読み透かすことはできなかつたけれど。

「最近この部屋からあまり水盤を移動しなくなつたのは、もういつ壊れてもおかしくなかつたからだ」

莊一郎は、水盤と、そこに座るミズを見つめたまま、ゆっくりと話す。

それまで莊一郎は、水盤を陽のあたる場所に出したり店先に移動してみたりと、色々なことをやつていたらしい。

けれど、ここ最近それが出来なくなつていた。

流れるといふほどではないが、微かな水漏れも発生していくような状態だつたのだ。持ち運ぶ際に、突然壊れてもおかしくない。

「物には絶対に寿命がある。無機物でも有機物でも。魂にだつて、終わりは必ず来るものだ」

魂の大きな流れについては、莊一郎の知るところではない。人はしろ物の怪にしろ、心とか魂とかいう物が、形を失つた後にどこへ行くのか。どのような形になるのか。あるいは完全に消滅するのか。それは、誰にも、わからない。

けれど、個々としての魂、たとえば今そこにある『ミズ』という魂が、終わりを迎えるようとしているのは紛れもない事実だ。

いすれは莊一郎や巡だつて。

そして、ずっと遠い未来に、かほやミーシャやシンだつて。
いつかは。必ず。

「だから、ミズ……」

それでも、言いよどむ莊一郎。

こんな告知など、したいはずはない。けれど、それをしなければ、
ミズは大きな誤解を残したまま、この世から消えることになる。

莊一郎の言葉を遮るよつて、ミズはフワリと飛んだ。

「ミズ？」

呼びかけにも応えず、ゆるりと莊一郎の目前を横切り、開いた
ままの襖に向ひつゝと向かつ。

「ミズ！」

どこへ行こうとしているのか。

そのままどこかへ消えやしないかと、一瞬戦慄した莊一郎が立ち
上がりかけた。

「今の状態で、水盤から離れて遠くへは行けないと思うがの……」
ボソリと呟くかぼを、立ち上がりかけた莊一郎と巡が見つめる。
「弱くなつた魂は、拠り所を離れては存在できんよ。別に弱つても
いい、わちらですら長いこと遠ざかつてはいられるのだからの」
例えばミーシャが川から離れてはいられないよう。

弱つたミズは、なおさら水盤からは離れられない。

「でも……」

あまりに無表情だったミズの様子が気になつた巡が口を開きかけ
た時、ミズが先程と同じ調子でゆるゆると戻ってきた。

腕に、何かを抱えている。

どこにでもあるような、木工用ボンドだった。

「ミズ！？」

片腕一杯にそれを抱え込んで、グルグルとそのボンドのフタを回

すミズ。外したフタを投げ捨てて、ボンドの口を水盤へと向けたミズの目前に、莊一郎は瞬間の判断で腕を差し出した。

水盤との間に入り込んだ莊一郎の和服の袖に、全身のあらん限りの力を振り絞つて圧迫された容器から飛び出した白いボンドが大量にかかる。

「何をする！」

莊一郎の声に、ミズはパツチリと見開いた目を彼のほうへと向けた。

「何つて、ボンドで水盤をくつつけるんだよ。壊れかけてるなら、ボンドで直せば大丈夫じゃない。水漏れしそうな部分、ミズが一番知ってるし！」

さも当然のように言いつづから、莊一郎はボンドの容器を取り上げようと手を伸ばした。

「やめなさい！」

厳しい顔を見せる莊一郎に、ミズは眉を寄せた。

「なんでえ？ どうしてジャマするの？」

莊一郎の手から、ボンドを守るように抱え込むミズだが、掌サイズのミズと莊一郎では、力に差がありすぎる。それでもミズは弱っているのだ。ミズはすぐに莊一郎の手で捕まえられてしまつた。

「そんなことをして何になる！」

莊一郎にボンドを取り上げられて、怒氣を帯びた声で責められるような形になつて、ミズの表情に初めて感情が浮かんだ。

「なんでお！？ 水盤が壊れたら、ミズが死んじゅうんだよ！？ 消えちやうよ？ おじいさんはその方がいいのよ！？」

「だが、だめだ！」

多分、ミズは氣付いていた。

水盤自体が寿命を迎えていることを知つていて、それでも認めたくなかったのだろう。だから無理やり理由付けをして言い逃れをしていたのに、止めを刺すように真実を突きつけたのは、莊一郎だ。

ミズは激しく首を振る。

「物の怪は凄く長生きなんだから！ 人間よりずっとずっと！ だから、ミズは人間がミズより先にいなくなっちゃうのだって、ずっと見守ってきたよ。悲しくたって寂しくたって、それが運命だって思つて、思つよにして、せめて静かに見守るのが一番いいんだって」

まくし立てるミズは、そこで大きく息を吸い込んだ。

「長生きなのに！ なのになんで、よりによつて、やつとミズのこと見えるようになったおじいさんより先に、ミズが消えなくちゃならないの…？」

「ミズ……」

「ミズがいなくなつたら、おじいさんひとりぼっちじゃない！！ ミズはひとりだつて平氣だよ、慣れてるもん。そうやつて生きていくのが物の怪だもん。でもおじいさんは違うじゃない。おじいさんをひとり残して、ミズだけが消えちゃう訳にいかないでしょお！？」 人は、いつか死ぬ。

ミズが生まれてからまだ百年ほどしか経つていないが、その間だけでも、ミズは自分が知る人間を幾人か見送つてきた。ただひとり、ミズの存在を見つけてくれた莊一郎だつて、いつかは。

それをわかつていて、ミズはずつと見送る覚悟をしてきたというのに。

自分が先に行かなければならないなんて。

この家でひとりで暮らす、莊一郎を残して。

その事実を否定するよつて、ミズはただ首を振つて硬く目を閉じる。

「長ければいいというものではないわ……」
かぼが、俯いたまま小さな声で呟いた。

かぼは、あつとい間の仕草でミズの身体を掴むと、自分の洋服の飾り紐をするすると外し、それでミズの胴体をきつく縛り上げた。

「痛い、いたーい！－！」

「ぬしが妙な真似をするからだ」

背中で固く結ばれた紐を、ミズは自分で解くことはできない。その端をしつかりと握ったまま、かぼはこともなげに座りなおすた。

「しばらく大人しくして頭を冷やせ」

「ちょっと、かぼ……」

巡が咳きかけても、かぼはその紐を解く様子はない。縛り上げるなんて、ちょっとやりすぎなんじやないかと巡は思ったのだが。

巡は、頑として聞く耳を持たないかぼではなく、莊一郎の方へと向き直った。

「天笠さん……その、その水盤は、修復、みたいなことは、できな
いの？」

恐る恐る、といった体で、巡は莊一郎に問いかける。

ミズの出してきたボンドで思い出したのだが、骨董品の修復、なんて言葉を巡はテレビで何度か聞いたことがあった。

けれど莊一郎は無表情のまま。

「できなくはないだろうな

「……それなら……」

莊一郎は、そんな巡の言葉に首を振る。

「お前さんの言うこともわからんでもない。だがな、それをやつたとして、いつかもたなくなるのは逆らえない運命だ。確かに私が生きている間くらいは過ごせるかもしれない。だが、傷つき壊れかけた身体を無理やりつぎはぎだらけにして生きて行きたいと、お前さ

んなら思つかね?」

「……」

巡は、正直言葉を返すことことができなかつた。

それでも、少しでも長く生きられるなら、その方がいいんじゃないかと。そんな風にさえ思えるのだけれど。

「お前さんはまだ若い。それでも長く保てる方がいいと、そういう風に思うかもしけんな。若者が生に執着するのは当然だし、むしろそれでいい。だが老いというものはな。自分の持つ機能が、正常に働かなくなるということなのだよ。弱つて折れた足や腕を無理やり縫い付けて、長く息をし続けなければならぬといつのは、決して幸せなことではない。……歳を取るとな、そういうことも、わかつてぐるようになる」

言つてこゐることの意味はわからぬはないけれど。

でも。だけど。

ミズは、ただ。

「ミズは……天笠さんを残して行きたくないと、そう願つてゐるだけなんでしょう?」

それだけが彼女の唯一の願いなのだとしたら、それに伴つ苦しみなんて、承知の上なのではないかと。難しいことはわからぬけれど、その願いくらい、叶えてあげたつていいんじゃないかと、巡は考えた。

「そうだよ。ミズは、ミズはただあ……」

「わがまま娘は黙つておれ」

乗り出して巡の言葉に勢いをつけようとするミズの行動を、かぼは普段の己の行動を省みない一言で一蹴した。

「メグ。こやつのは、ただのわがままだ。ぬしが真面目に取り合つてやる必要はない」

「……かぼ」

あまりに冷たい、かぼの態度。

物の怪は全体的にドライかもしけないが、ここまでだつたるうか。

「天笠の爺をひとりで残したくないなどと書いてはいるがな。そんなことは余計な世話というものだ。こやつは爺のために言っているのではない。自分のためだ。全てな」

「そんなんあ！」

かぼの言葉には、当然の」とくに反発するミズ。

自分はただ莊一郎に寂しい思いをさせたくない、それだけを考えていたのに。

「爺がひとりだなどと決めているのは、ぬしの勝手だ。ぬしは、ひとりきりになる爺のために言つてはいるのではない。己が『ひとりきりの爺』に必要とされている存在だと、思いたいだけではないか」

「……！」

違う、と、ミズは力なくその首を振る。

「違うよ、そうじやない。ミズは本当に……」

「本当に爺のことを考えていると言うのなら、自分がいなくなつた後のぬしのことを考えている爺の気持ちが何故わからぬ。存在の理を捻じ曲げることで、ぬし自身にまで歪みを与えてしまうことを良しとしない爺の意志を、何故汲めない！　ぬしはただ、行くな傍にいてくれと言つて欲しい、必要とされていたいだけだ」

ひとりの寂しさを味わせたくないということは。

それを真剣に考えているということは。

ミズ自身が、そんな寂しさを過去に何度も味わつて、辛い思いをしてきたといふことだ。

その寂しさを知らないのなら、莊一郎にそんな思いをさせたくないなどとは思わないはずで。慣れていようがいまいが、そこに逃げられない辛さがあるのは事実。

莊一郎だって、人工的に永らえさせ今まで、ミズにそんな思いをさせたいわけがない。

「人間のように、未練がましいことを言つな、ミズ」

巡には、かぼや莊一郎の理屈は素直に納得することができない。

けれど、一番身近な年長者である母のことを考えた。

これまで意識したこととは無かつたけれど、順当に行けば、親子ほどの差がある母のほうが、巡よりも先に死ぬことになる。巡のほうが先に逝くという事態は、親不孝といつものだ。

もしもその時が来たら。

死の縁に立つ母がもし、生きることを望んだとしたら。

死への行進を続ける身体を引きずつて、「お前を残して行くのが心配だから、この身体をとりあげて長く保つてくれ」と懇願されたとしたら。

自分はどう思うのだろう。

それは苦しみの時間の延長。

そうまでして母を長生きさせることを、自分は望むのか、望まないのか。

今の自分なら、きっと母の壇上と自分でも望み、彼女を永らえさせようとするだらう。けれど、長く生きていると考え方が多様化するところ理屈もわからなくなはない。納得できなかうが、それは事実なのだと当事者が言うのだから。

ミズの願いと莊一郎の願いは同じであつたとしても、選んだ道は、相容れない。

とてもとも、難しい問題だ。

そして難しいからこそ、莊一郎は、殉ずることを選んだのかもしれない。

ミズにわざわざ厳しい物語こをするかぼも、きっとそんな莊一郎の意思を汲んだ。

やつこつことなんだらうな。

巡は自分なりに、そんなことを考えていた。

「運命は変えられんよ」

かぼは咳く。

「時の流れは、物体を消耗させる。物体が消耗すれば、魂だつて消耗する。それがどういうことなのか、わからなくはないだろ？」
かぼの言葉に、ミズは黙つたままだ。

巡には、かぼの言ひことはやっぱり理解しがたかつたけれど。
「抵抗などできないのだ。ミズは皆を置いて旅立つのではなく、そ
こに残されるのだからな」

魂が消えるということは、魂を持つものを置いていくことと同義
ではない。むしろ、置いていかれるのはミズの方だ。

例えば天国のような場所へと駆け上つて行くのではなく。
歩くことをやめて立ち止まつたミズの魂は、時間の流れから置い
て行かれる。それが、魂の死といつものだ。本当のところはともか
く、かぼはそういう風に、魂の消失といつものを位置づけていた。
「いつかは皆、そつやつて足を止める。そして自分の傍を通り抜け
ていく『時間』といつものを、操ることなど出来ない。他の皆の『
生きている時間』はな」

だから。

だからミズは、怖かつたのかもしれない。

死ぬ、ということは。

魂が身体を抜けて飛翔するのではなく。

疲れきつた魂が、時間から取り残されるということ。

多分きっと、やつこつ」と。

「私も、そういうこと生き続けるわけではないよ」

静かな口調で、莊一郎が言った。

「どうせあと十年か一十年か。すぐに私も、この世からいなくなる。悠久の時間の中では、瞬きほどにも満たない一瞬だ」

莊一郎が、ほんの少し、笑った。巡たちには初めて見せる表情かもしれない。

「そして私が立ち止まる場所は、きっとミズのいる場所だろう。そこは、時間から取り残されている場所なのだからな」

その言葉は、ただの慰めでしかない。本当のところは、誰にだってわからないのだ。けれど莊一郎は、根拠のない慰めをミズに向付けた。

「だからミズは、安心してそこで待っていれば良い。ほんの僅かな時間だ」

この世での、時間稼ぎがバカバカしく思えるくらい。

「おじいさんは、悲しくないの？」

ミズは、莊一郎を見上げた。

しかし莊一郎は、首を振る。

「悲しいことなどあるものか。私は何も失いはない」

朝が来て夜となるように。生の刻と魔の刻も、どちらもきちんと訪れる。

表裏一体であるこれらのように。

すべてのものは、もとをただせばきっとひとつだ。そして莊一郎の中から、ミズの存在が消えることはない。

「天笠さんは、ひとりじゃないよ。少なくとも、僕やかぼにはもう出会つてゐる。この街には、天笠さんのお菓子を楽しみにしている人も沢山いる」

巡がよつやく、自分なりの結論を口にした。

「そしてミズも、ひとりじゃない。君がどこで立ち止まつても、そ

こにはみんないる」

これまで見送つてきた、沢山の人たちが。だから、悲しむ必要なんて、どこにもない。

それが真実であるかどうかはわからない。けれど、それはどうでもよかつた。

避けられない運命を目前にする相手に、差し出さずにはいられない優しさがあるだけだ。見つからない真実を詐索するくらいなら、例えば優しい嘘がいい。

かぼが、その後を引き継いだ。

「ミズ、ぬしは運命に對して絶対的に無力だ。だがそれは、全てのものがそうだ」

だから、折り合いを付けていかなければ。生きているものも、そうでないものも。

「ミズと出合えたことは、私にとって幸運だったのだ。だから、お前に關する」とで悲しいことなど、何もない」

莊一郎が、ミズを縛っていた紐を解いた。もうミズは、その場から動いたりはしない。

愛するところの心を、そのままその姿へと変えて返してくれるそんな存在に。

出合えたことが、幸運だ。

「ミズと出合えて、幸せ?」

「幸せだ。ミズもそうだろう?」

「ミズはおじいさんに出合えて……」

幸せ。

「うわあああああああん」
ミズは声を上げて、泣き出した。
迫り来る瞬間を、その小さな身体全部で受け止めようとするかの
よう。

別れるくらいなら、出会わないほうが良かった?
死ぬことがつらいなら、生まれてこないほうが、良かった?
でも、ミズは幸せだつたよ。

せつかくお話できるようになつたおじいさんとお別れするのが悲しくて悲しくて、ミズはそれを認めようとしなかつたよね。
だけど、それを悲しんでちゃいけなかつたんだ。
だつて、最後におじいさんと一緒に暮らしたことが、ミズにとっては幸せ。

存在を知らない今まで消えていったとしたら、今ほど悲しくはなかつたかもしれないけど、今ほどの幸せも知らないままだつた。
幸せの裏には、悲しみがある。

悲しみの裏には、幸せがある。

大きければ、片方も大きく。小さければ、片方も小さく。
振り子みたいなものだね。

明かりを落とした真夜中の和室の中。

水盤の傍で眠る莊一郎の掛け布団に身体を預けて、ミズはずつと囁くような声で話して続いた。

「ミズは幸せ。だつてミズがこうしているのは、ミズの水盤が、人にとってもとても愛されてるってことの証明だもんね」

愛が、自分を生み出した。

自分はなんと幸福な存在であることか。

愛されたまま消え行くことの出来る自分が、この上なく、幸せだ。

「おじこさんまだ小さかった頃、みんなに莊ちやんって呼ばれてたよね。ミズも、そう呼んでれば良かったなあ」

呼んでも気付くことなく、振り返らない人間に對して、ミズは一度も名前で呼びかけたことはなかった。呼びかけたって意味がないような気がして、いたから。

「沢山名前を呼んでいたら、もつと早く気付いてもらえたのかもね」

もう、確認する術はないけれど。

「莊ちやん……」やは、なんか照れるなあ。やつぱおじこさん、でいいや

「ポリポリと、ミズは頭をかく。

「メグちやんも、かぼちやんも優しい子だよね」

かぼこにほじこたま怒られたけれど。

莊一郎や巡を傷つけないための、精一杯の優しさだったのだろう。ミズがわがままを言わずに、全て納得して運命を受け入れられるよう。誰かが、言わなければならぬことだ。

それをかぼは、自分が受けたのだ。

「ミズのために作ってくれたシュークリーム、凄くおいしかった、あの子達にもわけてあげてね。あ、でもそしたら、お金儲けられなくなつちやうかあ。うーん……でもでも、メグちやんやかぼちゃん」と、ずっと仲良くして、いてね。そしたらおじこさんだつて、寂しいことなんてないもんね。それに

「やうしたらあつと、ずっとミズのことも忘れないでいてくれるだ

ろひじ。

「忘れないでね。ミズのこと……なんて、言わなくてもきっと、おじこさんせミズのこと忘れたりしないと思ひけどね~」

ミズは、掛け布団の上から莊一郎の身体を抱きしめた。傍から見えたとすればそれは、莊一郎の身体の上に張り付いてくるようであ

つたるうけれど。

「あつたかい……眠いなあ。とつても眠い。今日はまじて寝ていいよねー……？」

大好きな莊一郎の上で、あたたかな、やすらかな。なんて幸せなまどろみ。

「恥ずかしいけど、明日おじいさんが起きたら、うふふ、言ってみようかな。言ひちゃおうかな。ミズは、おじいさんの」と

「トン。

静かな音を立てて、床の間に置かれた水盤が、綺麗にふたつに割れた。

長い年月を経て刻み込まれていた亀裂が、己の重みに耐えられなくなつて、無理に繋がつていることを、今、やめたのだ。

器を失つて、そこにたたえられていた水が床の間に広がり、音もなく畳の上に流れ落ちた。

活けられていた水蓮の花だけが、割れた水盤の上に静かに佇んでいる。

莊一郎の身体の上から、ミズの姿はあとかたもなく消えていた。これまでのことが、まるで夢であるかのように。

莊一郎は、そつと閉じていた目を開けた。

暗闇の中、水に濡れた床の間に上で、ふたつに割れたまま役目を

終えた水盤を静かに見つめる。

悲しいことなど、何もない。

そう、すぐに、自分も行くのだから。

それまではそう、老いぼれは老いぼれなりに、この世界で満足いくまで生き抜かねば。悔いのない人生を歩んでいかなければ、ミズに合わせる顔がない。

きっと幼いあの少年は、泣いてしまつかもしれないし。

そうしたら、泣くなと肩を叩いてやらねばならないだろう。もしも泣かずに耐えることが出来たら、強い子だと褒めてあげよう。

あの物の怪の少女には あつがとうと。

明日はこんなにも、忙しく一日になる。
大丈夫だ。悲しんでこる暇もなさそうだ。
ミズの言葉だって、ちゃんと聞くことが出来た。
「お前の言葉、しかと、最後まで……」

莊一郎は、再びそつと皿を開じた。

『明日おじいさんのが起きたら皿つかおつかな。ミズは、おじこわんの』
『ミズは、おじこわんの』

おじこわんの』
だーいすか。

「かぼは、天笠さんの新しい水盤見た？」

学校から帰宅した巡が開口一番言うのに、かぼは顔をしかめる。
「ぬしが連れて行つてくれんのに、わちが単独で見てくるわけがな
かるうよ」

よく言つ……。

巡は小さな声で、呟いた。

いつもひとりで好き勝手に出かけてるくせに。

「しかし、今度は黄味の勝つた淡い色の水盤とは、爺さまの趣味も
よくわからんの」

「ミズの水盤は藍色だつたもんね。でも前のは天笠さんが選んだ訳
じやないし……って」

やつぱり既に水盤を見ているんじやないか。

どうしてこう、すぐわかる嘘を言つかな、と巡は思つけれど。ど
うせあれこれと言い訳を返してくるだろうから、何も言わない。あ
れから巡が天笠和菓子店に行くのに、かぼを連れて行つてなかつた
のは事実だし、そのことや拗ねているのだろう。けれど、一緒に行
けば菓子を要求されるし、それを却下すれば莊一郎が売り物を分け
てくれようとしてしまうし。それでは申し訳ない。

莊一郎は、ミズの水盤が壊れてから、すぐに新しいものを買い込
んできた。

ミズの水盤は、庭の池の中に沈めたらしい。
即刻破棄してしまったのはあまりに忍びないが、いつまでも壊れた
水盤を抱えているのは良くないと判断したことだらう。

失くした物に縛られていては、新しい一歩は踏み出せない。

今度の水盤も、長い時間を天笠家で過ごすことになるだろう。

「あまりにも人間くさかったの……ミズは」

かぼが、ポツリと呟く。

「そう？」

「人には人の、物の怪には物の怪の心のありようというものがあるのだが。違う時間、違う次元に存在する者同士だ。心のあり方まで同じだったら、色々と不都合もあるだろう？」

確かに、そう言われるとそうなのかもしない。

物の怪でなくたって、例えば人間と動物だって、多分まったく違うものだ。姿かたちも生活の環境も寿命も何もかも違う者同士が、同じ気持ちであるはずがないし、同じでいいとも思えない。

「人間に愛されて生まれた物の怪ならでは、なのだろうな。前にも言つた、人間への憧れが、とても強かつたからなんだろう」「おかげで厄介だったが、などと、かぼはわざとらしくため息をつく。

「天笠さんが、かぼが悪役になつてくれたおかげだつて言つてたけど」

かぼがミズを諭してくれなかつたら、ミズは納得できずに泣いたまま消えていたかもしれない。

けれどそんな巡の言葉には、かぼは気もなさげにフンと鼻をならした。

「別にそんなつもりはないわ。人の情という根拠を持つて生まれ、それを抱えたまま消え行くことができる、そんな幸福な存在だというのに、わがままばかり言つておるあやつに腹が立つただけだからの」

そんな風に言つたかぼに、巡はあの時かぼが呟いた言葉を思い出した。

『長ければいい』といつものではないわ
かぼは、そう言ったのだった。

「なあ、聞くけど……」

ポツリと呟く巡に、かぼはなんだと首をかしげてみせた。
「長い時間を生き続けるつて、やつぱり辛い？」

聞かれたかぼは、キヨトンと巡の顔を見返す。

「別に、辛くはないぞ。わちらにとつては、それが普通だ」
うん、と、かぼは自分をも納得させるかのように、ひとつ頷く。
「生まれることに意味のある存在だといつのは、つらやましく
もあるかもしかんがの」

まるで、天変地異のように生まれてきている、他の物の怪よりも
ずっと。

けれど、そういう自分の存在は、それが当然のことと物の怪たち
は受け止めているものだ。

だから。

生の刻に生きる者たちと、同じような心を持つていてはダメなの
だ。

例えば人なら、この空虚な時間の長さには、とても耐えられない。

「天笠さんも、寂しくなるかな」

たとえ一ヶ月という時間でも、ミズは一緒に暮らした娘か孫のよ
うな存在だったろう。それもあれほどまでに、人間くさい彼女がい
なくなつて。

「寂しいなどと思わせてはならんのだよ。なんのための人間社会だ。
メグがそう思うのなら、傍にいてやればいいだけの話だらう。苦に
なることでもなかろ」

「まあね……」

「わちだつておるしのー」

かぼはやかましいから、寂しいどころか鬱陶しくて仕方がないと

思つけど。

そんな風に憎まれ口を叩いてみても、それを聞き流す今日のかぼは上機嫌に見える。

「爺さまの心の中に、ミズはいるからの。問題ない」
それこそ生まれた時からずっとと共にあつた水盤。大切にしてきたその心が、消えてしまう訳ではない。

そう、巡もかぼも荘一郎も。ミズのことは忘れない。

生まれてきたことに意味を持つていた幸福なミズだけれど。
生まれてくることに、理由なんてなくたつていい。
そこから過ごす時間の中で、育てて行ける何かがあるはずなのだから。

それは形では残らない何かで。
だからこそ。
ずっと、そこにあつて受け継がれていく。

ミズという存在は、きっとそんな何かの、結晶だったのだ。

くれぐれも身体と誘拐と宿題の進行状況には気を配るよ」に、と、おかしな指示を飛ばす朝比奈の言葉を締めくくりに、一学期が終わった。

何だかんだと溜まつた荷物を抱えて下校する生徒たちの間を縫つて、朝比奈は巡の傍に寄つて來た。

「成瀬～、お前は特に気をつけるよお」

わざわざ近くにまで来てそんなことを言つ朝比奈に、巡は微かに目を据わらせてしまつ。

「大丈夫、です」

「大丈夫じゃないヤツほど大丈夫とか言つもんだ。あんまりひとりで変なところに行つたりするなよ。お前は実績があるからな」

朝比奈の言葉に、巡は實際何も言い返せない。

かぼに出会つたときもそうだったが、巡は大人しそうな顔をして好奇心旺盛な質なので、興味のあることに遭遇すると、それを追及するために無茶をしてしまうような部分がある。そういう時に他人を巻き込まないはある意味美点かもしけないが、ひとりで行動するが故に、何かがあるまで誰も気付けないという嫌いがある。

まだ小学校にあがる前、巡はひとりで遠くはなれた街まで歩いて出かけてしまい、迷子になつたあげくにヒツチハイクを繰り返して市内を一周した後で、農家のおばさんのリヤカーに乗つて帰つてきたことがある。

理由はただ、流れる川がどこまで続いているのか知りたかつたから。

けれど当然川沿いをそつ長いこと歩いて行けるわけもなく、途中で迷っていたはずの川を見失い、どうやって帰ればいいのかわからなくなってしまったのだ。

自分の住む町を正確に言えないほど幼かつた巡が、一度も警察のお世話にならずに帰ってきたのはまさに幸運だ。関わった大人たちが、誰も警察に届けようとはすらしなかったのも、おかしな巡り合わせかもしない。

一家の武勇伝として語られてはいるが、巡の担任になつた時にその話を聞きかじった朝比奈は、頭を抱えずにはいられなかつた。本当に、とんでもない遠方まで行つてしまつたり、うつかり誘拐でもされたりしたら大変なことになつていたというのに。

それ以外にも、地味な実績ならいくらもある。

天然な巡の姉を朝比奈も見たことはあるが、実際巡も相当なものだと思つてゐる。

「休み中はオレも学校にいないことも多いからな。緊急連絡先、ちゃんと控えてあるだろうな？ お母さんに確認しておけよ」

「はあ……」

なんで自分ばかり、こんなに心配されなければならないのだ。ちょっと心外な巡。

特にクラスの問題児という訳ではないのだが。

「実際、夏場つてのはおかしな連中もボコボコ出でくるもんだ。家に帰つても安心せずに、鍵をかけるのを忘れるなよ」

それはもう、学期末の注意事項でも散々聞いた。

「わかりました」

こういう時は、素直に返事をしてさつさと退散するに限る。

決してちゃんと話を聞いていない訳ではないが、教師の説教などというものは、反論すればするだけ長引くものだし。

「特に知らない人間には気をつけろよ。お前は巻き込まれ型なんだからな。オレの目の届かないところで、余計なことに首突つ込んだ

りするなよ！

担任は伊達ではない。朝比奈は巡の性格までしっかりと理解している。

しかしそういふのは確かだつた。

家に帰つた巡からその話を聞かされたかぼは、声を立てて笑つた。
「そりやあ仕方ないの。ぬしはちょっと田を離すと何をしてかすか
わからんから～」

かぼにだけは言われたくない。

大体、自分にそんな評価がついてしまつたのも、ちょっと前にか
ぼ絡みで意味不明な行動を取つていたのが決定打ではなかつたのか
と、つい人のせいにしてしまつたくなる巡。

まあ、確かに理由としてそれは大きいかもしけれない。

「そうか……夏休み……長い休みか……」

かぼは、急に何かを考えるよつた素振りを見せる。

「……何

「まあ、確かに気を付けるに越したことはないの。子供の長い休み
といつのは、大人の目が届かなくなる」

至極まともなことを言つかぼ。こうも現代事情通だと、生の刻の
間、時々しか田を覚まさなかつたという論が、ますますもつて怪し
くなつてくる。かぼに言わせると、物の怪は田覚めた段階の社会そ
のものを簡単に受け入れられるのだといふことらしいが。

かぼは、珍しく真面目な表情で巡の顔を見つめた。

「なるべくひとりにならないうつに心がける」

「は？」

「いくら休み中とはいえ、その言い方は少々大げさではないだろう
かと巡は思う。

「何だよ、急に

「ん？」

困ったように目を伏せ、腕組みをするかぼ。

「どうも最近、おかしな人間がうるついているように感じての」

「おかしな人間？」

「この近所でな。どうもここいらの住人じやない感じの人間を、何度も見かけてな。この家の前でも何度もか

かぼ、ちょっと嫌なことを言つ。

「思い過ごしかじやないのか？」

それが気のせいではないなら、ちょっとと氣味の悪い現象だ。

「なんと言うかな……今日もな、この家の前にそいつがいてな、ここから外を見ていたわちど、目が合つたのだよ」

「……」

目が、合つた？

「それで、どうした？」

「どうもせん。そのまますぐにいなくなつてしまつたから。まさに見ないフリ、といつた感じだつたかの」

かぼは見た目だけはまったく普通の子供と変わらないから、目が合つたくらいではそれが物の怪であることには気付かないだろう。けれど、かぼからアクションをかけているわけではない状況で、素で彼女が見えたということは、その人間は逢魔の力を持っているということだ。

それを、自覚しているのかいないのか。

微妙なところだ。

けれどどちらにしても、知らない人間がこの辺りをうるついているというのは、あまり気持ちのいい話でもない。

「母上がいな時は、できれば天笠の爺さまのところにでも行つていた方がいいかもしれんの」

「……」

それはそれで、色々と不都合が出てくるよひも思つ。

だが、大人たちにも知らせておくに越したことはないだろう。

今は母親は家にいないから仕方ないとして、莊一郎には知らせておいたほうがいい。かぼの言つ通り、物の怪絡みだと面倒だし。

巡は、早速とばかりに立ち上がつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341y/>

逢魔が時！

2011年11月26日21時50分発行